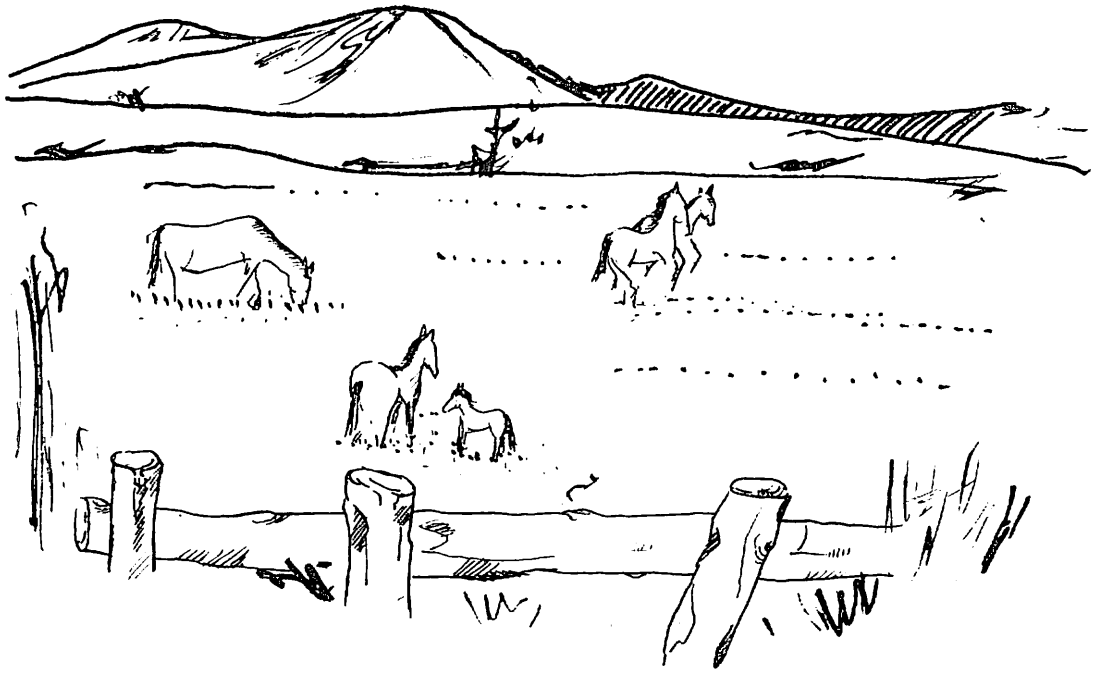
部報

北海道大学馬術部

昭和四十四年度



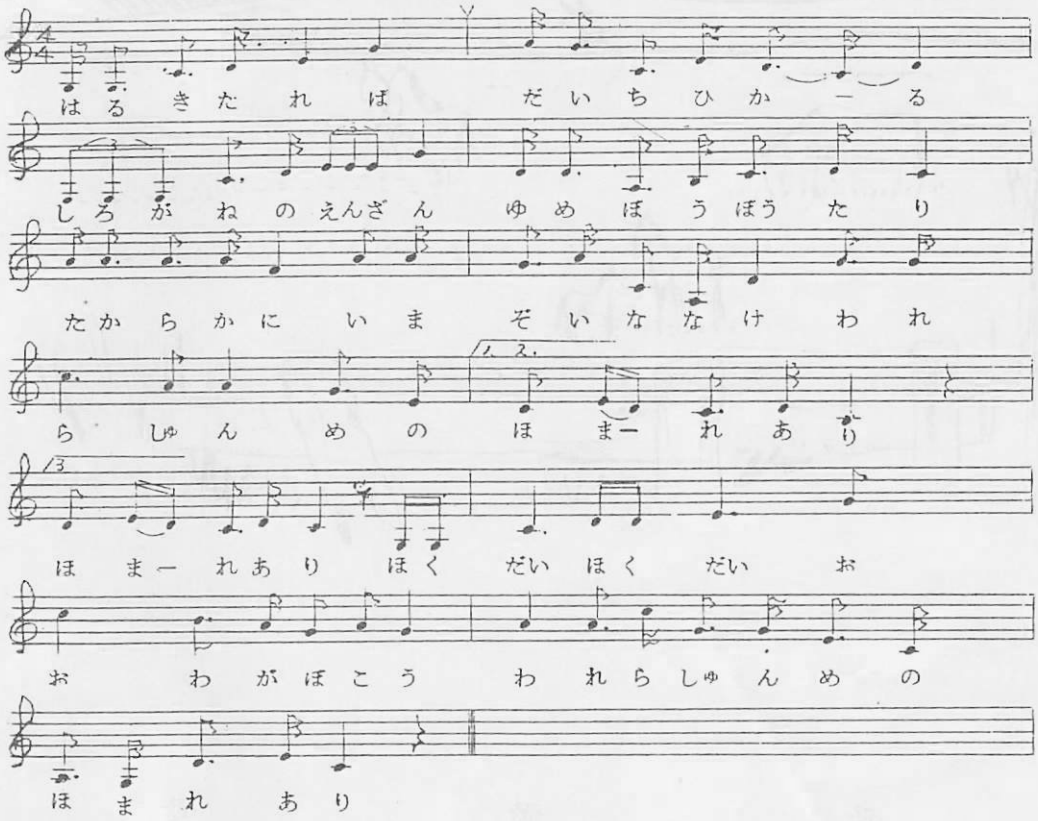
愛　それは
　美しい歌
　絶えざる叫びだ。
　そこには、
　大いなる感喜がひそむ。

愛　我々は
　それを
　あらゆるものにいだく。
　人が、人にいだき
　　自然にいだく。

愛　我々は
　それを
　なつかしき、
　わが愛馬にいだく。

北大馬術部讃歌

作詩　三浦清一郎
作曲　滝沢南海雄



北大馬術部讃歌

一、春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫々たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、時来たれば　旗をかざせ
青雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、雲流れて　旅路遙か
青春の孤杖　泥濘はばめど
凛然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！　北大！　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

目次

巻頭言……部長　半沢道郎……1
「初めに」……主将　太田清澄……3
札幌の近況など……監督　岡田光夫……4
戦績及び行事報告……記録　桝井明……5
役員紹会……8
会計報告……会計　松永由可里……9
マネージャー報告……主務　堤秀世……10
各馬調教報告
北彗号……四年目　松井亮……13
北瀕号……〃　〃……13
北秀号……四年目　堤秀世……14
北顯号……三年目　桝井明……18
北力号……O・B　春田恭彦……19
北晨号……四年目　中寺清久……22
北瓔号……四年目　太田清澄……24
悪文の例……コーチ　小栗紀彦……25
さようならの総括……前主将　本田徹……29
北瓔と……五年目　加藤公敏……33

卒業生プロフィル……37
先輩寄稿
馬のおもいで……昭和13年卒　高井久芳……38
落馬のあと……昭和14年卒　小田昇……40
そのころ……昭和17年卒　白取善三……42
あゝ無情「落馬、整骨院に通う」……昭和31年卒　大久保利彦……44
馬術……昭和34年卒　千葉幹夫……45
「新年会」……昭和40年卒　吉田賢一……47
おたより……49
部員プロフィル……53
黒板
K馬あ・ら・かると……二年目　山下秀樹……57
「馬」の字のある、「馬」のいない国……二年目　小島京介……58
寒気をついて……三年目　今井敏郎……59
馬術部失格……三年目　寺島亨……60
北翔号小特集
北翔号離厩についての経過報告……太田清澄……69
〃チビ〃回想録……後援会幹事　佐合義弘……70
「チビと共に」……春田恭彦……70
住所録……73

巻頭言

顧問教官　半沢道郎

百年来という異常天候で三月に大雪が降り、青草の香を嗅ぐのも例年より一ケ月位遅れそうですが、流石に陽ざしも明るくなって北国にも春の到来が感じられます。長かった冬期の寒い早朝の練習によって頑健な身体と不屈の強い精神力とを養うことができて、部員諸君は漲る力をこれからの活動に発揚することゝ大いに期待しています。

諸君の活動を後援する目的で作られている北大馬術部後援会では在札の先輩諸兄がもっと後援会の活動を強化する為に、新しく名誉会長に学長を推戴し、参与に原田札幌市長、大木札幌競馬場長、武田忠幸市会議員、庄内貞夫氏、小野忠氏等をお願いすることになりました。過日堀内学長にお目にかゝってお願い致しましたが、先生は「馬に乗れない会長でよいのか」と言われましたので、学生諸君が安心して馬に乗り、課外活動ができる様にして頂ければ結構ですと申し上げましたところ、快くお引受け下さいました。

もう何度か馬場と厩舎の移動問題について述べて参りましたが、残念なことに未だ何一つ決定していない状態で、初めに予定された場処には既にスポーツ・トレーニング・センターが施設を完成し、冬季オリンピックの強化練習訓練場として有効に利用されているのを見ますと、顧問教官として誠に申訳けが無い次第です。

しかしご承知のように昨年は学内の紛争で施設の損壊が多く、本部の施設部も非常に多忙で心配はして頂いていますが、重要文化財に指定された第二農場の建物の使用や管理について未だ方針が決められていない段階ですので、近く管理の委員会が発足するので其処で決められると思われます。

重要文化財として指定されると予定していた建物は最初一番大きい（産室、追込所、耕馬舎）と一番奥にある（収穫室、脱穀室、穀物室）の二棟であったので、一番南にある種牛舎の内部を改造して十二頭位収容できる厩舎とし、前に牝牛の放牧場であった第二農場の東南の三角地（北十八条通りに面した体育館の北側）に馬場を造って貰うつもりであったのが、文化庁の人が実物を見て古い建物の殆んどを遺すように指定された為に、種牛舎も含まれてしまって、そのまゝ使用すると種牛房六頭分で一房が大き過ぎ数が少なくて都合が悪く、果して内部の改造が認められるか否かゝ問題となります。またあの地区に新しく厩舎を建てることは文化財となる建物を含めて、あの牧歌的の風致を害する懼れがある

ので可能か否か解らない有様です。

現在の第一農場の馬場の埒に近接して東側には既に工学部のアイソトープ関係の建物が建てられ、北側にはすれすれまで同じく工学部の土木学科の研究棟が建てられる予定で雪が消えたならば整地工事に取りかゝり度いとの申出が農場にあった由ですが、農場長は部で現に使用しているので本部の事務局を通して進めるよう要望され、私にも連絡があったので施設部に行って来ましたところ、構内の排水工事の計画もあって、あの小川を埋めなければならない関係もあって早急には工事にかゝれないような話でした。

また古い厩舎と現在使っている部室のある建物も今年の憂次に取り壊わす予定になっていたのが、紛争の関係で使用しなければならない様なことが考えられる為に、取りこわしの延期が申請された由ですから、こゝ暫らくはこのまゝ使用できそうです。

然し古くて今にも倒れそうな狭い厩舎、急造の仮の馬房は危険なので何とか補　の必要もあり、更に移転に向って交渉して実現に努力したいと考えています。

この様な現状で今暫らく部員諸君に苦労をかけることゝ思いますし、また移転に関連して先輩諸兄や関係の皆様にご後援を頂かなければならないと思いますので何卒よろしくお願い申し上げる次第でございます。

〃初めに〃と題して

主将　太田清澄

時として春の嵐が吹いている！何年に一度の椿事ではあろう。

これが我々か。或いは亦、嵐の後のそれが、我々の行き着く姿であろうか。

私は、文を書くに当って、改めて、莫然として、私の胸の襟にあるものに対して、或る種の形を与え得たと思うのである。それが、浮ぶが儘に筆を執って、綴らせていただき度い。

一、「部」と云う名が意味するものはと問う時、私は、今の時点では判っきりと言い切る。〃人間の為に在り、人間性の為に在る〃と。これが唯一で全ての真理ではないであろうか。これ無くしてこれから記すであろう所の全ては論じられてはならない。

只、遡って、思い巡らすに、この基本的なる想いの上に立って、活動出来たであったであろうかと問われる。否である。それは曲りなりにも、指導的立場は在った私の非力、努力の欠如にその因を求められるかも知れない。亦、実際問題として、様々な面に於て、我々にはそれ丈の余裕は無かったのかも知れない。

併し、敢えて、この世界の流れに逆行しようとも、私は、部員各員に私の信ずる所を明らかに仕度い。〃部は部員各自にとって、自分のものである、自分をそこで粗末にする事は、自己に於る冒瀆に通じる〃。これは、私個人に対する自戒にも他ならぬのであるのだが。一考を待つ。

一、併し、我々はこれ迄に、一つの事を判っきりと経験して来た。所謂々〃勝てば官軍的な〃発想の力に押し潰され様として来た。果して、何事かをやる協会に於ては、一つの結果を問われる事は、否定は出来まい。併し、結果そのものの性質迄、云々される事は、判っきりと否定し得る。茲に、私は、強くなると云う意味よりも、寧ら、栄んになると云う言葉の持つ意味に惹かれる。

但し、安易なるものに流れていく事丈は厳に慎しまなければなるまい。栄んになったが故に当然強くなる事は在るであろうが、それを方針の誤りで、無に帰していってしまったとしたならば、その責は大いに問われなければならないであろうが。我々は引き続き、伊式馬術に於る道を極めていき度い。そこに於てそれ丈の覚悟は、私をも含めた上級生には判っきりと存している。

一、即ち具体的な問題に於る改善は、騎乗方法に帰するものであると判断される。之は決して、言い訳け的な判断では無い。故障馬の離厩を、無理の無い範囲内にて、一日も早く決定する事が、続く、道への一段階である事は明瞭なる事である。それが故に、敢えて、北翔号迄も手放したのである。この所謂る棟体謝(たくい)が或る程度の成果を収める事は、短時間では解決されない類のものを含む。この点に於て、先輩各位には、一層の御理解を望むものであります。

一、各馬の調教方針を総括的に取り扱う事は、一応、各チーフ

の文にて替えさせていただき度いと思う。亦、基本的な考え方としての進め方は、私の拙文〃北嶺号〃の中に記して置く積りである。

最後に主将として就任以来、今日迄、身体上又、精神上の理由に依りながらも、必ずしもその任を全う仕得なかった事について、深く、部員諸兄にお詫びするものである。

これを以って、部報の一文とし度い。

札幌の近況など

監督　岡田光夫

先に発刊された馬術部の報で私がオリンピック関係の仕事で多忙なため原稿がもらえなかった旨の一文が掲載され誠に恐縮して居ります。事実一九七二年の冬季オリンピックを控え今札幌市内全域工事現場と云ってよい位であって札幌を離れて居られる皆さんには想像もつかぬ事と思います。地下鉄工事、集中暖房配管工事、ビル建築ラッシュ、道路工事等々。日本人得意の突貫工事とは申せ大変なものですが、これらの工事が一斉にゴールインした時の札幌の姿を是非御覧戴きたいと思います。更に今年の冬は二度まで猛低気圧に襲われ、特に三月一四日からの三日間は百年に一回と云う荒れ方で市内の中心から六料の北方面の交通はすべて絶し、近郊のサラリーマンが三日も家に帰れなかったと云う騒ぎで、部で鍛えられた私もいさゝかグロッキー気味で居ります。従って部の方も一向に御無沙汰勝ちで本当に申訳けなく思って居ります。部の方も今迄いろいろの批判がありましたがこのことはとりもなおさずよい成績を収め様、試合に勝ちたい、昔の栄光をとりもどそうと云う部員諸君の努力であり、或は迷いであったかも知れません。最近はだんだん一つの方向を見出し従来の頑さがなくなって来た事は大変よろこばしい事であると思います。この事も一重に同好会の小野さんをはじめ馬を愛する方々の御努力と感謝して居ります。さてこの一年北大も御多聞にもれず大学紛争の嵐の中に悩みつづけて参りました。私自身も道路の保全のため或は封鎖解除後の交通確保のための作業計画を樹てるため、西五丁目電車道路に築かれたバリケードの中に入り又は早朝の人影もない催涙ガスのただよう北大周辺を調査したりしましたが、学外にあってその根本的な原因も知らない私にとってはただ空しさだけが感ぜられました。しかしその中にあって馬術部は只管練習に励み、早朝から恐らくテレビで御覧になった方もあろうと思いますが封鎖解除の日でさえも平常通り練習が行なわれた事を皆様に御知らせ申上げて粗文を終ります。

戦績及び行事報告

記録係　桝　井　明

4月	10日	入学式デモンストレーション
	13日	記録会
	19日～21日	中央より広田コーチ来札
	27日	遠乗会
5月	2日	新入生歓励コンパ
	11日	対酪農大定期戦
6月	1日	札幌地区自馬大
	23日	大学村で草刈り大作業
	28日～29日	七大戦（於馬事公苑）
7月	6日	北海道自馬大
	7日	アバロン乗馬学校の武宮氏来部
	23日～30日	1、3年目　日高合宿（北大牧場）
		2、4年目　青草合宿（部　　室）
		3、4年目　鎌田牧場へ
9月	1日	道大向貨車積
	5日～　6日	道大
	17日	役員交代カンパ
	25日	加藤（元）先輩練習指導
10月	5日～11月10日	競馬場バイト
	21日	新馬（旧名セントオール）入厩
	22日	全日本学生自馬大向貨車積
11月	4日～10日	全日本学生自馬大
	6日	北飄の額届く（S．43年度卒業生贈）
	9日	記録会

１３日　北飄の墓掃除

１６日　部内競技会　同好会が圧倒的強味

１２月　　２日　新ストーブ入る

５日　体重測定

１４日～１９日　１年目対象強化練習

１月　　２日　初乗り北海道神宮参詣

半沢部長、八木、佐合先輩、小野氏参加

１５日　雪上乗馬大会（於札幌競馬場）

１５日　新年会（於義経）

３１日　北日本幹事会（於北大クラーク会館）

２月　　１２日　北翔号離厩　日高牧場へ

５月１１日　対酪農定期戦

複合	末長、駿雖	（酪農大）
	大場、シーザーライト	（　〃　）
	加藤、北瓔	（北　大）
小障	小林、シーザーライト	（酪農大）
	松井、北瓔	（北　大）
	開、　デイリー	（酪農大）
中障	加藤、北瓔	（北　大）
	本田、北彗	（北　大）
	山家、デイリー	（酪農大）

６月２８日～２９日対８月七大戦（馬事公苑）

	東北大	東　大	名　大	九　大	北　大
東北大		×	○	○	○
東　大	○		○	×	○
名　大	×	×		○	○
九　大	×	○	×		×
北　大	×	×	×	○	

優勝　東大

4位　北大

8月7日～10日　北日本馬術大会（岩手県水沢市）

◦標準中障碍飛越競技

1位　サイクロン　佐藤（福島馬連）

2位　舟　　政　山口（帯畜大）

3位　凱　　施　水平（秋　　田）

　　北　　瓔　加藤（北　　大）

◦六段飛越競技

1位　サイクロン　佐藤（福島馬連）150完飛

◦総合馬術競技

1位　柏勝　　稲　岡　（帯畜大）

2位　駿光　　久保田　（東北大）

3位　舟政　　山　口　（帯畜大）

4位　柏鷹　　生　駒　（帯畜大）

9月6日～8日　北海道馬術大会（帯畜大）

◦複合馬術競技

1位　柏鷹　　生　駒　（帯畜大）

2位　柏勝　　稲　岡　（帯畜大）

3位　シーザーライト　大　場　（酪農大）

北大　北晨（橋口）、北翔（春田）

　　北瓔（加藤）、北彗（本田）

◦小障碍飛越競技

1位　雲霧　　田　上　（帯広乗馬ク）

北大　北晨（中寺）、北彗（太田）

◦六段飛越競技

1位　ルイシー　　小　野　（札乗ク）130完飛、140落

2位　シーザーライト　大　場　（酪農大）

3位　キングフレーム　　庄　内　（札乗ク）

・標準中障碍飛越競技

1位　柏鷹　　生　駒　（帯畜大）

2位　柏勝　　稲　岡　（帯畜大）

3位　勇勝　　安　藤　（帯畜大）

北大　北晨（橋口）、北彗（本田）

北瓔（松井）、北翔（堤）

・選抜中障碍飛越競技

1位　柏勝　　稲　岡　（帯畜大）

北瓔　　加　藤　（北　大）

11月4日～10日　全日本学生自馬馬術大会（小倉競馬場）

北瓔　　加　藤　（北　大）

役員

主将	太田清澄
副将	松井亮
主務	堤秀世
会計係	松永由可里
飼育係	中寺清久
（薬品）	
記録係	桝井明亨
馬具係	大見太一
備品係	嶋田豪
作業主任	松井亮
体育会委員	山下秀樹
後援会	前田和子

44 年度会計報告

4年目　松　永　由　可　里

月	収　入	支出								
		飼　育	備　品	馬　具	鉄	遠　征	マネージャー	記　録	特　別	計
10	312,580	41,250	3,605	0	0	90,000	8,000	300	3,290	146,445
11	146,680	300,270	6,805	295	0	0	0	920	10,729	319,019
12	193,884	11,340	160	23,190	95,800	1,700	12,480	0	23,540	168,210
1	11,500	300	1,000	0	0	0	0	2,920	960	5,180
2	7,000	200	0	0	0	0	0	380	760	1,340
3	29,000	560	0	0	0	0	25,000	955	341	26,856
計	700,644	353,920	11,570	23,485	95,800	91,700	45,480	5,475	39,620	667,050

マネージャー報告

主務　堤　秀世

現在の部の山積みする問題を見た時、のんびりと馬などに乗っておれない気がする。役員交代のすぐ後の仕事は競馬場のアルバイトであった。

部員の協力により三〇数万の金となった。しかしこの金が、すぐに消えてしまった。ホクレンより蒸麦が安く買えると云う話があり、アルバイトの金を全部出す事にした。ここでマネージャーとして、もっと考えるべきであった。

実際にはほとんど安くはならず、ここで貴重なアルバイト代を使ってしまった事は、なんとしても残念な事である。

現在、学生部からの援助は5頭分の飼料代として六〇万円だけである。

これで一〇頭（北翔離厩により2月から9頭）を飼って行く訳であるから、部の財政は、火の車である。

鉄代も、まったく馬鹿にならない。

以下、現在の部が直面している問題について述べて行きたい。

○厩舎、馬場の移転

馬場の東側には工学部の建物が、西には農場の豚舎、鶏舎がすぐそばまで来て、今年中には北側にも工学部の工事が行なわれる事になっている。

一方、部室のある、あの大きな建物からは、鶏や豚たちまでが新しい所へ移り、今年の春からは我々馬術部員だけが、廃墟同然の建物に住む事になる。

厩舎も荒れほうだいと云う事で、今や真剣に移転の事を考えなければならない。

○馬籍問題

北翔号が2月12日、日高の実験牧場に帰って行ったが、この事務手続きをしている時、始めて、部の馬全部が北翔までに籍がないと云う事を知らされた。

北翔以降に入厩の馬の場合、代々のマネージャーの努力にもかかわらず、どこの籍にもはいれないままだった。

北翔の場合、農場の籍と思っていたが、農場では学生部に移管したと云い、学生部では受けていないと云う事であった。

ところが、いざ日高に返すと云う事になったら、籍がないのではまずいので農場の籍と云う事にするから、部のほうで承諾してくれと云う事である。

大いに不満とする所であったが、これからの事を考え、やむなく承知した。

今後、農場の籍にする事はほとんど不可能だし、またするべきものではないので、今我々のする事は馬達をすべて学生部の籍とする事である。

そして同時に予算増額の要求をしなければならない。

○農場との関係

年年歳歳、農場との関係は疎なものとなり、悪化して行くよう

に忠われる。
我々が一、二年生の時には、ジャガイモ集めやデントコーンもぎなどのアルバイトをし、乾草をもらった。
毎回ジャガイモを何個かくすねた事とか、デントコーンの間からスィートコーンらしきのを見付け、かじって苦かった事とか云う事も、昨年はなかった。
農場の人に、何かアルバイトはありませんかと聞いたら、そんな事は今では最新式の機械がしますからねと云う素気無い返事。
また農耕馬にも乗れなくなってしまった。二年目の春、敬久号によく乗った。どんな障碍でも、ぶちこわして行く馬だった。
ところが敬久は働かないと云うので（それだからこそ我々が乗れたのだが）、肉にされてしまった。
かわりとしてよく働くと云う同じ青毛の馬が来た。先日、パドックにいたが、そだに誰もいなかったので飼を持って行き、裸馬に乗ろうとした。そしたら、がぶりとかみつかれた。そしてあやうく蹴られる所だった。
それにしても、二頭のロバの腹の大きい事よ。
ごく一部の事を見ても、農場との関係はかわっている。しかし、いろいろな点でまだまだ農場の世話になっているし、こちらからものをたのまなければならない時もある。そんな時、ルイシーの小野氏が間にはいって下さり、部にとってはどれだけ助かっているかわからない。
部馬はどれも農場の籍にはいっていない事だし、農場からの経済上の援上がまったくなくなった現在、たとえば厩肥を例にとっても、我々はもっと有効に使わなければならない。実際問題として、冬から春にかけては、寝藁は金では買えない。
農家は寝藁を秋には売ってしまうか、機械で細かくくだき堆肥としてしまうそうだ。
寝藁と厩肥の交換についても部としては思い切った態度で望むべきだろう。

○後援会
有名無実化していた後援会事務局が加藤正昭、春田両先輩により、しっかりしたものになった。
しかし多くの問題をかかえているようである。
部としても、マネージャーとしても大いに協力して後援会活動を栄んなものとして行きたい。

○先輩諸兄へ
日頃の飼無沙汰を御詫びします。
部報作成の時や、後援会費納入の時だけ、お手紙し、平素の部活動の報告を怠り、非常に申し訳けないと思っています。
ために、何かとお互いに誤解する事が多いようです。
確かに昨年度は、試合において目覚しい活躍は出来ませんでした。しかしこれがイタリー方式云々と云う事には決してならないと思います。
未熟な私たちは、先輩の貴重な体験談や御意見、御指導を待っているのです。
俺達の言う事を聞かないのなら、援助もやれんと云う事が絶対ないようにと願っています。

また昨年度は幾人かの方が後援会を脱会されました。
非常に残念に思いますが、これも皆、私たちが先輩の事を思うのが少ない故だと出いますと大いに反省する所です。
今後、名簿を完全なものにし、出来るだけ頻繁にお手紙するつもりですので、よろしくお願いします。

＝各馬調教報告＝

北彗について

四年目　松　井　亮

四十四年九月末からこの馬を受け持った訳ですが最初の一ヶ月ぐらいはろくに歩度も伸ばせず乗る意欲が全くなかった。障害は石垣や固定の様な物は跳ぶが、単一、平行などバーの入った物になるといやがるという状態で、速歩ならば一mくらいのバーは跳ぶがそこで駈歩にきりかえると障害直前でピタリと止まり、バーの上に見事に落とされた。ひき続き同じ障害を跳ぶようになるまで何度も試た。御陰で短期間に落馬の最高回数を記録した。十一月中週二～三回はこのように一mくらいのバーを用いた障害飛越を練習したが、わずかに希望のわく日と失望する日のくり返しだった。こういう練習の際、速歩、駈歩で徹底的に鞭で頭を下げさせた後は頭頸を伸展低下し扶助に従順になってよく跳んだ。

小栗コーチにも「頭を下げる様にさえすればあとは問題ない」と言われた。また右駈歩の発進がうまくゆかずいろんな方法でやったが駄目であった。しかし十二月に入ってから偶角を利用して右手網を引き右脚で強く合図してようやく出るようになった。

先に述べたような飛越練習はこの馬の調教ではなくむしろ人の為の練習であった。私の前に調教者四人を経た古馬であるが、新馬と同様に調教してゆかねばなるまい。軟かい口向を作る事がこの馬に関する課題である。少し強く手網をひくとすぐに顎をあげて反抗する。これを鞭で下げさしても鞭を使わなければもとに戻ってしまう。そこで脚と拳で顎を撓る事を教え込む方法を用いてみた。これは先に北凛でやって一応成功したのでこの馬でもできると思った。北凛よりこの馬の方が反抗的で手間がかかるのではないかと思ったが意外と早く覚えたようである。しかしまだまだ速歩、駈歩でできる段階でなく、常歩と短縮速歩で少し撓る程度であり、目下訓練中である。

北　凛　号

四年目　松　井　亮

調教者太田君の健康上の都合により四十四年　　月からこの馬に乗ることになった。性質は鈍くて体は硬く反動が大きく、時々拍車に反抗するというやっかいな馬で最初は当惑した。

入厩して二年経ってもキャバレッティを満足に通過できぬ有様で、「離厩させろ」という声が高かったが三年目あたりから（矯口先輩の調教で）少しは馬らしくなった。ところが駈歩だと馬場半分ぐらいの回転もできず、六段に使うしか仕方がないのではないかと噂された事もあった。強いて受けで運動させてきた為口が非常に硬くなっているのでまずこれから矯正していく事にした。

常歩で手網を伸ばし、一方を引いて曲げ、回転を左右交互にくり返した。また速歩駈歩で大きく八の字、輪乗としながら手網をゆるし、鞭で頭を下げ、脚を強く使った。この結果左右に随分軟

かくなり駈歩急回転も可能になった。馬場でもやはり手綱を伸ばして自由に速歩をして日に五十コぐらい障害を通過した。この馬の障害飛越はライナーで、跳んでいるという感じがしない。十二月末に一度外へ出た所、車をひどく恐がるので、一月に入ってから毎日構内、電車通りを歩いた。馬場の外に出ると歩度が伸び、漫性の跛行もやらないという特徴がある。一月中はこのように構内で馴致を兼ねて速歩、停止、発進、前肢旋回を多くやった。

一月十五日に競馬場で試合があり小障害に私と今井君（二）が北凛で出場した。結果は私が三拒止、今井君が一拒止だったが敗因は障害に向ければ跳ぶものと過信し、脚が足りなかった事、手綱が長すぎた事であった。まだまだ甘い。この頃から、鞭を使わずに頭を下げさせようと思い、主に馬場の外で常歩で手綱を控えて攘らず脚でどんどん推進した。一週間位で顎を攘るようになったのでこれを速歩に応用してみた。これも約一週間で覚えた。現在地盤が悪くてろくに運動できないので駈歩もほとんどやっていないが、時々やってみるとかなり頭頸を下げるようになっている。

腰と前肢が弱いので構内の小さな坂の登降をおりこんで練習している。それから飼料についてだが、体高の割に肉づきが悪いので、もう少し運動できるようになったら内麦を外麦にきりかえてみるつもりである。もとの名をクリーライトといい、八〇〇万円で買われたそうだが不肖の子らしく動作は誠にのろい。だがそれだけにつきあってみると愛着を感じる馬である。

北秀号

四年目　堤　秀世

現在、私はいろいろな面で混乱状態にある。北秀号にはサブの形、チーフの形で一年以上も乗って来た訳だが、この事自体まったく間違った事だと思っている。

このすばらしい馬に私のような未熟な者が、今まで一年以上も乗ったと云う事が。

そしてこれは部に取ってもデコに取っても一つの大きな不幸だと云えるだろう。しかし私個人に関して云えばこれほど、幸運だった事はないであろう。

調教と云う点からデコに教える事はほとんどなかったが、デコから教わった事は山とあるのだから。

今ここで、デコが北大に帰ってから現在までの事を振り返る事により、この混乱状態を整理したい。

私が一年生の夏にデコが入厩した。

この頃の事や、その後二ケ月ぐらい春田さんが乗っていた時の事は、これと云った思い出はない。

十二月から村井さんがチーフとなったが、ほかの馬の事に頭がいっぱいで、これまた記憶はまったく薄いものである。

初めてデコに乗ったのは一月十八日だった。外に行き村井さんに前を歩いてもらって、電車通りの一丁東の道を北の方へ歩いた。

乗って見て感じた事は首が細くずっと下の方にあり、首だけほかの馬と替えたようであり、これでは落馬しそうになった時、首につかまれないと思った。そしてまっすぐ歩かない事に驚いた。

調教を始めたばかりなので、重い鞍や人間を乗せて自分自身のバランスが取れないのだろう。

新馬に下級生を乗せるのには反対だが、こう云う経験は非常に貴重だと思う。

調教がまだの馬とある程度進んだ馬とを比べて見る事は。

現在の部にはまったくの新馬はいない。

昨年、新馬や新馬同然の馬がいたが、一年生のうち幾人がこれらの馬から何か少しでも学んだであろうか。

村井さんに、「速歩になっても手網は引くな」と云われたが、右へ行ったり左へ行ったりノタノタ歩くばかりだった。この時、ただ漠然と将来デコに乗ってみたいと思ったが、そのうちデコの事は頭から消え去った。

二年目になって少しは馬術に熱心になったが、これは学校の方が個人的な理由から暇になったと云うだけの事である。

チーフだった村井さんは勉強がいそがしくなり、引き継いだ寺崎さんも学業の方からの事で乗れなくなり、デコの調教は遅々として進まなくなった。

しかし馴致だけはよく行なわれ、持前の度胸の良さから、新馬らしからぬ落着きがあった。

私個人の転機のようなものが二年目の秋にあった。

十月の中旬にチビに腕を蹴られた。

これ幸いと練習を一週間ほどさぼった。

ひさしぶりに練習に出たら、小栗さんにおこられた。「馬鹿者、腕を蹴られたぐらいで練習を休む奴がいるか。」

何かと理由をつけて休んでいた自分の間違いに気付いた。

また、十一月に行なわれた全日本学生馬術大会に北瑛の貨車積要員としてついて行き試合を見て、何かわからないが頑張ろうと思い、それからは毎日練習に出るようになった。

この頃、山下さんがチーフとなっていたが、個人的な事から練習に来なくなった。

私がサブのような形であったが、この頃の自分の無知なのには、まったくなさけなくなる。

十二月十五日、小栗さんからデコの骨瘤がひどくなっているのを指摘された。毎日のように手入れをしていながら、骨痛だと云う事を知らずにいたのである。

この左前肢の管骨瘤はその後、どんどん大きくなり、調教上どれだけマイナスになったかわからない。当分、常歩運動だけと云う事になった。

一月の終りに二年目同士が集まり、サブについて話し合った。

どうした訳か、乗りたい馬の希望がダブらなかった。

私は上体、拳が堅いのでハミ受けのむずかしい北翔や北瑛は乗れない。北彗や北秀ならと思ってこの二頭を希望した。

しかし、ここでも自分の愚かさが悔まれる。何故、上のような馬鹿げた事を考えたのか。「若い馬には老練の乗手」という諺がある。そんなに北秀に乗りたいのなら何故ほかの馬で自分自身の技術をみがこうとしないのか、鞍数が多いのだから強く北翔に乗りたいと言うべきではなかったのか。

二月五日。新馬配発表。
小野さんがチーフ、私がサブとなる。
はっきり決まるまでデコはほかの馬といっしょに、一年目などの練習に不規則に使われていた。
特に障碍の練習に使われていたのは非常にまずかったと思う。
一年生が乗り、障碍飛越で手綱にぶらさがったり、ハミを当てたり、拍車を入れたりしていたが、人間を信じて障碍に向って行っているデコに取って、それが調教上どんなにマイナスになった事だろう。
小野さんがチーフになってから、常歩だけと云う事になり私はデコに乗りよく外を歩いた。
運動不足のため張っていた。
何度か突走られた。
共に私が乗っていて、二月と三月に追突をやらかしてしまった。
真白い雪の上に真赤な血、ギクリとするものである。
骨瘤と追突により、調教はまったく進まない。ただ速歩からの口笛による常歩や停止はきわめて良い。
ある日、山村さんに乗ってもらったらすばらしい伸長速歩をした。お前もやってみろ、と言われた。なかなかうまく行かなかったが、一度すばらしい伸長速歩になった。
人間が宙にほうり出されるような感じ。
速歩とも駈歩とも違う感じ。
三月から四月にかけて、馴致は充分やっているはずなのに、物音に驚く事がひどい。
四月十二日、恵廸寮裏に行き、始めてデコで障碍を飛んだ。
力にあふれたあの飛越の感じ、背中がぐっと降起したあの感じは絶対忘れない。
うれしくて仕方なかった。
五月、六月、七月と骨瘤がどんどん大きくなる。騎乗日誌には骨瘤の事が続く。
絶対的に大きい、とてつもなく大きい、新たに出来たのとくっつきヒョウタン型になる。跛行しない時は、よく障碍も飛ばせたが、着地後よく突走っていた。
八月十三日、小野さんが北力に蹴られた腕を骨折する。
練習が終り整列し、馬けい場に帰ろうと云う時デコの隣りにいた北力が人参をもらっていた。それを見たデコは自分にもとばかりに北力に近づいた。両方の馬を離そうとしたら北力がデコを蹴ろうとした。間にいた小野さんが蹴られてしまった。
何と云う事だ。
今まで何人かの人がデコに乗って来たが皆調教半ばでチーフをおりる事になった。
休部、退学、退部、怪我。
よし、もう誰にもまかせれない俺がやるんだと強く決心した。
鞍数は多かった。しかしその大部分と云っても良いぐらいがデコでの常歩である。
ほかの人が駈歩や障碍をやっているのを見ながら、デコに乗り常歩で歩いていた。
非常なあせりがあった。
九月のある日、右前肢に骨瘤を発見した。ショックであった。

左前肢のは、ほぼ固まりかけていたのに。いったいどうしたら良いのかわからなかった。

両方とも雪が降る頃には固まった。

チーフにはなったものの、骨瘤骨瘤で長い間悩まされたものだから、固まっても、人間のほうが思い切った運動をなかなか出来なかった。

くずくずしている私を見て、小栗さんは少しずつ大きな障碍を飛ぶよう要求して来た。一m以上のも、どんどん飛ぶ事になった。

二十cmぐらいの余裕を残して飛ぶ。

人間がついて行けず、なさけなくなる。

人馬共に無理な事もあり、逃避、拒止と云う事がたまに起こる。

ただ、飛越時の頭頸の伸展、背中の隆起と云う点においては、乗っていて非常にたのしく感じられ、楽しくなる。

成人の日、競馬場で試合があった。

決して試合に出れる状態ではなかった。

正月に風邪をひき十日まで休んだ。

その後、吹雪だったり寝坊をしたりして、満足にデコに乗っていなかった。そんな状態で試合に出たものだから、結果はひどいものだった。

小障碍ではダブルのBで切られた。中障碍ではゴール出来なかったばかりか、二度も落馬をした。

デコに取って決して飛べない障碍ではなかった。準備運動の失敗でもあり、人間にも余裕がなかった。また障碍前でハミがはずれたのが拒止の一番の原因だ。

最終障碍で失権したが、今もって馬鹿だったと思うのは何故、もう一度飛ばせようとしなかったのかと云う事だ。正式の試合ではないのだ。拒止されたまま帰って来たのを強く反省している。

一月の下旬、馬場で準備運動不足のまま不用意にカマボコ障碍に向け逃げられた。

その後で思いきり脚を使い歩度を伸ばし、歩度の伸縮を行ない、一mほどの平行に向けた。ぐいと頭を下げ鼻で障碍の臭いをかぐようにし、力強く踏切り背中を隆起させまた頭を下げ着地すると云うすばらしい飛びをした。推進も脚もごくわずかで良かったし、随伴もきわめて楽だった。

あの感じは絶対忘れたくない。

二月にはいり大雪のため馬場も満足に使えなくなり、道路も堅く馬はいかにも走りにくそうだが、今が大事な時期だと思い慎重に乗っている。

現在、調教上問題となる事は次のような点である。

頸をつっぱったまま走る。頭が高い。回転の時肩から逃げる。

短縮駈歩がまずい。

今までの調教過程を振り返ってみた場合、部の方針に大いに不満や疑問がある。それらは私自身において、解決されてはいないが、今後デコをより乗りやすい馬にして行きたい。

筆を置くにあたって今思っている事は次の部報にはもう少しましな事が書ければ良いと思っている。

北　顎　号

三年目　桝　井　明

北顎号は昭和四十四年九月に太田現主将より僕が引き継ぐ事になりました。顎について以前特に印象に残っているのは、飛越後のアラレもない自分の恰好と田中(力)さんが騎乗して、一m二〇cmを飛越した時の光景である。体からはバネが感じられず、石ころをコンクリートの上にぶっつけてはね返るような飛びっぷりなのである。生年月日、血統全てが謎に包まれているのに年令十六歳で通っている。案外若いのかも知れないぞと一人合点に思ってみたりもするのだが。「健康だけがとりえだなあ！」と誰かが言っていた様に故障すればハイ！ソレマデヨ！の運命がいつもつきまとっているのだなあと思うと、何だか不憫に感じられる時がある。

年令的なハンディを背負ったこの馬は、将来性を考えるならば、ややもすると調教を軽く考えがちになるものである。事実、僕自身も顎の調子が仮によくなってもあと何年活躍できるものなのかと考え始めると、調教して一体どうなるというのだ？大きな試合をめざす訳ではなし、もっとバネのある若い新馬の方が将来も楽しみだし、乗りがいがあると云うものではないか〃と、少しも前向きな姿勢にはなれなかった。しかし、現在ふり返ってみるにそれは大きな考え違いをしていた様である。確かに若い新馬の方が未来への可能性を、より秘めているには違いない。だがその可能性なるものは調教者を得て初めて実現しうるものであるはずだ。

人間が馬を調教するという作業に並々ならぬ忍耐と努力が要請されるのは、どんな馬にも云える事だと思うし、ましてや馬歴数年の若輩が能力を推測して馬をエリ好みすることの方がおかしいのかも知れない。好きでたまらない馬に乗れることはうれしいが。

理論・技術、種々の点で未熟ではあるが北顎の調教に全力を注ぐことを通じて、そこから顎と僕との間に何らかの目には見えない絆をつくり出そうと努めている。それは云はば僕に対する顎の信頼を求めながらも暗中模索の状態に居る様なものだろう。これからどんな幸運に恵まれて馬を調教することがあるかも知れないが今以上に魅力があるとは断言できない。

少し余計なことに紙面をさいた様だが、具体的な調教作業を述べると、馬場状態の悪い時は馴致を兼ねて大学構内を歩き回る。

途中常歩にて停止↓後退、半巻き、前肢旋回を何回もくりかえす。停止、後退に際しては膝をしめる様にしているのだがまだ重い感じでやっと止まる。アゴを巻き込んでハミを避けようとする。

ハミに出る状態で停止することは数少ない。挙が少しでも乱暴になった時にはアゴを引き込む事著しい。常に軟かい挙に心掛けているのだが、まだ僕の方が〃カッ〃ときて乱暴な操作をしてしまい猛省すること毎度の事。速歩↑↓停止をまぜながらやっていると効果が大きい様である。馬場で速歩ができる状態では輪乗りと低障碍に努めている。輪乗りでは常歩↑↓速歩↑↓駈歩、停止・後退をまぜてくりかえす。この時僕の方がバランスをくずしやすくなる。脚を使う時バランスをくずす事が多いが軽速歩の時には前後に特に不安定になる。右手前の駈歩が極めて不得手で、いつも円からはみ出す。障碍の方はバーを巾二十cm程にして三本くらいキ

ャバレティ状においてあるのを速歩通過させている。何よりも沈静して飛越する事に重点をおいている。時には巾をつけ、飛越姿勢において頭頸を使わせようとするが、従来のフォームで相変らず首から突っ込んでいる。北驃に関するかぎり彼のフォームを何とか矯正してやらないうちは（と云っても驃自身が体得するのだが）高い程度にうつることは出来ないと考えている。馬体について現在云えることは、練習前にいつも四肢に熱があるが跛行しないのでずっと使っている。骨瘤は出ていない。毎日、汗をかく少し手前の運動量で飼付蒸麦量は朝二昼二夕三少し腹を減らしている様子で寝ワラは入れるとすぐに食べてしまう。毎晩大体横になってねているようだ。何分、馬の体力・運動量・飼付量の相互関係に関する知識不足で不安になる。毎日欠かさず驃に乗っている訳だけれども、一体良くなっているものやらどうやら？昨日までよく出来たのに今日は、まるっきり駄目なことがよくあり悪くなってるのと違うやろかなあと不安と期待が混ざって複雑な気持ちが蓄積している。春には新入生が次から次へと、それこそ僕の乗る時間がないくらいに乗るだろうが対酪農大戦、道自馬大には万難を排して臨みたいし調子如何では道大、北日本大会も夢ではないと思う。だが、それまでにはまだまだ不充分な点の多いのは百も承知だし、驃よりも二倍も三倍も早く僕の方が上手な騎手にならなくてはと意気込みだけは人一倍のつもりである。

北力号

春田恭彦

昭和三十九年三月二十四日生　競駱チカラ
サラブレッド　鹿毛
昭和四十三年八月三十日入厩

四十三年の札幌中央競馬で左前肢を痛めて我部へ寄贈して載いた馬である。故傷は胸帯炎でかなりひどいようであった。それ以来ずっと休養させ故傷の回腹を待った。四十四年春から軽作業を初めたが運動程度でほとんど調教らしいものはしていない。

小生が乗り出したのはこの年の秋からである。

競馬時代ダービーを走っただけあって、能力はすばらしいものが感じられるが、もともと、故傷馬であり、それが休ませれば完全に治るものかどうかわからないので、健康な馬同様、練習に、調教に供用して駄目であれば、放出するという条件つきで、現在乗っている。昨年秋の役員会での申し合せ事項として今年の四月をメドに何頭かいる万年新馬又は故傷馬の放出を考えているが、何とかこのTIME　LIMITまでに北力を形あるものにしたいと思っている。

調教日誌から、いくらか抜すいして北力の紹介としたい。

十月×日：：速歩でキャバレッティを通過するのに今まで、常に大きく飛越したのが今日はじめて、下をみながら横木をまたいだ。

この馬の判断力を大事にしよう。

十月×日…腕に一咬とにぶい。ハミに出ない。強く脚を使うと頭を上げる。

十一月×日…駈歩運動をはじめたせいか近頃、速歩のバランスが非常に悪い。加藤先輩に聞いた所北武にもそういう時期が有ったという。

野外を利用すべし。

十一月×日…単騎で馬場で乗るとよく前にでる。（ハミには出ていないが）左前肢が悪いせいか右の運動中右前肢を内側に着く。そのため手前での運動のバランスが悪い。時を待て。

キャバレッティを三本一度に大飛越。高さ一m位。巾は四～五mは飛んだようである。二度目はきちんとまたぐ。

十一月×日…左駈歩輪乗り中脚に妙な反応を示す。歩度をつめて前駆をうかすような感じで、首はまき込み気味。

十一月×日…学内に機動隊導入。封鎖解除。この腹だたしさは何だろう。空気がまずかった。

十一月×日…採草地でひっかけられた。右前肢にわずかの跛行が認められた。

十一月×日…今日考えた事。馬場馬術と自然馬術の相違点の一つは馬の重心を後に下げるか前に出すかであると思う。自然馬術を語る時この馬の重点を抽象的ではあるが「運動の中心」と定義しよう。この運動の中心は場合によっては（加速的運動を行なっている時など）馬を離れてはるか前方に来ることもあろう。そしてそれは馬が機械的に動くものでないから、常にダイナミックなものであろうし、又自然馬術の原則から論してそうでなければならないものと思う。そこで騎手がいかにして馬の運動についてゆくか。

Ⅰ　馬の動きとのものを妨害しない。

Ⅱ　「運動の中心」の動きの方向へ騎手の体重を転移する。

そこで我々をふり返ってみよう。まず第一にⅡの理由で画一的な前傾姿勢は全く無視、困難、束縛である。この時Ⅰだけは少なからず守っているのだから、馬の放らつを許の機会はすぐにでも創出されるのではないか。（馬場馬術においては数々の馬術書にみられる如く、馬の重心は沈下した後駆にあるのだから問題はおこらない。）画一的な前傾姿勢は、更に、前肢に負担をかけることになりその反動として前肢を動きの源泉とするであろう。そしてその結果後肢はひきずられ、ハミに重ることにならざるを得ない。

（動きのアンバランスの創出）又、条件反射的扶助教育（サーカス的）はそれが馬の自然にかなっていなければならない。

即ち、パラドックスとしてサーカス的扶助教育は運動の自由を束縛する。

我々の新馬調教でのいくつかの失敗はこのような点にあるのではないだろうか。人馬の動きが、有機的につながっていなければならないのはどの馬術でも同じであろう。機械的に頭を下げさせることが、騎手の技術の未熟なるがために、この人馬の有機的結合を切ることもあり得るのではないか。形にとらわれず頭を下げさせるということの意味しているもの、即ち、ハミに支点を求め、背を隆起させ後肢を深く踏み込んで勢力的な運動をさせることを常に頭におかなければいけないだろう。

十一月×日…競馬場で練習、低障碍通過。

頭を下げさせるということ、馬がよく前にでるということ、ハミ

に支点を求めるということ、後肢を深く踏み込むということ、騎手が上体をおこすということ、これらが全て正の相関が有るのか？新馬の場合最も注意しなくてはいけないことは何なのか？

十一月×日…小栗コーチから経路を回るよう指示された。

次の如く、㈠単一H五〇　㈡ポプラH四〇　㈢馬場柵H三〇W四〇　㈣ドラム七〇×七〇　㈤固定八〇×八〇　㈥平行七〇×五〇　㈦ドラム七〇×七〇　㈧固定七〇×七〇　㈨クロス木H八〇

㈤の固定で二回拒止、一回目は前肢を障碍の上に乗り上げた。

彼にとって、はじめての障碍らしい障碍の飛越であった。彼の中におそろしいばかりの能力を感じた。

十一月×日…深い雪の中に勇敢に肢をふみ入れる。

一年目部班の先導をやらせてもらった。

十二月×日…右輪乗り（速歩）で首だけ曲げて肩から外へふくらむことはなはだしい。野外で速歩、厩舎へ向うと駈歩になってしまう。手綱を引くとはげしく頭を上げる。外で運動するにはまだ馴致不足か。

十二月×日…小栗コーチに乗ってもらう。馬が首を伸ばした時の挙のゆずりかたが足りないと云われた。それに関しては全く異論はないが、機械的に頭を下げさせるということとハミに支点を求めるということの間に何かが有り、その何かが小生の技術の中に備わっていないのではないかという気がする。

十二月×日…駈歩で障碍飛越、（石垣、固定、斜門扉、平行他）全くすばらしい。

十二月×日…北彗がH九〇、W一〇〇の二段で拒止。酷かも知れないが、勉強になる。

十二月×日…頭がかなり安定してきた。時々すっとハミを求める。大事にしよう。沈静を忘れるなかれ。

十二月×日…常歩、体を硬くして速歩になる。常歩ではほとんどハミをうけられない状態。速歩、終始反抗的。左右へフラフラ頭を下げてハミをはづす。駈歩、非常に不安定。飛越、ふみ切り、がまるで合わず、十二月三日のすばらしさはどこにも感じられず。

一月×日…競馬場にて雪上馬術大会。

小障に出る。レンガ（H九〇、W五〇）にて二拒止。色のついた箱障碍を恐がる。馴致に力を入れること。

いちばん不熱心な小生をこのようなすばらしい馬に乗せてもらって非常に感謝している。ただ現役部員で山下君を除いて北力にほれてくれる人がいないのが残念である。

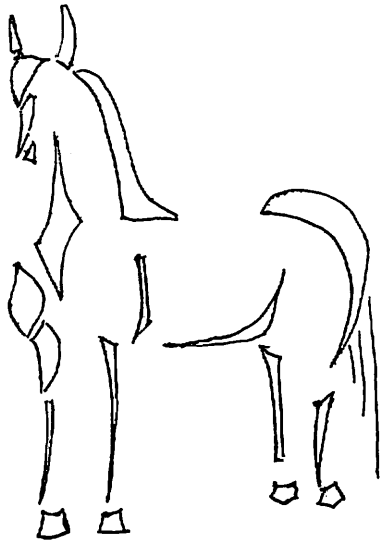
今シーズンの予定として今考えていることを少々述べて終りとしたい。

まづ第一にはげしく運動すると無傷のはずの右前肢に熱が出て腫れることに注意して、運動量の多かった時には必らずブーローー湿布をする。

雪のある間はできるだけ外に出て物件馴致に力を入れる。犬などの動いているものや色の鮮やかなものに対する北力の恐ろしがり様は今のところかなりひどい。

脚に対して、以前、全く無頓着があったが、今では非常に敏感に反応する。その反応は、未だ要求しているものとは異なるが、この鋭敏性を利用して目的に近づけてゆきたい。課目としては、斜横歩、停止、後退、前進騎勢あふれる短縮連歩などを考えている。そして雪が消え、馬場が使えるようになる時までに障碍経路

を回るのに必要な基礎的なことを教えておきたいと思っている。
ハミに支点を求めさせるという最も基本的であり最も難かしい問題については私は語ることができないが試行錯誤の末に何かを見出せるものと信じている。
競技会について、小障碍には機会が有る限り、出場するつもりである。秋までには中障のクラスにもってゆくよう努力したい。



北晨号

四年目　中寺清久

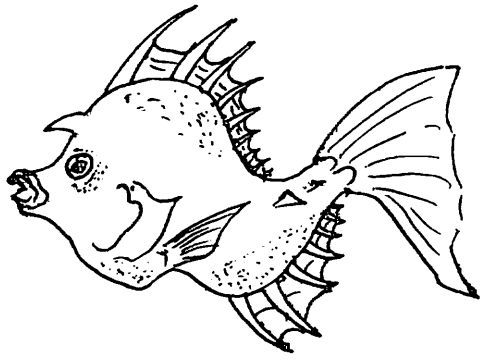
彼女にとって四月、五月というのは彼女の部馬としての資格を問われる大切な時期である。というのは今我部は九頭という馬匹をかかえているので部の財政は非常に苦しい。それで一頭か二頭離厩させなければならない現状である。そこで第一候補として上げられたのが彼女である。昨年の九月飛筋内腫を再発してずっと休んでいるので第一候補に上げられているのである。それで四月、五月が彼女にとって最後のチャンスなのである。
彼女の調教責任者として十分責任を果せなかった私としては、彼女の最後のチャンスを全力でもって彼女と共にものにしたいと思っている。
現在（三月下旬）常足で馴致を行っているが半年近いブランクは大変なもので見るもの聞くものすべてに驚くといった状態である。三月いっぱいといっても後わずかですが常足だけで、四月入って調子が良ければ速足を少しずつ取入れて行きたいと思っている。そして五月の初めの頃には、程度の低いものを通過できるくらいにもっていきたいと考えている。
その資格を問われる試合は五月の上旬か下旬に行われる、対酪農大定期戦である。これは小障害くらいに出たいと思っている。
いくら資格を問われる試合とはいえ乗リツブす気持はないのである。これで無事パスすれば他の馬といっしょに練習馬として使

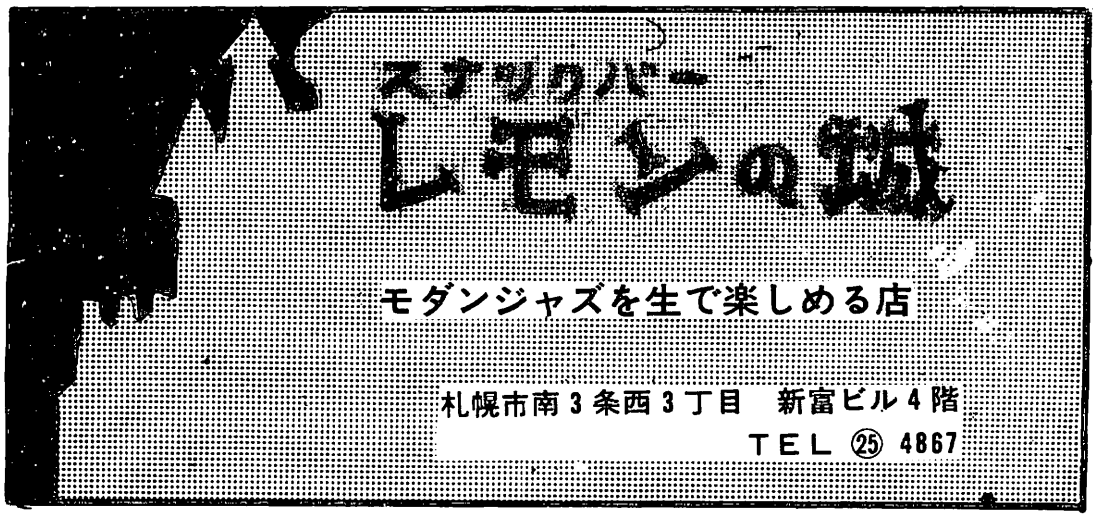
うのはもちろんであるが大切に使って三度(タビ)同じ失敗をくり返さないようにしたい。今年の最終目標は、八月下旬に行われる北日本と道大である。この時までに彼女を最高のコンディションに持っていきたいと思っている。

最初にもどるが彼女について今最も心配されるのが患部である。左後肢の踏み込みが悪く歩様が少しおかしいということである。これが固ったものであれば心配ないのであるが、固っていないで内腫による跛行であれば彼女にとってかなり悲観的な見方をしなければならないのである。

今私にできることは、彼女の早い完治を祈ると共に末長く部に居ることができるように努力することである。

最後に学生生活最後の年を彼女と共に楽しく、そして悔なく過したいと思う。





〃北瓔号〃

四年目　太田清澄

先づ第一に、この馬とそして乗る時には、決定的な概念を烙印とせられる。

果して、私がこれに応え得るか、いや、寧ろそれに打ち克てるか、否か。これが今から草しようとする〃北瓔号〃と云う題の調教報告の核心であり、亦全てでもある。

私がこの馬に本格的に乗り出したのは、つい最近でしかない。併し、これは言い訳けであってはならないとは思うのだが。

客観的判断を待つまでも無く現在の私は確かに〃北瓔号〃そのものの持つ力　に程遠い　を免れ難い。但し、それは、私個人の努力と精進と云う条件を持ってすれば明確に結論へと帰結せられる命題に他ならぬのであろうとも思うのだが。

兎に角、私個人の考え方でもあり、亦部全体の方針でもある、〃一つ一つの試合を消化してゆく〃の構想の上に立って、毎日毎日を所謂る消化してゆく心積りで居る。

これを書いている現在、その目安すとすべきものは一即ち一番最近い試合は、五月上旬に予定せられる、対酪農大戦であるが、それ迄の後一ヶ月半程を主に「拳と馬口の所謂るコンタクト」して「馴致」に置いて、或る結果に導き度いと思って居る。

それ以降に、私と北　の目指すものが如何なるものかは、今の私にとっては想いの外に存ると云っても良い。果して、〃遠き展望が無き者はの〃批難を浴るかも知れないが、これが私の信じる道ではある。

今北　の年齢は考えまいとしても、消し難い事実として、一層に私に迫る。

馬と云うものも、この世界他の全ても殆んど無知に近かった一年目の春、体の弱かった一人の者が、何故か、弱いこの馬に惹かれ、或る種の夢をこゝに描いたとしても、果して、それが偶然丈の事であったのだろうか。

簡単ではあるが、これをもって北　号の調教報告の一文としたい。

‖悪文の例‖

コーチ　小栗紀彦

ここ数年は我北大馬術部の第一期暗黒時代であり、長く、輝やかしかった黄金時代と較べるとあまりにも貧弱に見える、と書きたいのですが、暗黒時代の幕を切って落した当事者としまして、僕は部員諸兄、後援会会員及び我北大馬術部に多大の関心を寄せて下さっている皆様に対し、全く申し訳ないと思っています。

現在までの二年間に全く成果を挙得なかった事実は隠す術もなく、一般社会に於きましては当然やめなければならないところと思います。この様な状況にもかかわらず、未熟極まる僕に北大馬術部コーチを任せて下さっている部員、O・B諸兄の暖かい御理解に深く感謝しています。以下にまとまりなく述べます迷文が日本馬術界の向上に於る我北大馬術部の寄与の但しになることを賢明なる部員諸兄に切望したいと思います。北大馬術部には幸か不幸か、馬術教育を「正式」に受けた人は入部して来ません。いきおい十八才位から、まちがいだらけの馬術をロスの多い不合理極る方法で教えられることになります。その上、四年生又は三年生位で競技会へ出場して、活躍しなければならないという非常に厳しい課題を負わされています。良い指導者及び調教良好な馬はなく、他からの刺激も少ないという諸条件に恵まれていては暗黒時代が続くのも無理はないことになります。しかし、若い部員諸兄の熱とインテリジェンスと時と、そしてO・B及び周囲の方々の御好意とにより、我部の日本馬術界への貢献が近い将来始まるのではないかと想像されます。入学以前の年令で合理的な馬術教育を受けることの出来る人は、残念ながら日本では極一部の人々に限られており、他の多くは我々とあまり変らない馬術を教えられていると思われます。この様な「馬術」はいかにも人間的であり、「飛越の神様」の馬術とは全く異質ということになります。

少なくとも「神様」の馬術と同質の馬術でありたいと願っている我々には、馬術的に無である事は幸福です。また「神様」を目指す馬術を始める年令に数年の開きがある事は馬術が力でなく技である以上、完成の域に近づくのに大きな支障とはなりません。

ロスの多い不合理な練習は頭である程度改善できるでしょうし、賢明なる部員諸兄は種々の資料を何処かの馬術部コーチよりもよりコーチたらしめられるでしょうし、熱心なる部員諸兄は他からの選択的吸収のチャンスを自ら作るでしょうし、我々の馬は馬術的に貧弱だから仕方がないとは思わないでしょう。

読んで見て聞いて考えて考えて話して聞いて考えて乗って乗って乗ってそして乗って。

この間に「習って」が入れば、その人は非常に幸運なのでしょう。確かに、馬術を始めから摸索しなくてもよいでしょう。先人の積重ねを非常に短期間に修得し、（多分基礎馬術といわれている部分でしょう）磨きに磨きをかけそして自分の創意工夫により、馬術を摸索するということになるのではないかと思います。

基礎馬術とその上に築かれるべき馬術の境はもちろん判然とはしておりません。馬術的一生が「キソバジュ」で終る人がいるかもしれません。しかし彼は国内の競技会で常に勝かもしれません。

自分の馬術は主観であり、競技会がいかにもちゃちな物差しでしかないということかもしれません。となると、競技会に出場し、栄光を手中にしなくともよいのかもしれません。これでは自己満足そのものとして思えないと言われるかもしれません。僕もそう思います。「我流」何とフィットした言葉でしょう。北大馬術部の練習がこの言葉を聞く度に、見る度に、そして声を出して読む度に鮮明に、目に浮びます。僕と同じように「我流」に触れただけで、目に浮ぶ方々は多いことと思います。賢明なる部員諸兄の中にもおられることでしょう。しかし、部の馬術行動を改善する術を知らない。悲しいかな我々人は保守的動物でありますので、行動様式の変換には大きな抵抗を伴なうのでしょう、馬術に於ける思考パターンが単純で且つ強固だといえるでしょう。若い部員諸兄がそうであることは残念でもあり、頼もしくもあります。

諸兄は正しい方向を確かに向いています、真の馬術に対する態度も真剣です、熱心に練習に時を費やすことはただ感心します、馬を愛する気持も満点です。しかし、僕が現役の部員だった時と比較しての話です。他大学の馬術部員、多くの馬術家は諸君よりももっと熱心です。同じ努力又はそれ以下の努力ではとても対等に競技出来ません。二、三の先輩に指摘されたとうりに馬体管理、馬術運営及び部活動であまりにも素人的な部分が多過ぎます。

僕が下級生だった頃の馬術部が理想に近かったとは思われませんが、現在の馬術部よりは玄人的でした。上級生は下級生に自分の得たものを責任を持って伝え、下級生は上級生からの「伝統」を合理的選択で受け継ぎ且つ、常に常に諸馬術家、諸専門家の意見を聞き、知識を増し、確実にし、そして次代へ伝えなければなりません。

に華やかしくない時代にはこれらの努力が要求されましょう。活き活きと次の跳躍に備て沈み込んでいるのではなく、痴呆が長々と昼寝をしているということになるのではないでしょうか。滑稽ですね、我北大馬術部の姿は。確かに部員諸兄は立派です、真剣に馬術しようとしています。だが、我札幌農学校の伝統である、スケールの大きいフロンティアスピリットは感じられません。残念ですね。しかし、前方に広がる馬術は広大な未開地です。先人よりの眠れる魂を奮い起しましょう、理想に向って。

競技会はちゃちな物差しではなく、それまでのあらゆる努力を披露する場です。最終的な目標は大障碍飛越競技です。ここでは一般に能力以上の要求がなされますので、天才的な馬に、誤のほとんどない調教がなされ、訓練が積重ねられ、人馬のコンディションが最良の時、理想に近い芸術が展開されると想像しています。

不幸なことに我日本では能力以上の要求をしますと、答られる馬が少ないので、要求は少し緩やかです。しかし、その大障碍飛越競技でも我々に今直接関係はありません。調教の一過程としての小障碍及び中障碍飛越競技は「可能な限り」出場したいものです。調教の一過程ということを誤解しないで下さい。君と忠実な君の愛馬のその時の最高の演技をしなければならないのです。

君が答えるべき要求の程度は君が君らのその時の力と思っているものより少し強くなるかもしれません。君が非常に君の跨っている馬を信頼することが出来る状態ならば彼もしくは彼女は余裕を持って信頼に答えてくれます。

昼はコースを走行し終ってボカンとしなければならない位です。愛すべき北大馬術部の諸兄はたいへん謙虚ですので、自身の力を

過少に評価しています。正しい自信を持って下さい。競技出場には貪欲であり、且つ慎重を期して下さい。札幌では競技会の数が少な過ぎます。諸条件の許す限り遠征し、競技に出場したいものです。と同時に、新しい競技会をどんどん作り出すべきです。

我々のためにも北海道のためにもなります。さて馬を作らないと競技会云々は論じられません。眠れる豚北大馬術部を冷静に見つめましょう。馬術的運動をしている馬が少な過ぎます。この最大の原因はコンタクトの「放棄」です。他に原因と思われる事柄を列挙しますと、要求の不徹底さ、扶助操作の不正確さ、推進の不足、運動の妨害、無理な要求何にもまして皆さんの上手さ加減ということになります。これらの内いくつかは北大馬術部の諸兄が馬を思うあまり、慎重過ぎる、いや、消極的に過ぎるために起る事柄であります。と同時に基礎的な馬術知識が貧弱なためと馬術の基礎が全く出来ていないために思わぬところで馬に負担をかけることになっていると思います。繋養馬に故障が多く（故障馬を数頭入手したということもありますが、我々の不注意によるものもあると思います。）、調教がよくなく、又はあまり進んでいないという状態は早急に改めるべきです。サラブレッドの故障馬を入手する時は慎重でなければなりません。それよりも乗り手が少々下手でも順調に調教の進む中間種（全く調教をほどこしてない馬の方がよい、何処かの国の馬連の様に既調教馬の背にくっつこうとする様な無様なまねは絶対にすべきではありません。）の丈夫な馬を手に入れる方がよいと思います。調教状態のほぼ良好な馬を三、四頭持つことを二年後の目標とすべきではないでしょうか。その為に現在繋養中の馬を非常な慎重さで淘汰しなければなりません、そして丈夫な馬を入手することを考えておかなければなりません。不注意からの事故は絶対起さないで下さい。調教を失敗した馬には極力矯正の努力をすべきです。

騎手の責任を馬に負せて離厩させてはなりません。調教進度のゆっくりしている馬はもっと積極的に馬術することです。どの様な操作にも馬は必ず騎手に反応します。原敬とあまりかけ離れていない操作をして、それに対する反応の内から好ましいものを発展させればよいわけです。原則は頭で理解出来ます。反応が好ましいか好ましくないかは乗り手の馬術感覚で判断すべきです。従って馬術感覚は常に常に鋭くしておくようにして下さい。原則に忠実たらんとするあまり憶病になってはなりません。忠実に且つ大胆にです。我々の様な立場では馬と共に良くなって行くより仕方ありません。四年間は短か過るかもしれませんが、「濃厚な騎乗」である程度補えますし、君達の築いた「馬術」の上に君達の後輩は続くでしょう。非常に下手な我々にも必ず良飛越馬を調教することはできます。我々の愛馬達は一分の狂いも許さない程狭量ではありません、安心して下さい。しかし、諸兄が可能な限り馬術を追求した時には、彼らはカミソリの刃よりもなお狭量だと思います。四年間では絶対に達することは出来ません。学生時代の華やかな活躍のみで満足せず、四年間を馬術のきっかけとしたらどうでしょう。毎年各大学で数名の卒業生がおり、全国では二、三百名となるでしょう。彼らが卒業後も何らかの方法で馬に乗り続けていたら、日本の馬術に於ける選手層の薄さは一度に解決されていたでしょう。卒業後には種々の制約があるので、続けることが出来ないといわれていますが、真の理由は各人が四年間を非

常に不真面目に馬術して過したので、四年間の馬術と決別するのに全く未練を感じないのです。二十才前後の四年間をです。北大馬術部が活躍しただけでは真の貢献とはなりません。

将来の飛越騎手の多くが我北大馬術部をくぐっているという様になるべきなのです。鎌田、千葉両先輩に追つき、追越さなければなりません。部の現況ではあまりに距離がありすぎるかもしれません、しかし我々がしっかりと自身を把握し、そして理想を高くかかげ前進し続けるならば、遠くない将来に実現出来るかもしれません。北大馬術部の外見は眠っているかもしれません。しかし僕には日本馬術界を根底から揺り動かすための準備は既に開始されているような気がします。

千変万化の練習を成し、旺盛な前進気製と頭頸の伸展低下を常に心掛け「無理、困難、束縛」からの解放と飛越を特別作業視しないこと、これだけ気を付けていれば自然的平衡は自ら生ずると思います。共にがんばりましょう。

さようならの総括

前主将　本田　徹

しかし総括は、馬術部生活全体の総括は、僕はまだこれをしおおせていない。あの生活をひっくるめて総括するなど、とてもまだまだのことだ。ただ、このいとおしい生活にすでにわかれを告げたという事実については、「わかれ」というその一事に限っては、僕は総括ができるのだし、またしなければならない。言いかえれば、なぜさようならを告げるかのことわりを、僕は自分の、仲間たちの、馬たちの前にともども明らかにしたい。

ここにこういう言葉がある。

「弱気を出したが最後僕らは、死に別れた小林の生き返ってくることを恐れ始めねばならなくなり、そのことで彼を殺したものを作家として支えねばならなくなるのである。僕が革命の党を裏切り、それに対する人民の信頼を裏切ったという事実は未来にわたって消えないのである。それだから僕は、あるいは僕らは、作家としての新生の道を第一義的生活と制作とより以外のところには置けないのである。もし僕らが、自ら呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯総を文学的総合の中へ肉づけることで、文学作品として打ち出した自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加われたならば、僕らは、その時も過去は過去としてあるのであるが、その消えぬ痣を頬に浮べたまま人間および作家として第一義の道をすすめるのである。」

書いた人は中野重治。この詩人を僕は他のどの詩人よりも敬愛している。中野はこの文章を、おそらく昭和の九年か十年かに書いた。二年間獄につながれ、今後共産主義運動からは身を退くといういわゆる転向声明をカタにとられた上で出獄したその直後のことである。北海道ことばで云えば、この文章はいまの僕の心にことのほか「吾妻しい」響きをもっている。当時の中野に、いまの僕を準えようというのでは決してない。準えることによって自慰行為にふけるという根胆なのでは更にない。そうではなく、この文章が内包している、「懦夫をしてしずかに立たしむる」といったある力に僕は打たれるのだ。

個人的には、三年半のあいだ馬術部の活動に参加して八百鞍の乗馬経験をもったということについて、僕は何の悔も残していない。僕としてはよくやったのである。だが、たとえば馬術部なら馬術部という一つの団体の中での、ある参加者の生活、行動というものは、かれの個人的な視点のみでは覆いつくせないような意味と広がりとを持っている。僕が個人的にはよくやったとして下している自己評価と、馬術部のためにどこまで尽せたかの客観的評価とは、そのままでは直通しないある屈折した構造を互にかたちづくっている。客観的には僕は馬術部のために殆んどなにひとつ尽すところがなかった。このことを僕は事実として受引いている。本当は尽すところがなかったどころではないのかもしれない。

二十才から二十二才までの三年間というもの、僕をひきずってきた、ないし僕がひきずってきた理想は、言うまでもなく自然馬

術のそれだった。はじめの一、二年はいくらか客気にはやった風に、最後の一年は自分で自分の理想を裏切ってゆく過程として、その理想はとにもかくにも僕のなかでもちこたえられてきた。

去年の道大会での惨敗で、とうとうそれは、ちょうど張りつめていた糸がぷつんと切れてしまうように、断たれてしまった。自然馬術が客観的な意味や有効性を失ったのではない。そうではなく僕が個人的に抱懐してきた理想が、僕個人のなかで断ちきられたにすぎない。だが、僕は一人で馬に乗ってきたのではなかった。

ここでも敗北は一人僕の敗北としては終らない。こういうやくざなせりふには自己嫌悪を催すのだが―僕は敗れたとき馬術部の主将だった。そのことが「敗北」に錯綜した意味を与える。

それは、まず一人の人間としての僕の心に強い失意の感覚を刻印した。だがそればかりでなく敗北は、馬術部という、たくさんの仲間関係の総体のなかに、もろにそれの意味を持ち込んだ。

自分が四年間かかって仕込んだ「敗北」が、自分と仲間との、および仲間と仲間との関係のうちに実現してしまったということを、今僕は幸い認識としてもっている。それが、しかし団体生活というものだ。僕は本来ならあくまで部にとどまって、自然馬術の北大馬術部への移植という困難な課題がどんな顕末を辿るものか、最後まで見とどけなければいけなかったのかもしれない。けれど僕はそれをやらなかった。やれなかった。意志の問題としても、能力の問題としても、ここまでで俺の限界だと判断して、僕はいちはやく部活動にわかれを告げた。

なぜか。部生活者としての僕はこの三年あまりというもの、いわば剣ヶ峰をのぼりつめるようにしてやってきたのだった。九月五日、六日の出来事は、のぼりつめた剣ヶ峰からの、奈落への墜落を意味した。あの試合からこういう意味を受取るというのは、もっぱら僕の感受性のしからしむるところだ。僕がそんな具合に自分の感受性をとがらせてしまったのは二つの理由にもとづいている。一つ。僕が馬術に真剣に打ち込んだということ。二つ。しかし、四年間という期限つきで打ち込んだということ。

つまり僕は典型的な「学生馬術家」だったのである。

「日曜馬術家にだけはなるな」という小栗さんの言葉は骨身にしみていた。なぜかならディレッタントにたいする侮蔑こそが青年の特権なのだから。だが僕は自分の一生の仕事を馬術以外のところに求めた。そこで、僕が熱心な学生馬術家になってゆき、且つそこにとどまったということは、いわば必然のコースだったと今にしておもえてくる。

ただ、学生馬術家に徹したことがおのづから僕を限界づけたこともまちがいない。あらゆる面で。なかんずく精神力と技術の面で。「熱心な学生馬術家」の感受性は、四年目の秋という馬術家としてのおのれのいのちの秋にむかって、短兵急に自己自身を駆り立ててゆくのにはふさわしかろうが、ねちねちと執拗に陣地を勝ちとり、所期の目的を遂げてゆく胆力とは両立しない。この胆力を身につけろというのが、巨大でもあり卑小でもあったあの敗北が僕に押しつけてくる最大の教訓かもしれない。

いま部がどれほど困難な情況に置かれているかは僕の想像にあまりある。そういうときに部を去ってゆくということについて、僕は複雑な、身を切られるようなおもいにしずまざるを得ない。

ただ、「俺は誰かを、何かを裏切ったのだろうか」という設問

の仕方を僕は採りたくない。それは今の僕の気持にそぐわない。

役に立たない。腹の足にならない。そのような問いつめはむしろ、敵前でおびえた軍人がおもわずしらず二本の足を行くべきところとは反対の方向にむかって必死に動かしながら、脳ズイだけは「俺は逃げたいのか逃げたくないのか」などという愚問でひっかきまわし、またそれによってかれの現実の行為を気づかせないようにさせてしまっている、といった惨めな構図とさえ似ていなくもない。もちろんこれは比喩であって、僕は部からの逃走を極めこんだのでは決してないとしても。

あるいは何年かの後、「裏切ったか否か」は僕にとって切実な問いとして再び意識のなかに頭をもたげてくるかもしれない。だがすくなくともいまの僕は、自分に対してそのように訊くのは大変なうぬぼれというものであり、部の仲間に対してそう訊くことは傲慢、無礼以外のなにものでもない、とかんじている。

僕は将来の「出戻り女」としてではなく、馬術部を「巣立ってゆく」人間として部にわかれを告げたい。現に仲間たちが、寡黙にただ努力だけを重ねているとき、そのように去ってゆく者はやはり言葉少なであるべきなのだ。ただ、僕は一つのいたみの感覚を、誰であるといって指さすことのできない誰かに対して負っている無形の「負債」のことを、鋭くかんじている。このいたみの感覚は、自分が一個の理想にやぶれたというところから来ているのではない。他人との関係のうちに実現してしまったおのれの「負性」を、いつの日か必ず、やはり他人との関係において決済しなければならないという感覚でそれはある。この感覚を背負って行こうと心に誓ったとき、さきの、中野重治の文章は僕に無縁でありえない。

三年半の馬術部生活は僕にとって決して小さな体験ではありえなかった。自分の自由にし得る大部分の時間とエネルギーをそこに注ぎこんだということ。どたん場で決定的な敗北を喫したということ。ほかの人との関係において自分が負債をしょいこんだということ。それら三つの意味を核にして、馬術部で過した生活の諸相が、錯綜し混沌とした一つの全体的なイメージとして僕にのしかかってくるとき、「頬にあざを浮べたまま人間として第一義の道をすすめる」という中野の言葉は、一人僕のためにあるようにさえおもわれてくる。

繰り返すが総括はまだできていない。中野の言葉で言えば、「社会（＝馬術部）的個人的要因の錯綜」というないまぜの糸を一本一本にまで解きほぐすことからしてまだ全然できないでいる。その一本一本を、ある、意味と秩序の下に再びより合せ、僕の新しい何かの仕事のなかに肉づけることなど更に遠い先のことだ。

「新しい何かの仕事」についてさえ僕にはまったく見当がついていないのだから。希望も絶望も僕はしてはならない。

ただ馬術部のめしを長いこと食って一つだけまちがいのないことを学んだ。そのことで僕は仲間たちや愛馬たちに感謝を捧げる。この「一つだけまちがいのないこと」については、オデッセイアから次の言葉を拾うことができる。

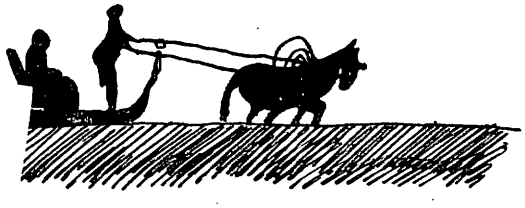
「手と足とでなしとげ得るものほど、生きている間に男に誉れをもたらすものはない。」

かつて地上で息をしたどの詩人よりも ――あるいは多分、風百の実行家に比べてさえ ―― 頭一つは抜きんでている人がこう書いていることは興味深い。ここで「手と足とでなしとげうるもの」を即物的な意味に解する必要はない。たとえば円盤を何米とばせるかとか、一時間で何人の首をたたき落すことができるかというようには。ホメロスでさえそんな意味でだけこう歌ったのではない筈だ。

しかし、ホメロスから二千数百年もへだたった現在も、その現在から五千年をけみした後にさえ、男について語られた言葉として依然としてこれ以上に雄勁なひびきをもっているものはないしないだろう。

馬術部の仲間たちは「生きている間に男に誉れをもたらす」べき最高の仕事をしている。そのことが仲間たちに本当に自覚されるように。その自覚が「誉れ」そのものに一歩でも仲間たちを近づけるように。僕もまた、これからおずおずと進めてゆく「第一義の道」を、比喩的な意味もこめてではあるが、「手と足とでなし遂げ得るもの」と必ずかかわらせてゆくだろう。今はたださようならだ。僕はまずわが身にむかってほそぼそと、そして仲間たちがもしそれを受けいれてくれるならやや声を大きくして、こんな風に「うまのはなむけ」の言葉を語ろう。

さまざまの、
愚劣な夢におびやかされ続けよ、
お前。



‖北瓔と‖

加藤公敏

『ジリリン』、七番失権だ。いよいよ俺。マイクから「八番加藤選手。北海道大学。乗馬北瓔号。御入場ください。」学生時代最後の敬礼となるであろう。万感胸に、心をこめて審判席へ。スタートだ。ぐるっと回って第一障碍へ。（竹棚バー二段）　あっ夢想だにしなかった拒止。一度にカーと頭に血が上り、まわりがボウとかすむ。畜大さんか、酪農さんからかかる、かけ声だけが聞える。大きくまわって、推進するも、全く動きにハリがない。

そんなことを考えても後の祭。またしても拒止される。最後だ。あるのは静寂。やっと竹棚通過。全く前肢が上っていない。第二障碍（自然木）へ。『ジリリン』失権。退場。

大見（二年目）が近づいてくるが、まともに顔を見ることができない。何と言っていいか。「すまない」。ひとり引馬で厩舎へ。

あれこれ脳裏に浮んでは消える。走行中、障碍にも激突して馬もろとも心中した方が幸福なくらいだ。エイコの奴、馬房から早く水をくれというようにハナで押してくる。こいつ。

試合の状態が人馬とも悪かった。（北瓔は貨車内での傷を化されて、切開手術で、試合二日前まで全く使用できず）なぜ放棄しなかったのか。いや。部の貴重な労働と金を使って小倉までよくも臆面もないときてしまったのか。部員には申しわけないが、後悔してしまう。『みじめ』この一言につきる。

私がはっきり北瓔で試合を目的として乗るようになったのは、四十四年度の五月十一日の酪農定期戦を目前する四月のはじめであった。その後、定期戦、札幌自馬大会、北日本大会、北海道大会、そして全日本学生大会と進んできたわけです。調子は北日本大会をピークとして、前述いたしましたようにみじめな結果になってしまった。ここにいたった原因。私が達し得なかったこと、などを書きならべて次の調教者の参考にしてもらえば、部にすまなく思っている気持が少し和ぐと。

○　北瓔の年齢と体力

北瓔の年齢は十五である上、体力の回復が他の馬に比べて著しくおそい。夏場に弱く、おまけに青草のやりすぎで、下痢を起す。

この時期は夏休みであるため、馬術の大きな試合が必ずある。私の場合北日本大会（八月七日～十日）から北海道大会までの北のもって行き方は明らかに私の失敗であったと今更ながら思い出す。水沢での北日本大会終了後、体力の回復をまたずに二十二日からの道大会向合宿に使用したことは無理があったのでは。

そして三〇日の貨車積で帯広へ。これでは北瓔にとっては体力の消耗である。どうしてあの段階において、強くコーチ、主将に北瓔の合宿への不参加を申し入れなかったのであろうか。夏の暑いさかりにやせてしまうと、食わせてもあまりよい結果が出ない。

体力の回復を第一とすべきなのを、それができなかったのは、やはり試合に対する一発をねらうあせりだったのであろう。

○　人馬の信頼感

馬にもこの人が乗っていれば、扶助に安心して従えるという感

覚は絶対にあると思う。大事な場合（特に人馬共に緊迫感を持っている試合の時）に人が馬からの信頼感を裏切るようなことをすれば、馬はその騎乗者に対して、不信と不安を感じとってしまう。

ここで又、私のことを書かなければいけない。それは今でも思い出すだけでも胸が苦しくなる道大会である。複合競技の障碍で。下見の時、第七障碍の大角横木のはいったトリプルには、はっきりいって、警戒と飛べるだろうかという不安がつきまとった。

試合前から元気のない北　はそれでも、私を信頼して、雨上りの滑る馬場内をそれも必死に一つ一つ障碍を通過してくれた。そして、問題の左角である。助走距離の短かさから、自分ながら考えて回転させたが、向けた時にはもう目の前にせまってしまった。ぶつかるように拒止である。人間の心の動きを馬も感じとっていたのだろう。今思えばこの間に、私は馬術をやるものとしてもっとも恥又はタブーとされている恐怖を感じてしまったのだ。

二回目に向けた時、障碍の直前で、目をつぶってしまったのである。そして、だきこむように、十三号の指車を北　の腹に二、三回ぶちこんだのはいまでも思い出す。そして次の瞬間、ハッと気がついた時には通過していて、体は前にのめり、体をおこす間もなく、B障碍に北　の飛越しようとするのをじゃましてぶちあたってしまった。二拒止。それでも北　はけなげにも三回目も必死にA、Bと人間が完全にバランスをくづしているのに、とんでくれたがCで力つきてしまった。失権である。ここで北　の私に対する信頼は完全に不安と恐れになってしまったのであろう。

この失権は私にとっても、いままで北　で失権を経験していなかっただけにショックであり、自分のやってきたことに不安と疑問をもってしまった。道大会後、その信頼感をとりもどすことに全力をつくさねばならなかったのに、やることなすこと不安で、小さい障碍一つ飛越するのもこわかった。そういう不安が、体の動き、こぶし、脚にも出てくるのか、北　の動きもにぶいのである。そして練習中にもトンネルなどゴツイのに拒否されてしまい、出てくるのはあせりと不安だけであった。あの数秒間に失ったものの大きさが身にしみる。

○　基本へ帰る

道大会から全日本学生馬術大会の貨車積（十月二〇日）までのおよそ一ケ月半体力の回復と、北　と私とがこわがらずに障碍を通過できるようにとを、心がけていたが、なかなか太らず、元気も出てこず、ある程度にめどがついてきたのは十月に入ろうとしたころであった。問題は北　と私の関係であるが、気ばっかりあせって、やることなすことすべてばらばらで落着いていなかったようだ。馬を手の内に入れるべき、輪乗における歩度の短縮、伸長、輪乗の閉開、小さい障碍をたんねんに飛越すること。ハミ受と脚との関連などがおろそかになってしまった。

◎輪乗（常歩・速歩・駈歩）について

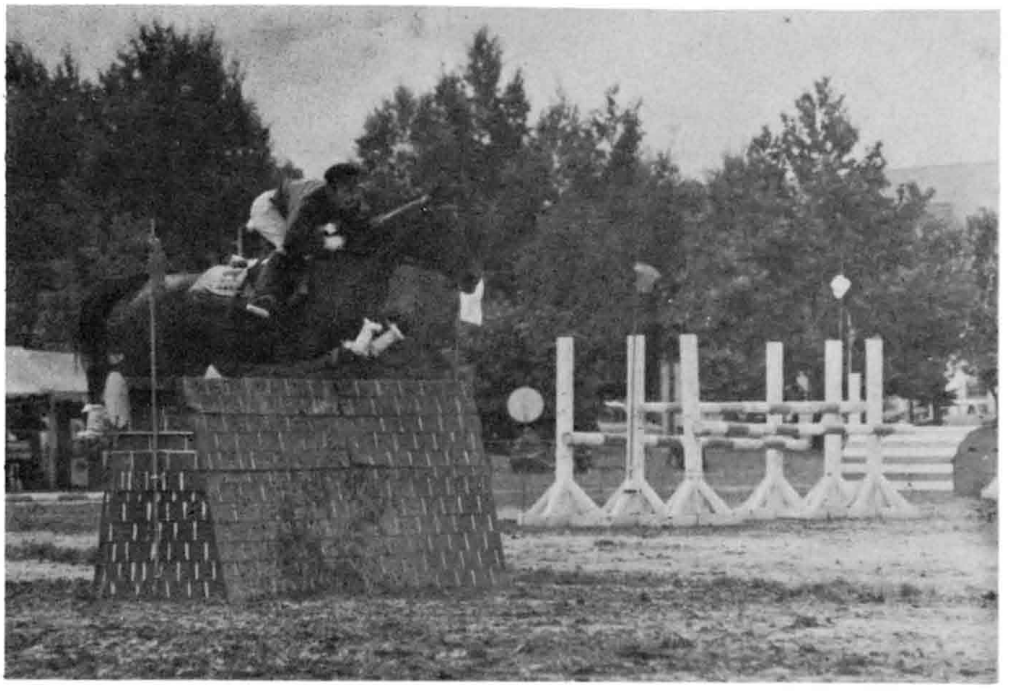
○停止・常歩・速歩からの駈歩発進
○駈歩・速歩・常歩・停止・後退
○歩度の伸縮
○反対駈歩・発進
○蹄跡中二、三個の低障碍の飛越
○　停止からの各歩様の発進
○旋回

○輪乗の閉開
○駈歩の手前変換

注意　○発神・停止などの時の口とこぶし、くびを
　　○まきこませないで、上げさせず
○濠（水濠・乾濠・濠バー）
○ドラムバー
○垂直障碍では絶対つまった飛越をさせない
○連続障碍の間歩
○天幕・歓声・動物など
○経路を作って、走行中の無理のない回転・歩度をたえず研究

北瓔はすなおで乗りやすい馬であるけれど、絶対、運動中に気をつけなければならないことは、一つ一つの運動をていねいにやることである。例えば回転運動の時は必ず内方姿勢をとらすこと。こぶしだけで、首が外をむいた状態で回転させていると必ず反抗の要因になると思う。直線コースで歩度を伸すとき手の内に入れた運動をすること。特に障碍に向けた時、体が伸び切った状態にしてはだめだ。障碍を通過したらおさえる。ＥＴＣ。
どうもゴメンナサイ、ゴメンナサイ的文章になってしまった。

馬術競技に勝つということは人馬にとって大切な事をすべて完全に行って始めて勝利を手の内にできる権利を得るのだと思う。なんとかなるだろうとかハプニングを期待しても、何の結果も得られない。
しかし人間というのは弱い面がある。小豆相場に手を出した者のように、この次にはとりもどしてやると思って大局的に人馬を見る目が盲になってしまい、ズブズブとみじめな敗北への沼へと踏み込んでしまう。あとには水面に後悔と自責念だけが泡のようにポッと残るだけであった。
私の失敗を見て、後輩諸兄（特に小倉まで手伝にきてくれていて私の失敗をまのあたりに見た大見、西村両君）に同じ轍を踏んでほしくないし、新たな敵愾心を燃やして勝利へし原動力にしてほしい。
冬のある晴れた日、パドックに北瓔号を見に行く。「エイコ」こちらをチラと見つめてから、のそのそと近づいてきてくれた。覚えていてくれたのだろうか、うれしくもあり、でも淋しいね。



国体出場決定!! 春田兄とチビ

田中兄と北彗号

対酪農大戦にて
加　藤　兄　と　北　瓔　号　班

北　晨　と　北　彗　と　仲　よ　く　パ　チ　リ
今　井　姉

北　凜　号　と　橋　口　兄

◎卒業生プロフィル◎

今井雅子　札幌南高卒農学部農芸化学科

優秀なる頭脳をもち、容姿端麗、こういう人をお嫁にどうぞ。でも少し手ごわいかもね！

当番日以外ほとんど練習にはこられませんでしたが、長く会計をつとめていただきありがとうございました。学校を出られますが、家も札幌、弟の敏郎君も部にいるので、わかれるという実感がわきませんねェ。

小野政則　倉敷青陵高卒農学部林学科

学校を去られる一人ですが、わかれるという実感がわくのは兄だけです。とにかく札幌から姿を消されます。とっても人のいい人で橋口さんや加藤さん同様ほとんど、おこった顔を見せたことがありません。昨年、愛馬デコを守ろうとして、北力にうでをけられたそうですが、おだいじに。デコはいたく感謝しております。又よく遊ぶ人でもありました。

加藤公敏　田園調布高卒理学部化学科

こんなにやさしい人もいないでしょう。ほんとうに親切です。人のことを親身になって考えてくれました。人よんで「仏の加藤さん」。あまり飲めないのに飲みに行き、下級生にいわせると、どうかというような顔のホステスさんを気に入る所など、いかにも人おもいの兄らしいではありませんか。面影に馬術部を象徴しているといわれる兄は、今年もう一年大学に残って勉強されるそうです。

橋口　庸　筑紫ケ丘高卒医学部

精神科志望の医者の卵。医学部のゆえ、学校にはまだ残っておられます。レコード店へ行くのが大変好きでした。行くといってもただ聞きに行くだけというのですから、レコード店にとっては迷惑な話。でも四回に一回ぐらいは買うそうですからおとくい様でもあるわけです。引退後はギターの練習に余念がなく、ギター教室にまで行く程。先生に素質があるといわれたそうですが、さて？　聞きに行ってみましょう。

本田　徹　小石川高卒医学部

とにかく、一生懸命やってくださいました。ところで馬術部を引退後も、この人ほど服装のきたなさで変らない人はありません。センスがないと言おうか、かまわないと言おうか？　でも最近は少しきれいになっているようです。一生懸命やったといえば皆様ご存じ食物についてもそのご熱心ぶりについては、頭の下がる思いをしたものです。まあ、よく言えば負けずぎらいな方だったんでしょうがね。キャップとして馬術部をささえていくこと、そして精一杯学生馬術家たり得ることに専念し、その本来の無口さと和して、一層無口になることもしばしばでした。主将!!ありがとうございました。

四年目の皆さんありがとうございました。健康には十分注意して、栄ある前途をお築きください。

先輩寄稿

馬のおもいで

昭和十三年卒　高井久芳

馬の思い出といっても学窓を出て三十余年になり記憶もうすらいでしまった。当時の札幌はまだ今のように自動車がはんらんしておらず運送にはほとんど馬車であったし又郊外の農家の馬車も市内で沢山見ることができたもので、冬は橇を引く馬の鈴の音は北国の寒さと共になつかしい思い出である。馬が沢山いるため場末の市街には馬具屋や蹄鉄屋があり丁度今の自動車の修理工場があるのと同じであったのが蹄鉄屋は見ることも出来ず乗馬部の馬の装蹄に不便を感じているということを聞いて世の中も変ったものだとつくづく感じます。自動車の増加で都市も農村も馬は減少し札幌市内でも馬はほとんど見ることができず、見ようとすれば競馬にでもゆかなければならない時代になり又これが今やギャンブルの王座を占めダービーだけでも馬券の売上げが何十億ときいては驚くほかはありません。

私が馬術部に入ったのは昭和七年予科一年の時で当時は馬術部は今の様に自馬はもたずもっぱら軍隊の馬を利用させてもらい、土曜日の午后と日曜の午前中が練習日で雨が降れが中止になるし、月寒の二十五連隊迄出かけなければならなかったので仲々往復に時間をとられ充分な練習も出来なかったし、軍隊の演習などあれば時々中止になるので毎土曜日の練習を期待することができなかった。その上自分の都合で参加できない場合もあり出席表なるものを作っていたようであるが皆勤者というのはいないようであった。当時は市電豊平終点から軍隊のある月寒市街までの間は両側は全部水田や畑で人家がまばらにあり、又交通も徒歩や乗合馬車があったが五、六人乗れば満員で、その後は乗合自動車になったが今の三十八号線の交通や両側の商店、工場がぎっしり軒をならべているのを見ると昔の面影すら想像することもできないし又昔のことがなつかしまれてならない。

六年間の在部中私はあまり対外試合には出場したことがないので思い出になる試合は少くわずかに対東北大との定期戦を仙台で行なった帰路盛岡によって日本一の馬市を見てきたことや東京で行われた第一回帝大戦に勝った位のものである。その時は一チーム五人でトーナメントで試合を行なったのであるが三年生が主体で故石川君も参加したのであるが、山下主将が選手の人選に頭をなやましていたことが今でも記憶に残っている。

それにまた忘れることの出来ないのは旭川の騎兵七連隊における合宿練習である。前にもいったとおり二十五練隊の練習では不充分なので冬と春の休暇を利用して騎七に合宿するわけで入ると同時に軍隊生活しなければならないのでかなり厳しいものであった。馬は各自に二頭づゝ配当され午前、午后と尻の皮をむくほど充分に練習することができた。特に冬の合宿は寒さで有名な旭川のことゆい朝の水飼い、手入等は皆音を上げたものである。

しかし下級生の時は練習に追われて余ゆうもないが何回かゆくうちに下士官と顔見知りになり連隊では下士官が障害飛越などの良い馬を持っていたようで、そのような馬を借りることも出来るようになり、ある程度の障害の練習も出来たし、高等馬術までいかなくとも馬場馬術らしい練習もすることができ旭川の合宿にゆく

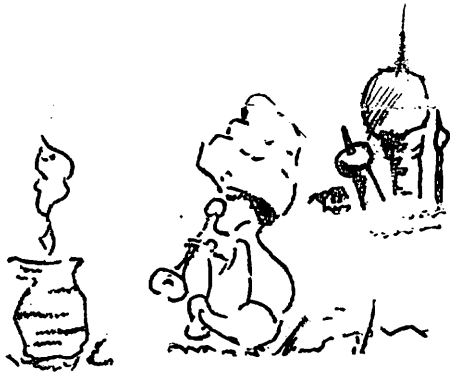
ことが楽しみの一つでもあった。

もう一つ私の思い出として残っているのは昭和十三年の一月末か二月初めころに今の円山総合グランドで馬スキー大会を北大馬術部主催で開催したことである。当時軍隊では作戦上スキー部隊を馬に引かせるというような試みはされていたようであるが馬術部としても北海道では初めての馬スキー大会をやるということは冒険のようでもあったが開催にふみきった。スキーは各自がもっているので問題はないのであるが、馬はどうするか、これは北大農学部にいた十数頭の馬と二十五連隊の馬を使うことにし北大の方は故杉本先輩にお願いして諒解を得、又二十五連隊も心よく引受けて下さったのであるが、このような大会の運営に経験の無い我々がやるのであるから仲々スムースにはいかなかったが宣伝の方は当時の北海タイムスのスポーツ記者をしておられた伝法さんという方が引受けて下された。北大の馬の方の調教は私が担当して第一農場の事務所にスキーをおいて毎日毎日馬を引き出してはスキーになれさせるようにしたのである。馬からスキーをはいている人までのつながりをロープだけにするか、又旗ざおのようなもの（馬車でいえばかち棒になる）を用いるかなどいろいろ試してみたが棒はなくても馬がなれれば危険がないことが大体わかったので実際にはロープだけにした。

大会の当日は学生と一般参加者と四、五十人が参加したと記憶している。競技種目は一人が騎乗して三人位のスキーを引く競技や、馬一頭にスキーをする人が御しながら引かせる競技など二種目位であとは円山の総合グランド（今のようにスタンドが無く唯四〇〇メートルのトラックがあったのみ）を一周、二周等の距臨で差をつけた競技を行ったように記憶している。しかし観衆が相当集ったので気をよくしたものである。勿論大会長は当時の部長であったように記憶している。

馬スキーについて翌年池内主任の時も開催されたようで、その時はグランドを回るだけでなくクロスカントリーもやったという北海タイムスの写真入りの記事を私の勤務先の満洲国の新京まで送って戴いたと記憶している。

私の仕事が商産関係であったため満洲においても会社に馬術部をつくり新入社員をやはり満洲でも軍隊の馬をおかりして訓練したことがあります。卒業後も終戦までは乗馬の機会もありましたが、その後は乗馬から遠ざかっていますが今でも馬を見るのが楽しみです。



落馬のあと

昭和十四年農学部畜産卒
小田　昇

私の一人息子が現在大学受験を目前に控え県命に勉強中である。その彼が目指す大学に合格したら、クラブは馬術部に入るのだという。かつて私がそうであったように、馬上豊かにカッコよく乗ってみたいのであろう。自動車の免許もとりたいのだそうだから、ただ乗ればよいというのであるらしいが、自動車は機械であり、馬は動物である。この本質的な相違点をよく見極める必要があるのではないか。一般的にいって簡単な動機から乗馬に憧れるのは、決して悪いとはいわない。馬に接して度重ねて乗ることによって、きっと馬の性質をのみ込み、また心から馬が好きになって来るだろうと思うからであり、そのように指導すべきであろうと思われるのである。昭和八年、私は予科入学と同時に馬術部に入った。中学からの親しい池内先輩の強力な勧誘があり、一も二もなかったし、中学の数学教官らが小樽市内を騎乗する姿をみて、かねてから是非乗ってみたいと憧れていたからであった。

月寒の法兵二十五連隊での最初連習は楽しくもあり恐ろしいものであった。雪の馬場の中で「鐙を上げ！」「速歩!!」には泣かされたものである。新入生は身体の平衡を失い、「鍾を下げて!!」と東園先輩らの叱声があっても、どうにもならず、ボロリボロリと落馬する。中には鐙に爪先が引掛り、真逆になって馬に曳ずられ、馬場を一周したりする者が現われ、乗っている吾々は生きた心地もなく、鞍の前楷につかまって、何としても落ちまいとして死もの狂いであったことを今もありありと思い出すのである。

冬休みには札幌乗馬クラブに合宿して、吉備、脇田先輩らの指導を受け、楽しくも恐ろしかった思い出となっている。

入学間もない或る日曜日、私は池内さんの銭函の家へ遊びに行った。大きい栗毛の競争馬に乗せてもらい、その軽い肢どり、心良いスプリングに気をよくしていくらか乗り廻しての帰り途、突然馬は暴走した。ひっかけた一方の手綱を強く引いたり、交互に引いたり、上へ、下へ、いろいろ、考えられる止め方を試みたが、一切受けつけられなかった。恐ろしくなって飛び降りようかと思い、下を見ると、地面が飛ぶように後方へ走っている。このスピードで飛び降りたら大怪我をするだろうと、降りるにも降りられず、途方にくれ、夢我夢中で馬の背にしがみついていたところ馬は自分の厩に一目散に飛び込んだ。あれよあれよと思う間の出来事であった。私は危くその厩の低い鴨居に頭を打ち、一巻の終りとなるところであったが、とっさに頭を下げ、難を逃れ九死に一生を得た思いであった。

休憩後、軽川へ遠乗りに出掛けた。今度の馬は低い背の農耕馬？であった。池内さんの後に従って、トコトコと野の路を走らせていた。おとなしい馬ではあるし、春の心よい日ざしが睡魔を誘いついうとうとしたのだろうか、気がついて見ると遙か前方に、私の馬が、鞍上人なく、池内さんを追って行くではないか、叫ぼうとしても、夢の中のように声が声にならない。落馬と同時に背にしていたコダックカメラで背骨を打ったらしく、少しの間、気絶していたのである。

大学一年目の時であったか、旭川の練兵場で、盛岡高農との対抗戦があった。私は障害飛越で大過なく最後の三段横木にかかり、之を飛越したところ、馬の前肢が横木に引掛かり、人馬顛倒し、私はもんどり打って背中を堅い地面にいやという程打ちつけられた。一瞬呼吸が止まったように感じたが、試合出場の責任感から、再び乗馬しその障害を飛び越えた。

この時の受傷が原因らしく、助膜炎を患い二ケ月余り休学の止むなきに至り、その後暫らくは競技的乗馬を慎しまなければならなかった。

学部は畜産学科第二部（現在の獣医学部）を専攻した。当時、農場の厩舎には十数頭の乗用馬が繋養され、畜産学科学生の研究用馬として提供されていたので、好きな時に乗ることが出来た。私は池内さん、斉藤長さんなどと連れ立って、蒙古種牡馬を曳き出して飛び降り、飛び乗りをやったり、　馬の裸に跨って、ドンキホーテを気取ったり、難馬といわれる、宮武、釧山号などに乗って、馬銜を軟くしようとしたり、障害飛越の調教など、馬に親しむ恵まれた環境を満喫したものであった。

クラスメートと石狩川方面へ遠乗りしていた暑い日のこと、些か疲れて、常歩でのんびりと歩いていた。虻が多いので、馬は後肢で腹をけってそれを追っていたが、たまたま、腹帯が緩んでいたらしく、けっていた拍子に蹄がそれに引掛かり、突然ドッと右側に横転した。私は右膝から下が馬の胴の下敷になり、骨折こそしなかったが、強く打ち痛みも激しかった。

大学三年目だったろうか。仙台宮城野原で恒例の四帝大戦が行われ、主将として出場した時のことである。折からの雨上りであって練兵場は濡れていた。馬場馬術の規定課目に従って、御しゆき、駈歩巻乗りをきれいに慎重にやった積りだったが馬の内側後肢が不幸にもつるっと辷って尻餅をついた。私は地上へ思わず降り立ってしまった。落馬の減点は大きく私の落胆も大きかった。しかし、あとで総合点を比較してみると、同じ馬に乗った、京大の主将の得点より私の方が上廻り、些か慰められたものであった。

その年の秋、私は旭川の歩兵二八連隊から岩梅という功労馬の払下げ預託を受けることになり、単身、貨車に乗せ、車中一泊して小樽へ連れ帰った。この頃、吾々は犬ぞりと平行して、馬スキー大会を主催したものである。

その馬スキーの練習を岩梅とやっていたある日のこと、街角の消火銓は雪国であるから、出火の際、すぐ使用できるように、常に雪を除き、路面には雪が積ってゆくので、消火銓の所は丁度落し穴の底のようになっている。

私は岩梅に速歩で曳かせ、スキーを辷らせてゆきその消火銓の脇をカーブしようとした時、誤ってこの深さ一米半位の落し穴の中にとび込んでしまった。手綱を離せば、馬は放馬して人に迷惑を及ぼすであろう。私はスキーを上にして尻餅を着いた恰好で身動きがとれない。馬の尻がバックして、今にも私の上へ落ち込んで来そうである。気が気でなく、足掻いているうちに、スキーの片方がはずれ、どうやら態勢を整えて、この穴から匍い上ることが出来たのであった。

学部二年目から陸軍獣医部委託学生に採用された私は、毎夏休み一ケ月、旭川の騎兵連隊に入隊してしごかれた。当時の連隊長、栗林大佐は後年硫黄島玉砕で勇名を馳せた栗林中将である。そし

て先輩後輩合わせて五人一緒だった吾々学生中、今生き残っているのは私一人であり、諸行無常を感じさせられたところである。

卒業後はいよいよプロとして獣医中尉に任官し、更に陸軍獣医学校で一年間鍛えられた。しかし、近衛騎兵連隊での馬術時間は楽しいものであり、つらい思い出はない。むしろ余り馬に乗ったことのない同僚が多く、気の毒にも思い慨嘆に堪えないこともあった。

昭和十五年渡満して実務に就き、満洲の各地に勤務した。この間、軍用動物に関する専門家として、自信を以って、職務に励進しその責を果すことが出来たのは、馬術に於いてめったにひけをとらないという自負心がバックボーンになっていたからではないかと思い出されるのである。部隊では本業の外に、馬車教官、馬術教官を任命され、師団長、騎兵出身の参謀以下の将校馬術の指揮号令をとらされ、この時ばかりは偉くなったように得意になったものである。

任官以来一度だけ落馬した。それは満洲熱河省承徳という所の防衛指令部にいた頃のことである。今から百五十年位前、清朝の乾隆帝の離宮として造営された城廓の中に部隊があり、朝夕、この中にある蓮池の傍を馬に乗って官舎から通ったものである。

いつもなら常歩で歩かせていた石畳の楷の上を、ある朝遅れそうになったので、急いで速歩で通り抜けようとした。案の定、馬は足を辷らせ、膝をつき、私もころりと馬の頸から前へ投げ出され、膝をすりむいた。天罰顔面ともいうべき有様であった。

終戦は私の運命を大きく変革し、馬に乗るチャンスに恵まれず現在に至っている。

将来一人息子や、孫達と一緒に馬に乗るようなことがあれば、どんなにか楽しいことだろうと空想している。

そのような時がやって来たら、先ず騎坐と脚で乗るという基本を教えてから、馬から落ちないように、私の経験と教訓とを話してやる積りでいる。そして馬を知って恐れず、親しめるよう助言をしてやりたい。

落馬による後遺症は決して有難いものではなく、そして人生に於いても無理と油断は落伍や、破滅を導くものであることを教えてやりたいと思うのである。

"そのころ"

昭和十七年農実卒　白取善三

昭和十五年、大陸における戦線の膠着化は著しく、行き詰って来た日本の軍国主義が、新しい破綻へのもがきに大きく国民生活を圧迫して来ていた私達の学生時代、幸い大学はなお国家と国民の無望を繋ぐに至るものと評価を受けており、食糧を始めとする諸物資の乏しさを補って余りある一般国民の素朴な敬愛の中で、学園はそのアカデミックな雰囲気を保ち、私達は青年らしい屈託のなさで自らの青春を燃え上がらせていた。

自然科学系に限られた大学の構成はどちらかといえばこの様な激しい社会状勢の移り変りにも関心が薄い様に見える面もあったが、一面、近代戦に於けるその具体的な役割の重要さは、かえっ

て明日の自分達の姿への予見が明らかなだけに、若者達にとっての今日は、極めて切ない毎日でもあった。

私達はこの様な時代の中で、素朴な論理を組合せながら祖国と民族を論じ、真理と正義とを求め合った。ヒューマニズムを論じ合った結果の民族自決主義に、朝鮮出身の学生の脂切った昂奮の表情が重なった時の困惑、マルクスレーニンズムを基盤とした満蒙留学生の持って廻った論理への同情、更には漸く抑えていた自尊心を爆発させた支那留学生の貴族的な日本人蔑視など、私は今三十年の過去を顧みて深い感傷にとらわれざるを得ない。

日本人である友人の中にも既に亡い数人がある。そしてこれらの異邦の人達は、更に大きな波の彼方へ去って行った様でもある。唯、私の胸の中には幾らかの苦しさを含みながらも、その全ての顔が今すぐにでも浮んで来る様な気がしてならない。

当時〃私共馬術部員は第一農場に飼養する自馬に依る練習の他否むしろより多くの場合、軍の乗馬に依る練習が許されていたので、土曜日曜には月寒の部隊に出掛けたり、夏期休暇には旭川の騎兵連隊に合宿し、午前午后と馬を取り換えながら存分に練習に励むことが出来た。

連隊長はロスアンゼルスオリンピックに於てその愛馬心が世界中の人達から讃えられた今村大佐が、オリンピックスタジアムに共にその姿を刻まれた愛馬海山　と共に赴任しておられ、全隊が単なる戦斗術としてではない馬術に熱を上げていたよき時代であった。

私は今村連隊長の設計で道路を隔てた連隊の向いに設けられた新しい障碍馬場（それはオリンピック会場を模したもとし聞かされた）での人馬汗みどろの猛練習を今でも雨上りの夏の朝の様な爽かさの中にはっきりと想い浮かばせられる。

当時、北海道を郷土とする第七師団はさきのノモハン事変により最も手痛い打撃を受け、将兵の士気全く振わず、部隊全体が極めて暗い奮囲気に包まれていたが、私共に対する将校団、下士団の空気は極めて親近感に満ちたものであった。そこには同じ様に、馬という生き者に慰かれる人間性の呼び合いがあったのであろう。彼等は徐らなりに軍人らしからぬ懐疑を持ち、未完成ながら将来日本を担うであろう知識人としての私達に対し、祖国の将来への展望を非常に謙虚な態度で聞くという風さえあった。

私達はそこに軍閥の末端としてではなくて、生きんが為の職業として軍人への道を選ばねばならなかった下級将校、下士官達の人生を垣い間見ることが出来た。開拓農家の小伜である彼にとって、例えそれが如何なる意味を持とう共、小さい時から親れ親しまざるを得なかった馬を取り扱う技術が唯一の生活の手段であった事実を思う時、そしてその様な生活の形態の故に彼の人間性が評価される現実の中で、私は人生の厳しさを考えさせられ、政治の難しさに嘆きを覚えるのである。

勿論この当時、私達が一緒に生活した兵達の立場も決して生やさしいものではなかった様であるが、それでも後年私が短期間経験した歩兵部隊とは又一風異なる職人気質とも云うべき気風があり、又馬という相棒に女房に対する様な愛着と依存心とを持っており、時には相手が面喰う程せつせつと世話を焼き、時には又、この物言わぬ女房に対し、他でのやり切れなくなったうっ憤を晴したり等していた様である。

幸い私の場合は、必ずしも強いられたのではなかった馬術が、私の軍隊生活に於ける大きな救いとなり、時には芸が身を助けるの感を深めたことさえあったのであるが、それにも増して私は中学時代からの馬術修業が、常に生命あるものと対決していると云う形で私の人生に対する考え方の基礎を作って呉れたことに深い意味を覚えるのである。

現在の部員諸君が、私共の時代には考えられもしない苦労を積み重ねてその馬術修業を続けていることに、私は気弱い涙ぐましさにも感ずるが、一面、その執着の中にこそ諸君に取っての青春の意義が生れて来るのだと声高く云い切りたいのでもある。

昭和十六年夏、六帝大戦のため南下した私達は、先づ訪れた東北大の建物が竹矢来を結い廻して、召集された新編部隊の本部になっており、本来そこの主である者達との仲間である私達さえ全く立入りも出来ない有り様に驚かされた。止むなくそのまゝ夜行で上京した私達は二、三日走り廻った結果、漸く今度の動員が全国的な規模のものであり、帝大戦も学生選手権も殆ど開催見込なしとの情報に暗然としたのであるが、祖国日本はその四ヶ月後に所謂大平洋戦争に突入し、大学は三ヶ月短縮、六ヶ月繰上げ、そして遂には学徒動員へと進んで行ったのである。

未だ空襲の洗礼を受けない東京は相変らぬ騒々しさの中で、なお銃後とは云われていたが、祖国というものの重さが肩先に迫っている私達にとっては「もう日本もそこまで来たのか」と、今更ながら身に泌みて来る昭和十六年夏の陽の暑さであった。（以上）

追記　お求めに応えるべく走り書きしてみましたが、混乱の時代でしたので、日時、人名その他記憶違いや感ちがいも多いと思われますので、出来れば岡田大兄にでもお目を通して頂き、訂正削除を願えれが幸甚です。

皆様の御健斗を切に御期待申上げます。

あゝ無情

「落馬、整骨院に通う」

昭和三十一年卒　大久保利彦

小生は昭和三十一年卒業である。学生時代は馬一筋のため北大に入学し四年間馬に乗ることを主体として、学問と社交ダンスを副として無事卒業した次第である。其の後全くといって良いほど馬には縁がなく、もっぱら牛専門になってしまった。これもやむを得ない、小生は雪印乳業KKに所属しているからである。

所が、現在地に転任して来たのが昭和三十七年六月、根釧に次いで天北は日本の一大酪農郷と云われている所で、当町に昭和四十一年より世界でも初めてと云われている天北西部地区大規模草地事業が始まった。これは牧草地一〇一〇ヘクタールという全く大きな牧場を作り各酪農家の若干をあづかり育成するのが目的である。事業が進むにつれて昭和四十二年百八十六頭が入牧され、その管理にどうしても馬が必要という話が出た。それは昭和四十三年七百四十頭、昭和四十四年千四百頭入牧の計画からみて一日二回の見廻りに必需品と決定されて、新得より一頭入る事になった。どんな馬かいろいろ話題になった時、「若し変な馬が来たら

小生がちゃんと教してやるから早い方が良い。」と自信満々と公言した。

所が前宣伝良ろしく、一新得の試験場が乗っていた馬故安心あれ。」との連絡で着くなり牧夫さんに渡したのである。来たのが道産馬。先づがっかり、そして若い牧夫さん三人が乗ろうとハミをかけ、クラを乗せようとしたらはねる事はねる事。クラはついに乗せられず裸馬にまたがるや又はね廻り全く乗れず小生の所に廻って来た。其の頃はすでに初雪が降り始めていた。小生の仕事も比較的暇故二つ返事で引き受け或る農家にあづけ数日后、試乗の日となった。

所がである。ハミは簡単にかゝったがクラは努力すれども半日馬の背に乗らず、午后やっとの思いで乗せる事に成功、腹帯をしめるや否や猛然と反抗、いさゝかびっくりするも小生自信満々。其の日は試乗せず馬と共に六キロ米歩く。（人、車には全く会わない道）

翌々日又昼かけ半日かゝってハミとクラをつけ、午后試乗、乗ったとたん道路であろうと雪の中であろうと、歩くともつかず、走るともつかず馬の言うなり、小生の自信半減。

夕方やっと人馬共に安心した様にぶらりと道路へ出たとたん、気に車がクラクションを鳴らした、馬はアメリカのロデオ並にあばれ廻り、小生ついにダウン。完全に落馬。（しかしタズナは持って居りましたぞ。）起き様としたら右手が言う事をきかず手首がダラリ……

それでも痛さをかくし本日はこれ迄。といって馬をあづけ、帰って手首をみると倍位にはれ上っていたのでびっくり仰天、早速整骨院へ出かけた所、〃骨折〃と診断されあわれ二ヶ月間骨つぎへ通うはめとなった次第。無情。あゝ無情!!

終

昭和四十三年卒

千葉幹夫

馬術というものについて、これは一体どんなものであるのか、常々色々私の考える事を書き綴って大方の批判をあおぎ、より根本的なものを考察して見る機会を得たいものと考え、編集子の依頼を機会として、雑文を草してみたいと思います。

馬術とは本来、自然にそういう事の出来る能力を持つ馬という動物の上に乗って、人間の意志にしたがってこれを動かすことによって行われるものであり、一種のスポーツであると同時にこれを芸術的領域に迄昇華さす事の出来るものであると思います。スポーツとは芸術とは何かという議論はひとまず置いて、この様な馬術の根底にあるものを探ってみたいと思います。

馬が無くては馬術は存在し得ないでしょうし、馬より走る事がいくら迅いといっても、又馬よりいくら優雅な動きができるといっても、他の動物、機械をこれと置きかえる事は不可能なことでしょう。馬がとにかく必要なものであるという前提を置く事が大事と思われます。

馬、これは長い間に人間の手が介入して改良が加えられたとは云え、自然の造形物であります。この自然の産物である馬というものに大きな比重を置く馬術は本質的に自然というものに大きく立脚しているのである事は否定出来ないでしょう。馬という動物に

は感情があり、その程度には差があって人間よりはるかにおとるとは云え知脳があります。人間の手のとどかない生命の燃焼があります。人間よりかなり大きな図体を持つ馬も自然の基本的物理的な物質運動の法則からはみ出すことはできないでしょう。

この様にあらゆる面で自然を土台とした馬術に不自然又は反自然な馬術というものは存在し得ないものであると思われます。馬の本質からずれ、又は他のいかなる自然的法則からずれた反自然なものは馬術ではあり得ないのです。自然の法則を無視しあるいは反するものはこれはサーカスと云い、はっきり馬術とは切りはなして考えなければならないものであります。何かの中介物を置く事によって、あたかも人間以上の思考力を有するかの如くに見せる学者馬、又は単にきれいに見える、人の気を引きつける事が出来るというだけの理由でなされる数々の不自然、反自然な運動はすべてサーカスの範ちゅうに入れなければなりません。馬術とサーカスの間にはかなりの類似がある様に見えても根本的にはこの様な大きな差位があるのです。

馬術をやる場合には自然というものを良く知る必要が生じます。特に馬についての自然ということ、馬の構造、心理、性質……etc。なぜ右の手綱を引くことによって馬は右へ廻転するのであろうか。なぜ馬は脚を使えば前へ進むのであろうか。これらは自然というものを知ることによって解答を得る事が出来るのである。

遅滞のないスムーズな運動は美的感覚に訴えるものである。スムーズな動きとは物体の重心の移動が滑らかに行われることによってなされるものであり、頭、手、足等の末端部の動きにばかり気をとられて重心の移動がなされなければスムーズな運動を行う事は出来ない。重心の移動という事の為には重心点を掌握し、これに働きかけることが出来なければならない。重心点を知る為に平衡を感得し、重心点に働きかける為に、平衡を維持、破壊が出来なければならない。これが大きな図体を持ち、強い力を持つ馬をほんの一寸した指先の力だけで思う様に自由自在にあやつる術の根元であると思う。平衡という事をとりあげるとすぐ第一に鞍から落ちない為のものであるという風に考えがちであるが、その上に自分自身の体重と馬体重を含んだ運動体の平衡というものがあり、それがより一層重要なものであるという事を知る必要がある。

馬の上に乗って人馬一諸の運動体をその中に居ながらいかにして動かしていくかという事の為に騎乗法、御術が考えられて来たのである。馬にいかに望み通りの運動をさせ、馬がその命令に従って一生懸命やっている時に平衡を破壊する事なく、意志あり、感情ある生物の上に安定して居る事が出来るかという事が二百年の馬術史上でも最重要課題であった。この長い歴史の中で騎乗法がどの様な変遷を経て来たかを知る事が馬術というものを正しく認識する大きな助けとなる事と確信する。

上手いという事、良いと云われる馬術とは何か、理想の姿を正しく頭の中に持ち、常にその様になる様心掛け努力する事が最良の方法であろうと思われる。理想の姿、完璧な馬術が存在するとは思われないが、比較上、良いと云われるものを数多く見る事が頭の中に理想的なものを正しく描くことが可能であろうと思われるし、又この理想のイメージの正否が騎手の価値を左右する大き

な要素になるのではないだろうか。

「新年会」

昭和四十年卒
吉田賢一

車窓から見える武蔵野は淡い冬の日を浴びていた。枯木の連なった雑木林は故郷に私達の思いをひきいれていくようであった。大気はさわやかで、東京のスモッグの空に比べれば、その青さがきわだって見えた。視線の長い線路はどこまでも続くようで、どこか学生の頃測量のバイトで行った野幌の風景に似ていた。私達大木、野田、横田、松永、小川、吉田は、この線路の上をどっかたよりなげに歩いて行った。何でも東部東上線鶴瀬から大大の家まで行くには、まともな道路を行くより、十分間隔時速八十キロで突っ走る東部東上線のこの線路を行く方が近いのだそうである。これには一同へえっと言ってあきれ、大木はのんべえだから、そのうち大木の嫁さんが後家になるぞなどと冗談をいいつつ、線路の土手を下り、やっと人並に道路に出る。大木そのうちハッスルして家までかけようという。そろそろ下腹の出かかった六人が、乾ききった武蔵野の畑の畦を、土煙を上げながら、ヨタヨタと走っていくさまには、とうてい何年前か合宿でボブラ並木を走った雄姿はみられず、まことにケッタイなものである。

今日は四十年卒業、馬術部在京O・Bの新年会、私なんぞ前の晩飲みすぎてがんがんする頭をして、けなげにも日曜日の九時に起きて、横浜から埼玉県まで、はせ参じてきたものである。

大木の家につく。相変らず美しい大木の嫁さんに出迎えられ、チョンガー三人大いにテレる。どうも大木にはもったいない美人だということは衆目の一致するところである。二階に招じられて、一同昨年の無抄多をわび、今年の活躍を誓う。ここで少しこの在京O・Bの近況をお知らせしようと思う。

今日のホスト大木、相変らず巨体に笑みを浮べ、奥さんにデレデレしている。結婚して二年であるが、はや一軒家をかまえ、御両親といっしょに住んでいる。私なんぞチョンガーで、飲み屋のママの顔をみなければねむれないようなタヨリない男にとっては、十年の先輩のようで、ニャコメである。

野田、これも相変らずぼさぼさの頭で、ちっとばかし分別のついた顔をしているが、中外製薬のTVのコマーシャルに、ビーグル犬といっしょにうつっているとか何とかいってにやにやしている。何でも大勢の白衣を着ている研究者のまん中へんにいるそうである。小生は何度も聞かさえているので、中外のコマーシャルの時は、あんまり大きくない目をせいいっぱい大きくして見ているのであるが、あのコマーシャルはビーグル犬が主役で、それを殺している研究者達は二秒も画面に出ないので今だにわからない。部員諸兄で目のいい方はとくとごらんあれ。

横田、昨年北海道のドサまわりから解放されて、東京の研究所に来た。女にもてないことを悟ったのかどうかしらないが、永々としてためた貯金をはたいて、正月休みにヨーコッパに行ったそうである。どうもヨーロッパから帰ってきたばかりのハイカラな顔はしてないが、酔うほどに、ヨーロッパはなってない。日本が

一番偉大であるというから、ほんとにそんな気がする。小生なぞ、まだ、もてるんじゃあないかしらんと思い、トラの子の貯金は肌身はなさず持ち歩き、時に美人に会えば、彼女のウエディングドレスの横に自分のモーニング姿を思ったりするから、横田みたいな思い切りのよさはまだない。

松永、ずっと東京にいるのに会うのは五年ぶりである。聞けば十二月に結婚をしたそうである。いっしょに振りチンストームした小生にとっては、晴天のヘキレキの思いである。その上見合でなく恋愛だそうである。ああ世の中何かが狂っとると一同天をあおいでしばし声なし。今日は都合でこれなかった萩原と二人で、日立製作所にいるが、日立は遠からずつぶれるとは一同満場一致の意見である。

小川、札幌の伊藤忠の支社から東来に来たばかりである。すこしひたいがはげ上りすごいかんろくである。これも五年ぶりの再会。今、奥さんが二人目を生むために実家に帰っているようで、semiチョンである。酔うほどに夫婦の真随を聞かされ、チョンガーの三人はもとより、大木、松永もいやになっちゃった。何でも彼の家の夫婦ゲンカは非常にもうれつだそうで、彼の奥方はひっかくそうである。ために彼はせまい社宅の中を逃げまわるそうであるから、今度彼の家を訪問する場合はヘルメット持参のよし、大いに同情をおぼえるが、一同腹をかかえて笑う。それでも二人目の赤ちゃんとに春から大いにめでたい。

私吉田は、大木や野田と同じく研究所にいる。私みたいに低空飛行をして卒業したものが、研究というアカデミックな仕事をしていることが、横田の説によれば昭和元ろくのおかげであるそうである。私もそう思っているが、頭の悪いのは親のせいと思っているので、別段気にはしない。

日の高いうちから飲み義したため、二時頃には全員酔っぱらってしまった。大木が近くに釣り堀があるから行こうというから一同塾いをさましに外に出る。

太陽ははや西の空に傾きかかっている。大木のいうところによれば、高々十分というので、畑の中をいさんで行くが、どこまで行ってもみえるのは大根とホウレン草畑である。彼がコンピューターの技術者だということが、私のみるところによるとよくわからない。コンピューターという精密な機械と、十分もかからんよといって、三千分も畑の中を歩かせた男とはどうもイメージが一致しないからである。一同ぶつぶついいながら少しさむくなった釣り堀で糸をたれる。それでも一時間ぐらいで野田と松永が三〇センチばかりのニジマスを一匹ずつ釣った。

そして私は、帰り道まだ酔いの残っている頭の中で、幸福だなと思った。こんなにいい友達はほんとにいないと思う。私は時々馬に乗った我々や先輩の姿をなつかしく思い出す。あのすばらしい時間は永遠に還ってこない。しかし私には馬のぬくもりや、なつかしい馬房の臭いを知っている友達がいる。私が生きているかぎり苦しみや楽しみを共にした友達に会えば、あの時間が還ってくる。私にはそれがうれしい。

終り

おたより

昭和八年卒

武田朝男

拝復　貴部員一同意気益々高く、日常馬力を出して居られることと存じます。今般馬術部報の原稿とのお話を頂きましたが　馬愈々齢のみを重ねご期待に応え得ないことを申訳なく思います。ご健斗を祈ります。

昭和九年卒

東園基文

去る二月十日在京OB会の総会で吉見一郎先輩は部を尋ねて聞いてきた話をくわしく報告、武田朝男先輩は一日も早く送金すべしと主張。昭和七年卒業の松永四郎大先輩を先頭に一番若輩の八木沢先輩まで三十名余りの出席者が真剣な意見をのべた。私はその中で物質的援助だけが決して部を救う道ではないとうったえた。そして何か具体的な名案があったら示してほしいと問うた。われ等のホープ千葉乾夫先輩から実にありがたい計画について説明があった。しかしその好意ある企てすら徒労に終るであろう悲しむべき現情であるとうれえる向も少くなかった。そこで私は声を大にしていいたい。君達の信じている自然馬術だけが馬術のすべてではないと!!君達がそれ以外の御術や調教法に耳をかそうとしないなら一般の水準から独りとり残されるほかない。自然馬術の本家本元のイタリアのオリンピック選手が大障害出場前に二蹄跡運動をするのを見て君達はそれを何と解釈するのだろうか？君達はそれを理解するだけの馬術の根本をすら知ろうとはしないのだろう。そうとすればどうしようもないというほかはない。それで良いうだろうか？どうかもう一度考えてみてほしい。

どうりで古臭い、なんてそっぽを向いて下さいますな。かく申すは昭和九年卒業、部には大変お世話になった東園（旧姓伊達）と申すものです。

昭和十一年卒

脇田代子郎

御便り有難く拝見。益々御活躍願ひ升。

小生は三菱の化学会社に勤めて居り升が、昨今の大型化、国際化で誠に多忙です。

時折、何十年前の札幌での学生生活、馬術部時代をなつかしく思い起して居ります。

若き学生時代、青春を恵まれた北海道の自然の下勉学にスポーツに大いに精進され、心身を練磨されますよう願い升。　草々

昭和十三年卒

松平悌

前略　折角部報原稿の依頼をお受けしたのですがついつい時間切れとなり、又仲々よいテーマもなく大変勝手ですが今回は失礼させてもらいます。悪しからず。兎に角二十年近く馬の背にまたがったことない状態にて馬体に触れたことも昨秋富士山五合目で観光用駄馬の鼻をこれ又何年ぶりにという有様。馬術OBの看板

もはずさねばと思っている次第。しかし細々ながら元気一杯在京OB会は皆勤。今では所謂お年寄りとよばれるグループに入ってしまいましたが、まだまだ馬談義は人後に落ちる気概はあります。今でも七帝戦第一回優勝チームのメンバーの誇りはもっています。部員各位の奮闘を祈ります。

東北本線の白岡駅（埼玉県大高より）のそばにサッポロビールのネオンのついている工場は小生の職場です。皆さんに宜しく。

草々

昭和十四年卒

池内武夫

酒がうなく飲める程度には達者であります。

時折馬事公苑で馬に乗ってをりますが、出張などが多いので仲々思うに委せません。

競馬会での私の担当業務の中に乗馬普及という事項があるのですが、皆様の御知恵を借りて何等かの新生面を開きたいものと考えています。技術の伴わぬ理論は全くの空論です。

只管馬に乗ることを現役の皆さんに望みます。

昭和二十六年卒

斎藤善一

前略　今年度こそは部誌に投稿しようと張り切っていたのですが不本意乍ら、期日におくれ、来年にします。

弘前大学馬術部も創立四年にしてようやく自馬を持ち、学馬連にも加盟致しました。学馬連の目的、趣旨にも、この様なヨチヨチ歩きの馬術部の育成、充実という事があるかと思うのですが、古い考かも知れませんが）よろしくお願い致します。

北大馬術部の発展を心から祈ります。

昭和二十八年卒

古谷昌司

前略　部員諸君も半沢部長殿以下なかなか大変な事と思います。

小生も埼玉国体以来、連盟役員として現役に戻り、社会人団体とは云え、自馬養生に苦労して居りますが、御蔭様で順次固りつゝあり三年連続の国体入賞の栄を受けて居ります。

最近現役に復帰して猶つくづく考慮する事は近年自馬スタイルが多くなり学生以下の若人はどんな馬にでも何時でも乗りこなせるだけの基ソ固めが大いに必要と思います。自馬を持つことにしたことはたいが、それ以前の己の基ソ確立が必要と思います。

自己の一応の固めが出来て初めて新馬調教らしきものが出来る。大いに健全なる明るい清ソな部として発展して下さる事を祈ります。近い内に機会をみて訪札したいと思って居ります。

最後に、全てに於いて「ナイトの精神」を忘れぬ様。

アウフビーダーゼン。

昭和三十六年卒

河原紀夫

八王子市郊外高尾山の麓にバンガローの様な家を建てて移りました。緑の多い山々にかこまれやっと人間らしさをとりもどした様な気がします。学生時代の札幌の自然にみちた生活を思いおこ

しております。学生時代からの不精者、諸君にあまり協力出来ず申し訳ありません。先輩にまけず元気にがんばって下さい。

昭和三十七年卒　大場善明

拝啓　いつもいつも〃部報〃をお届け戴き有難う。
毎年のことながら皆様のご苦労お察し申し上げます。期日までにいつも間に合いそうもない原稿をあちこち頼み込んで、夜な夜な部屋の裸電球の下であるいは〃恵迪寮〃の同僚が、バイトで出かけている間の机を拝借しての〃部報作り〃…。出来上ってからの郵送料の馬鹿にならない出費…。つらい思い出ばかりですが、しかし今になると郷愁はおぼえます。あの時、やって良かったと。期日に間に合えば幸いですが、そうでなければこれでかんべんして下さい。

ー◇近況◇ー　相変らず〃朝から朝まで〃無茶苦茶に稼がせてもらってます。（毎日社内に十四、五時間は頑張っています）…（私の本音）その割には身入りは極めて少ないと思っている。）三年程前に会社内に〃読売乗馬クラブ〃なるものをデッチ上げ、予算を会社からもらえるようになったが、余り活動しないので、予算を使い切れずに弱っている。（ホントの話です。）私自身にもう少し時間の余裕があるならば、いくらも使い道はあるのだが、〃時間〃がないと云うことがサラリーマンになって最大のショック!!現在、小金井市にある「さくら乗馬会」なる所に出入りしてます。同じ場所で〃法政〃〃青学〃（いずれも二部の学生）の連中が練習しているのを時々見かけるが、「オンマ遊び」の域を出ていない。北海道で馬に乗った者にとって、東京は馬を育てる所ではない。ただいたずらに馬を消費する所です。

昭和三十七年卒　木塚信次

拝啓　昭和三十七年度卒業の大塚です。
卒業は北大畜産科内製品製造教室です。
卒業後健康を害しておりましたが殆ど完調に近くなり、現在横浜市戸塚区戸塚町六区の九四三湘南食品工業KKの研究室主任をやっております。小さい会社ですので何でも屋でとくに現在はスーパーの直営店で対面販売の一線に立っており、販売成績を上げております。目標は卒業時の食肉二十倍論を地で行って、現在の十倍近くは日本人に肉を食わせること。
サクラ肉は使っておりません。やはりお馬さんは尊重しないとね。
では又。

昭和三十八年卒　高林嬉子

ごぶさたばかりしております。
部報をいつも楽しみに読んでおります。卒業してから一度も津軽海峡を越えて行く機会がなく、毎日忙しく生活しています。
現在は十ケ月の男児を育てながら、虎の門病院内科でもう少し勉強したいと思い頑張っています。
馬術部のご発展を心からお祈り申上げます。
先、後輩の方々によろしくお伝えください。

昭和三十八年卒　玉沢　一晴

寒中御見舞申し上げます。

来るシーズンを向えむと、部員の皆様は愛馬と共に頑張って居ることでしょう。

冬のボロ出しは全く大変ですが、馬体の手入れと共に最も大事な仕事の一つです。よろしく。

昭和四十二年卒　山村　勝

卒業してから三年にならんとしているのに学校に残っていたころはまだ部員と同じような考え方をしていたように思われ、それに比べ馬に接しないこの一年、やはり馬のことは思い出としか湧き上がってこないようになってしまいました。機会を作っても、とは思いつつ、周囲が変れば容易にはできません。

何につけても、現在自分自身に余裕がなく、これからに不安を抱きつつ、シーズンでもあり、嫌いでもないスキーに気をまぎらせて毎周土、日とゲレンデに出かけている有様で、何かを書こう、書きたいこともありそうなのに、いざという時になると仲々というところです。

スキーにおいても、今までは、自己流で滑っていましたが、目標を求め、スキー連盟の教程にのっとった滑りを覚えようとしていますが、馬術においても、スキーにおけるオーストリアとフランスのような指導要領の差はあるにしても、競技を目的とした場合、そのルールを無視はできず、スポーツは所詮体制的にならざるを得ないでしょう。従って、目標にいかに速く、合理的に近づくかが理論的裏づけとして必要としても、あとはその中で実践あるのみです。

大学あるいは社会への反体制表明とクラブ、あるいは馬術とはまさに正反対であり、その中でのこの一年、部員にとっても大変な一年だったことでしょう。あるいはこれからも……

自分にとっても大学の問題は、他人事として考えられずにいますが、このまま現状の中で終ってしまいそうな自分を予想して、癪になります。この混沌の中から現在の部員諸君が最良の道を見出すでしょう。過大な期待は抱きませんが、ただ愛馬達と礼儀がなつかしく思い出されるだけです。話し合うなり書くなり又機会があれば……。

昭和四十二年卒　近藤　喜十郎

現在、アメリカ、カルフォルニア州を短期旅行中です。競馬場はありましたが、乗馬クラブのようなものを現在捜し乍らまわっております。

今年度の活躍を期待しております。馬に乗る時間が多い程、うまくなるとは限りません。不断の研究と、自己体力の向上に努力して下さい。

部員プロフィル

続〃他人の顔〃

神様の巻

太田清澄　松本渓志高　農学部農学科

我が部を背負うキャップ。肉体的、精神的苦痛を精一杯耐えているようである。話す時の知的な態度は我々に〃頼れる男〃の感を与える。顔にはひげをたたえ、メガネを取るとインド風好青年、たのもしきキャプテンである。

大将・詩人・野武士・ひげ・悲観

堤　秀世　札幌旭丘高　獣医学部

非常におとなしい人であるが時として突飛な事をしでかす、まじめであるがふざけるのが心から好きという人である。これが大学の定期試験の時とび出したからたまらない。三年目二年生である一因はここにあるのかもネ。問題の多い馬術部のマネージメントを一人でやってくださっている頑張り屋でもある。

玩具・サーカスの猛獣使い・犬の調教師・頭の体操

中寺清久　田川高　工学部機械化

三年目では一番のスタイリスト、エエカッコシーである。初めは甘さが感じられたが、上級生らしさを作り出すのに努力し、最近ようやくその兆しが見えてきた。これと思った事には徹底して我を通そうとする。それゆえに又好ましき人ではないだろうか。

愛馬北農の足に、悩み多き彼である。

タバコ・ねずみ、ブレイガール・ディズニー映画

松井　亮　金沢泉丘高　医学部

ついに出ました作業主任。我部で一番悪者にされる役である。それがなければ、とってもとっつきやすい人である。ナツメロを口ずさむたどいいですなあ。き然とした態度と熱心さは今までの主任には見られなかったものがあり、それだけに不満を向けられる事も多くなろう。しかし我が部には必要欠くべからざる所の作業主任様でございます。

労働者・現場監督・労務管理・ナツカシのメロディ

松永由可里　札幌開成高　理学部生物学科

三年目唯一の女性。上級生からはかわいがられ、下級生からもしたわれる愛すべきかわい子ちゃん。言葉のふしぶしに残る幼さが、下級生からも人気の出る由縁であろう。とにかくかわいい人です。ひとりじめにしようとするのは誰ですか。ずるいぞ、ニャロメ。

天使・妖精・は虫類・とかげ・ガラパゴス島・フェアリーダスト

今井敏郎

札幌南高　理類

変人の多い三年目にあってまともな部類に属する方であろう。しかしどういう訳か教養にとどまり、二年目部員三人と共に忙しい日々を送っている。三人がいろいろ世話になっている所を見ると、なかなか勉強家なのだろう。姉さんが卒業されて大いに羽根を伸ばしている様だ。割と理屈っぽい所があり、この前は、資本論を読み始めていたがもうやめている事だろう。家に弟の高級なステレオがあり、ビートルズの曲などを聞いている様で、時々変な英語で歌っている。

中村慎一

多摩高　水産学部

少しも馬術部に毒された所がなく、模範的な大学生である。しかし残念な事に函館の水産へ行ってしまった。夏はオートバイでカッコよく部室に来、当番の時などはリヤカーをオートバイで引っぱっていた。三年目唯一のフェミニストであった。函館に行っても馬術を続けるそうである。部員より馬の方が多いとか。海岸でおもいきり乗るんだと喜んでいた。

桝井　明

大阪浪速高　工学部鉱山工学科

頑固も頑固、頑固一徹である。自説を曲げる事はまずないから議論しても無駄である。又頑固な北顔のチーフになって非常に可愛がっている。練習も非常に熱心で夜遅くまで、アルバイトをやっていた時などは朝起きられないのか、毎日部屋に泊まりにきた。にこにこしているが去年は大分苦しんだ様である。自然馬術のメッカイタリアへ行く事を目標として、もっか節約生活をしている。はたして学生時代の夢は実現するか？馬はもちろんの事、猫にもえさを与えてかわいがる動物愛護者である。最も外見も動物的（きたないということで）ではあるが。

寺島　亨

仙台第二高　文類

ひにくれているという事は誰もが認めるであろう。誰かが「気分屋」だと言ったが、そうかも知れない。去のの暮は部屋にケーキを持ってきたくらいだから。一年の時の心がけが悪かったのかいまだに教養である。溝義には全く興味を持っていない様で毎日何をやっているのか。時々クラブをやめる事をいい出すのをみると、気の弱いところがあるのかも知れない。

梶村哲也

大阪天王寺高　獣医学部

大阪人である。しかし関西弁を話すほかはそんな事を感じさせない。大阪商人とは違うという事である。鬼の中では正常な方であろう。遊びに溺れるという様子もなさそうなのだからもっと勉強してもいい筈だが、そんなにしてない様だ。もっといろんな事ができる筈で、期待されるべきである。まだまだ不満である。大見兄と中古テレビを共有し、共に三年目の集合場所を提供している。

大見太一

小倉西高　文学部英米文学科

九州は小倉の産。高校の時水泳部に属し、未だに忘れられないのかよく新雪の中にとび込んでいる。食い物に対する執念はものすごく、コンパなどでは回りの者を絶食状態に陥らせている。パチンコの名

手で借金を返すために、朝からパチンコ屋へ行ったりする。時々負けてすごすご返って来る事もあるが。勉強とは縁が遠く学校へ行けたのが奇跡みたいなものである。

前田和子　旭川北高　文類

一年目唯一の女性、あのふくよかな体つきとお顔からはピンキーを思わせる風格がある。いいお嬢さんである。いつまでもいっしょにやっていきましょうね。若をしたう人もいる事だし。

安国庫生　神戸高　理類

なんていうても、あんたがクラブ一のハイカラマンやわ。しやかて、あんたはダンスが得意やろ。ダンスのできる人はそうはいまへんもんなあ。馬の方もがんばってくれなあきまへんで。

田崎拓昭　鶴丸高　理類

九州男子にしてはたよりなさそうに見えたが、そうでもないようだ。高校時代、生徒会長をしたことがあるとかで、しっかりした所もあるのでしょう。ガンバッテください。この人も又麻雀仲間、最初は授業料が高くつくとか、こぼしながら続けていましたが最近ではやっとぐちが出ない程になりました。ケッコウでした。話は変るが運転免許はまだですか。

鳩田　豪　四条畷高　理類

長い脚を持ち、体は案外柔軟で、跳数の割にはうまく乗っています。大見兄を助けて（というよりは大見兄の助けをかりて）の馬具、備品の大任ごくろうさんです。思いやりのあるおとなしい人。

西村正二郎　宇部高　理類

映画及び映画音楽が大好きでのう、例えばベンハーを五、六回、…を四回、…を三回と気に入れば何回でも同じ映画を見るというんじゃから、大変なものなんです。映画監督になりたいそうですが、どうですかねえ。栗原小巻ちゃんの大ファンで、部屋の壁に写真を何枚もはっちょる。大食いと奇妙な字を書くことでも有名である。

近森憲助　土佐高　理類

彼の顔色は南国土佐出身であることを裏づけている。休暇には必ず帰省する親孝行者（？）。小島兄と共に馬術部にはふさわしくないような美声で歌を歌う。水産放浪歌はたいへん気に入っているようす。本人も自覚しているように、七十数キロの体で何回も飛び乗り、飛びおりをやるのはやっぱり馬にかわいそう。その後の減量はどんなぐあいでしょう。

武石吾郎　札幌南高　理類

札幌に生まれた由に毎朝五キロもの距離を自転車で練習に来る。いつも漫画にでもでてきそうなヘルメットをかぶっている。授業があれば必ず溝義に出席しているという、部員でもまれなまじめ人間。その半面一週間に一度は近くの三本立映画館へも通っている。

小島京介　高崎高　理類

彼といっしょにいるとどうしても怪怪の筋肉がゆるん

でくる。この男何でも一通り知っているが料理のうではたいしたものである。大学を追ん出されてもコックの道があると自覚するほどである。「歩くことはいいことだ」として毎朝三十分以上も短い足で歩いてやってくる。大きな馬では飛び乗りがうまくいかず、馬の飛節を利用してよじのぼっていたのは忘れられない。

旭川東高　文類

小林英一

馬術部の伝統をくずそうとしている。なにしろきれいな服をきてくるんですよ。高校時代に〃テケテケ〃なんて音を出すバンドの一員だったそうである。夏の合宿の時、松井兄が「おまえ！張っちょるな」なんていったら、彼「しぼんでます」なんて迷言をはくのであります。旭川にはかわいい妹がいるそうです。皆さんがんばりましょうね。（何をがんばるのか知らねェけど）

札幌西高　理類

細谷卓司

一年目唯一の経験者。といっても馬にまたがったことがあるだけである。春から秋にかけて〃ネフローゼ〃がぶっこわれたので顔をみせなかった彼も近ごろはぼちぼち〃どうでもいい顔〃を出す。あっ　いけねェ　本当のことといっちゃった。

御影高　理類

横山豊昭

ヒネているといおうか、落ちついているといおうか、サエないといおうか、なんていったらいいのかわからないような彼。そんな彼も女の話になると、目はランランとかがやき、サエてくるのである。この彼氏、英語二級の検定試験なんてものを受けるのだから、世の中はわからないものである。

長岡高　文類

宮覚

きたねェ！と、七定戦のときに先輩が罵口一番、発したことばである。近頃自分ではきれいにしていると思っているらしいが。彼の顔といい、身なりといい、モーレツア太郎の「ベシ」にそっくりである。しかし諸君！とかいうやつである。（わかるべし）

愛知県立旭丘高　文類

人間の巻

大沢芳夫

いつも頭の毛はミジャモジャ、まるで鳥の巣である。（彼曰く、ソレハナイ、ソレハナイ）それでも風呂あがりには必死になってその髪を伸している。彼麻雀仲間の一人であったが、ゆえあってかあまりやらなくなっている。非常に練習熱心な人。

東京教育大付属駒場高　文類

山下秀樹

父子そろっての競馬狂。北力（競走名チカラ）がとても好きになったようで、北力の馬房は自分から進んで掃除をするそうです。東京人らしくなかなかダンディ、又、いろいろとヒマのない男である。

黑　　板

K馬あ・ら・かると

二年目　山下秀樹

背伸びしてみィる海峡をーと、町中どこへ行っても「港町ブルース」がきこえてきた函館の町、時期は八月の中旬、競馬の成績も良かった私はいっぺんにこの町が好きになった。スタンドからは広い海が間近かに見え、右手には立待岬。時々何やら船らしきものが通り過ぎていくのをぼんやりながめ、はっと気がつくと直線のデッドヒートをおえて次々にゴールしていく馬が目の前を過ぎ、あわてて着順を解かめるといったのんびりした気分になったのも府中や中山とは違った趣きがある。ここでのスターはタニノソブリンにミスマルミチといったところ。例年話題をさらう函館男リュウズキは今年はじめてこの地で敗れた。

リュウズキといえば、私が競馬を始めた年の三才馬が今年は七才になってしまったが、道三才Sを勝って最初のスターになったのがこの馬であった。以来、精悍なこの超大型の青毛にひかれ、四十二年の秋は目黒記念、天皇賞と裏切られながら有馬記念で単勝馬券をものにしたうれしい思い出もある。

思い出というと、女との思い出も競馬に関しては随分とある。ルピナスが優勝した四十三年のオークスを一緒に見たのは恭子。クラシックレースのことゆえ、見動きとれない程の穴場の雑踏を私のシャツをしっかり握り、腕をとってついてきたこの娘に、私は損をさせてしまったっけ。

また、いっこうに電話もかかってこないし、手紙すらもこなかったのが、その間クリスマスプレゼントのマフラーを編んでいたとわかり、つくづく可愛いいと思ったその女からそのマフラーを渡された日、私は有馬記念の出馬表をポケットにーコレヒデが勝つともつゆ知らず。ナスノコトブキに期待してたんだあな。

おくれ毛のいやさやにほひわが胸に
思ひせまる君がおもかげ　浜哲三

ナスノコトブキのことなんだけど、こいつはモンタヴァルの仔で名うての悍馬。だけどスピードシンボリを負かした菊のあの栄光を唯一の誇りに死んでいった彼は（最後のレースであった天皇賞の時のテレビの中継で見た彼は）しょんぼりと白鳥に何かを語りかけているように思えた。競争中の事故で死んだ馬の話は結構多いが、最近ではキーストンの死が劇的だと思うー阪神大賞典で脚部に故障、落馬の後、ふり落した騎手に向ってびっこをひきながら寄りそっていった話は死んでも走り続けたサチカゼとは違い、私をよろこばせ、かつ悲しくさせた。

その淀の競馬場に初めて行ったのが、昨年の菊花賞の時。われながら物好きとは思ったが、札幌に本拠をおく今の生活からはるばる京都まで競馬を見に行ったことだけで、私はかなり感じ入ったものだ。前日京都入りした私には、しかし心に重たいものを持ってもいたー誰も知らない美しい感傷でいい。

前にも書いたが、この競馬場は走路の内側すべて池で、白鳥が泳ぐ箱庭みたいな感じの美しい競馬場なんだけど、京阪電車の混みようには参った。

「ドン河畔、コストフ市において、今回ボルシエヴィキ党は、その　足を欧州中に知られた競馬クレピッシュ号を銃殺刑に処した。判決文の要旨には「この馬はこれまでに出走した競馬で、合計三万ポンドの大金を儲けた。すなわち、この馬はブルジョワに属する」と記されていた」（ディリー・エキスプレス・一九一九年十二月二十七日付）

レーニンのいたボルシェヴィキの頭の堅さがこれである。目を血走らせた童貞のゲバルト学生はどんなことをするだろう。ひょっとしたら、リキは（部の馬で悲劇にあうのはこいつだけだから）頭をかちわられ、ボブラ並木に野ざらしにされるかも知れない。

親愛なる馬術部の諸兄の中にリキのキンタマを喰った御人もいるという……

最後におまけ。今年のクラシックレースはアコーニクスプレスやタニノムーティエでなく、ブランドーが活躍するであろう。

これは一月十五日付の予想。

「馬」の字のある「馬」のいない国

二年目　小島京介

「馬のいない国」というのは、「上野の国」、つまり群馬県である。近年群馬には競走馬を除いて馬はほとんど見られなくなった。が、この国は昔は良馬の産地であった。大和初期から奈良時代にかけて「東国の馬」と呼ばれた馬を産した。以後時が進むにつれて「東国の馬」は東へ東へ進み、江戸時代には奥部、相馬などの地域となった。今日では日高地方が名馬の産地として名高い。

この国が良馬の産地になったのは、日本における乗馬の風習は発生に起因している。

日本に乗馬の風習ができたのは、四～五世紀ごろで、それ以前は「魏志」『倭人伝』『東夷伝』にみられるようにその風習はなかった。馬がいなかったのではない。名古屋のある貝塚より馬の遺骨が発見されている。四～五世紀に乗馬の風習ができたことは、当時古墳に埋葬された馬形埴輪、馬具によって証明されている。

なぜその風習ができたのか、これは大和朝廷が朝鮮半島進出をくわだて、騎馬民族である高句麗と戦うことによってできたのである。高句麗と戦うことによって、騎兵の必要性が生じ、それにつれて馬も馬具も、馬の飼育ということも必要になった。

「日本書紀」によると百済王が二匹の馬を献上し、それを帰化人の阿直岐（あちき）が飼育したとある。このことは日本に乗馬ばかりでなく、馬を飼うということが生じたのである。馬が飼えるとなるとそれが財産となった。各地の豪族たちが競って馬を飼い財産とした。

馬を献上したので人間の首がつながったという話もある。各地の豪族たちが競って飼育したり、大和朝廷が半島進出のために馬の大量生産を強いたため各地に牧場ができた。「上野の国」もその一つである。

当時牧場のあったところは、今でも地名として残っている。「上野の国」は沼ケ所。水上温泉の近くの「上牧」「下牧」、下仁田町の近くの「南牧」「西牧」である。

最後に昔話を「昔、上野の国の緑野郡、多胡の郡司に羊太夫という人がおりました。羊太夫には七人の美しい娘と一頭の馬がいました。この馬は馬というよりは、ペガサスといった方がいいような馬でした。この馬はわきの下に羽根がはえていて、都と多胡郡の間を一日で往復し、毎日貢物をとどけておりました。ある日この馬が昼寝をしているとき、羊太夫がこの羽根をみつけ、いたずら半分にこれをそってしまいました。するとこの馬は一日では都との間を往復できず、毎日通っていた半太夫は通えなくなり、朝廷より反逆をくわだてていると思われ、ほろぼされてしまいました。七人の娘は輿に乗って逃げたが途中捕えられ切られてしまいました。民たちは憐れんで、りっぱな墓を作ってあげました。」これは七輿山古墳の伝説であるが、良馬の産地ならではの伝説と思い書いてみました。

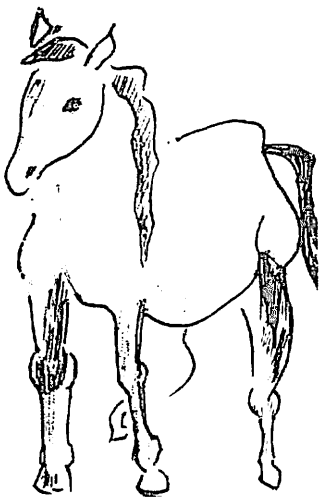
〃寒気をついて〃

三年目　今井敏郎

東の空から白け始める頃、寒気をついて、単騎で出る。手綱をゆるしたままでも北凛はどんどん前に出る。吐く息もいっそう白く、顔も痛いほどの冷えだが、北凛のその動きと、蹄が噛む金属的な音は、あたりの空気を緊張させる。キュシッ、キュシッ、とその音はコンクリートの建物に反響する。と北凛はその音の方へ耳を向ける。他にも馬がいると思ったのか、頸を回してその姿を捜している風だ。手綱を取ると、今にも走り出しそうに街を引いてくる。そのままグッと脚で押して速足を出す。今日の北凛はよく動く。フルルルッ、フルルルッ、と鼻を鳴らしながら、北凛も気持よさそうだ。中央ローンにそって正門に出る。そのまま速足で、電車通りを北へ駆る。北凛は少しも歩度をおとさず、みずから足音のリズムを楽しんでいるかの様だ。向かいから、朝一番の電車が、その静けさを破って走って来る。そのけたたましさに驚いて、急に歩度がおちる。電車が近づくと、後に逃げようとするので、手綱を控えて前に向けさせる。オーラ、と声をかけてやっても聞こえないかの様に、肩のあたりは緊張で震えている。電車通りへ出るのも冬に入ってからのことなので、むりもない。電車が通り過ぎるまで、腰を低くして聞ずさりしていた北凛も、後方へ音がしなくなると、放心したように息だけ荒く吐いている。ヨーシ、ヨーシと頸を撫でてやり、又馬を駆る。

練習をおえて厩舎に返るのは、ようやく人も起き出し、北大病

院へ出勤するおばさん達が姿を見せる頃だ。もう手綱をゆるして並足で返る。少し疲れたが、それさえも心地よい。北漠は体中白髪のようだ。発汗した湯気が、すぐまた毛の先に凍りつくのだ。ここでもこんなに寒いことはめったにない。鼻のまわりの鬣には息が玉になって凍りついている。すぐ鞍を下して水を飲ませると、北漠は気持よさそうに目を細めて、いつまでも水桶に口をつけている。



馬術部失格

三年目　寺島　亨

現在北大馬術部には九頭の自馬が繋養されている。経済的条件より鑑みて稍々無理のある頭数であり、精々八頭が限度かと思われる。

内訳は牡二頭、牝三頭、セン四頭。古馬四頭、新馬五頭。新馬の方が多い。之は何とした事か。入厩して二年以上にもなる新馬？が二頭。一年半になるものが二頭。一頭は昨秋入厩。之ぞ正真正銘の新馬なり。前記四頭中一頭には特殊の事情之有とするも、残り三頭中一頭等は一年三百六十五日の中、一体幾日乗れた事やら。又或る一頭は二年半近くの年月殆んど騎乗し得たにも関わらず、今だ調教ならずとはどうした訳か。調教責任者の怠慢か。否々とてもそうとは思われない。彼は熱意をもって乗り込んでいた事が傍目にもよくわかる。

然らば何故かかる不将来馬等をば後生大事にして居るのか、一向解せない。馬術部とは馬に乗るところではなかったのか？動物愛護協会ではあるまい。まさか伊達や酔興で馬を飼っているのじゃあるまいし。馬に乗るのは伊達や酔興かも知れない。而し其の為に大食いの馬共を苦労を物とせず食わせ続けているのだろう。

馬術部で繋養している自馬は飽くまで部員全員が飼っている馬である。然らば当然各部員はどの馬に対しても等しく乗る権利を有しているはずである。それが実際には不平等であるのは、馬の調教と言う特殊事情がある為、其れに競技試合に於ける　勝利の

栄光という恐らく各部共通の課題があるが為、其れに競技試合に於ける不平等は著しく、騎乗者は殆んど上級生に限られる。其れというのも之又調教と言う等殊事情があるが為である。事に下級生では技術水準から見て新馬の調教は無理であろう。

（此処で無理というのは、良馬をつくれないと言う位の意味である。）

従って主に上級生、特にその調教の任に当った者が乗る事に成る訳である。原則的には新馬調教の任に当る者は部員全体より其の調教を一任されている事になる。之を裏返して言うならば、新馬調教者は一日も早く部員全員の乗れる様な馬に仕上げる義務を負うて居る事になる。

以上述べた事はすべて原則論である。我々は馬術部員である前に学生であり、又其の馬々によって特殊な事情という事もあろう。而しながらいつまでもその様な事情に甘える事は許されまい、馬術部失格の落印を押される馬も居るはずである。

庄内歯科医院

院長 庄内貞夫

札幌市白石中央通 53－3

TEL 86－2504

躍進をつづける保健食クロレラのパイオニア

クロレラが豊富な栄養源である事は、世界各国の学者がひろく認めるところです。しかし、その生産を工業化することが困難であり、各国でも実験段階でした。当社は研究を飛躍的に発展させ、ついにその工業化に成功、世界に先がけて大量生産を開始しました。高度の技術と清潔な環境のもとで収穫されるのが、〈清浄培養による保健食クロレラ〉です。

保健食の王様 C 印クロレラで今日も元気に…

当社商品クロレラの一粒は、
天然クロレラ約20億個のかたまりです。
宇宙時代の現代に生れた
理想的保健食として御愛用下さい。

■効果の少ない類似品あり
C 印に御注意ください。

〔写真〕左から「ヤクケンクロレラ・グロスミン」、「クロレラ給食用エキスシロップ」、「クロレラキング」

発売元 三井物産株式会社
製造元 クロレラ工業株式会社
取締役社長 板波俊太郎
本　社 東京都港区芝浜松町4丁目23番地
電話　東京 (436) 0901～5
工　場 愛知県豊田市前山町3丁目22番地
資本金 授権4億円払い込み1億5千万円
工場規模 本社43.87坪　工場 6700坪

北翔号小特集

〝末完の大器〟

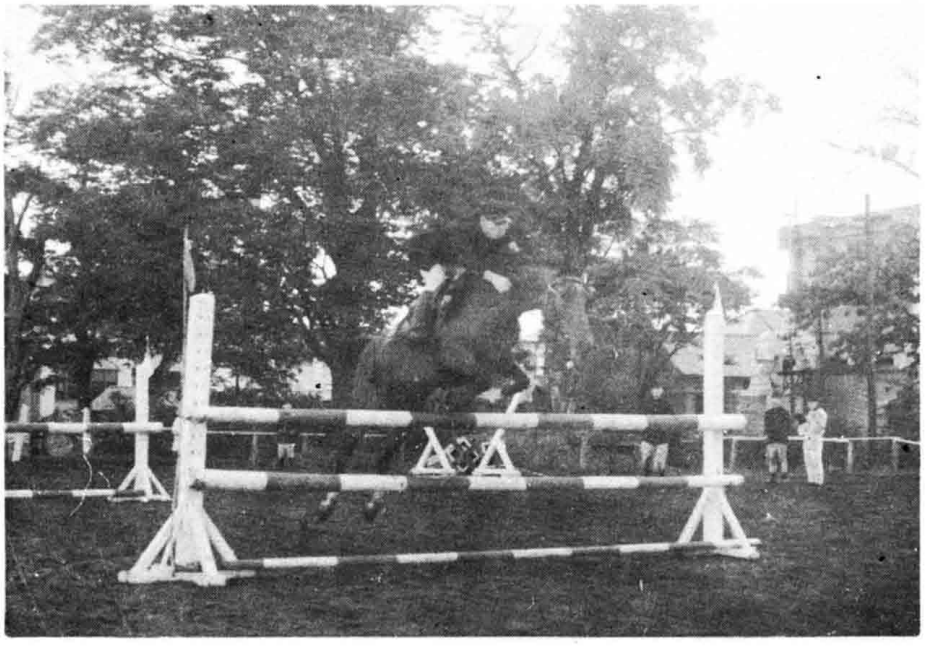
結実せず！

チ　ビ

花に嵐のたとえもあるさ
　　さよならだけが人生だ

道大にて総合に活躍するチビと五十嵐兄

チ　ビ　と　春　田　兄



チ　ビと五十嵐兄

北翔号（旧名　水堂）

昭和３０年４月２０日生　純アラブ

父　　遠汐

母　　溢進

昭和３６年９月入厩

３８年　道大　一般複合

〃　自馬中障　参加

第６回全日本学生自馬対抗競技（於　小倉）

総合　　失権（余力審査にて）

３９年　道大

一般複合　オープン　点数で１位

第１回札幌地区自馬大

複合　　２位

中障

８月　鎌田牧場にて　約２ヶ月特訓

全日本学生自馬大　（於　馬事公苑）

総合　　２３位

４０年　裂蹄の為冬期休養

第２回札幌地区自馬大

複合　　２位

小障　　２位

４１年　東日本馬術大会

バルクード・ド・シャス　失権

指定馬選考会にて、ゴールしたが選ばれず

札幌市民大会　　バルクード・ド・シャス　２位

道大　　小障

第３回札幌地区自馬大　　Ｂ馬場　３位

バルクール・ド・シャス　１位

４２年　東日本大会出場

北日本大会　　総合　中障　六段に出場

北海道自馬大　選抜中障　３位

六段　　１位（１４０ｍ完飛）

道大　　複合　　３位　　選抜中障　　３位

一般自馬中障　　４位　　六段　　２位

4 2年　埼玉国体　出場

全日本学生王座決定戦　バルクール・ド・シャス　出場

〃　自馬大　22位

4 3年　札幌地区自馬大

中障B　4位

小障　1位

第4回北日本大会（於　仙台）

標準中障　9位

一般バルクール・ド・シャス　8位

札幌市民大会

バルクール・ド・シャス　1位

標準中障　3位

道大　複合　2位

六段　中障　出場

23回福井国体出場

4 4年　道自馬大

道大（於　帯広）　出場

4 5年　2月12日　離厩

北大農学部所属高実験牧場へ戻される。

〃北翔号離厩についての経過御報告〃

太田清澄

一月末日（予定）をもちまして、離厩の余儀無きに至りました北翔号に付きまして、その経過を簡単に御報告申し上げます。

御承知の如く、父に遠汐号、母に溢新号を持つ、純アラブ種として今日では非常に貴重な存在となり、この点に付いて研究材料として日高の当大学附属牧場から再三再四条件付き返済の要望がありました。

私なりきに、牧場側から示されました諸条件、亦北翔号の年齢（十六才）、現在の部の馬匹、強いては不振の原因等々を考え合せました結果、北翔号そのものには未だ未練も残りはしますが、敢えて離厩を決意するの気持に至り、部員の総意を得、これを決定致しました。

今后、この条件（当牧場で生産される中半、血種、或いはハンター種の二才或いは三才馬の馬術部への入厩経路が或る程度形式化され得る事　の上に立ち、現状を打開していくことが、北翔号の意に報いるものと確く信じて居ります。我々に続く諸兄（それは少なくとも数年と云う歳月を要するものかも知れぬ）に大いに、之を期待するものであります。

北翔のこれからの日々に幸い多かれと望まずにはいられないー。

それは北翔号にとり、馬場で死ぬ事が最大の幸せであったかも知れぬー。

亦、それは青い空と緑の地の中に果てる事が一番の幸せであるかも知れないー

それは私には、測るべき術もない。

併し、私は今一心にこれを願う。〃北翔号よ元気で〃と。

最後に簡単なメモを付して、この文の終りと致したいと思います。

〈返還先〉　北海道静内郡静内町御園
北大農学部附属実験牧場

水堂号（北翔号の正式登録名）

昭和30年4月20日生

牝・鹿毛

- 水堂
  - 父 遠汐（アラ）昭23
    - 輸入（シリヤ）フアヘッド
      - Mahnagi Sberi
      - Kuheilaan Kharass
    - 師芳
      - 輸入（洪）オーバーヤン五，六
      - ユハイランシー
  - 母 溢新（アラ）昭19
    - 輸入（仏）ニーフアン
      - Norniz
      - Ni fa
    - 逸入
      - 輸入（シリア）エルワルド
      - コハイランエッチ

〃チビ〃回想録

佐合義弘

先日部員の方から電話があって、「チビ」事北翔がいよいよ前に住んでいた日高の牧場に帰ることになったとのお知らせをいただいた。

早いもので私が北大生協から、市民生協に移籍してすでに四年の歳月が流れている。今又、「チビ」が北大から去ると思うと何か旧友が一人居なくなる様な一抹の淋しさが胸にせまる感がする。

私の記憶が正しければ「チビ」はたしか三十六年の夏頃日高の牧場から北大に下りてきたと思うのだが？

さて、「チビ」が北大馬術部に来た頃の事を考えると、長い間馬術部の部長当時理学部の部長でもあられた太泰先生と農学部の畜産の松本先生との部長交代時期でもあった様に記憶する。

何れにしろ、私は松本先生から「純血」だぞといわれてさぞ立派な風格の馬だろうと想像をたくましくして勝手に「チビ」のイメージを作っていた。

日高から馬が来たという部員の知らせで早速部に行ってみておどろいた。「チビ」には申し訳ないがこれが馬かと思って目をこする程だった。皮膚炎で「シッポ」は二つまみ程毛があるだけ、タテガミの附近から後肢の内マタまでひどい「シッシン」の様であった。これが純血かと思い第一印象は「貧乏貴公子」といった所かな。

しかし、市川君の努力でだんだん馬になってきた。特に伸張速歩は純血アラブの風格が現われていた。その后浦河の鎌田氏の所に行ったり、ねむり狂四郎事高橋君、首藤君、五十嵐君等のたゆまぬ努力で見事な、しかも部の為によく稼いでくれる馬になった。

「チビ」は実に神経質であった。鞍をつけるにも非常に気をつかわねばならなかった。神経質は逆に云うと非常に敏感であると云う事でもあろう。捲から口へ、又脚に対しては極めて敏感であった。だから乗る人が馬と同じ神経質だとしたら馬は落ち着かずいつもおどおどしてガタガタ、ガタガタする。その点から云うと高橋君は「チビ」に最も適していた様だ。先ず体重が軽く馬に負担が軽い。技術的にも鎌田氏からかなり教えを得た。何よりも馬を尊ち着かせる事は、抜群にうまかったと思っている。

「チビ」は又事故が多かった様に思う。夾てすぐに装蹄で長い間休ませたし、今に書いた様に皮膚炎は時期になると必ず発生した。とにかく部で多くの馬を扱ってきて「チビ」程手のかかった馬は後にも先にもないであろうと思われる。ともあれ、楽しい、又つらい、そして多くの思い出を部に残してくれた「チビ」を今一度思い出して「チビ」とわかれよう。

チビよ！さようなら。

日高に帰って
元気ないい子を生んでくれ。

「チビと共に」

春田恭彦

僕にとって北翔はいわば初恋の人である。もともと不精な僕が、彼女をみそめた最初の動機は、ちっちゃくておとなしい、面積が少ないからブラシをかけるのが楽である。肢は他の馬のように操まなくてすむ。飛び乗りが楽である。といった具合のいともはずかしい次第であった。

一年生のころ朝清と北揚にしか乗せてもらえなかった間、我々の同学年の仲間は、それぞれ、将来の自馬を決めていた。即ち、田中力は北飄、カツオは北農、村井は北瓔、寺崎は北葬、春田は北翔と。そして、練習の時、我先きにと部室を飛び出し、それぞれの馬の鞍をかかえて馬繋場へ走ったものである。我々の間でそのように心の中で決めた自馬の手入れを他の人にやられることは最も恥ずべきことであるように感じられた。そういう中で、おそらく上に書いた理由でチビは一年生の間で人気があった。この馬の手入れを僕がする権利を堂々と主張するためには部室を出る時間が点呼より十分は早くないといけなかったように記憶している。タッチの差でその権利をとられた時など視線が火花を散らす。

チビとのつきあいはそんなことからはじまった。二年目になって北翔の調教助手と云われた時、心の中では当然自分だと決めてはいたものの、これほどうれしかったことはない。そしてチビに乗って出た最初の競技会が春の酪大戦であった。今考えれば、愉快としか思えないが、当時は思い泣きに泣いたものであった。オーバーなとお考えの向きもあるかも知れないが本当である。小障碍の最終のい前でその事件が起った。そこまで快調に無過失で来て、さあ、あとひといきという時、飛びあがるはずの馬が、飛びあがらない、僕のからだは前につんのめっている。チビの胸に障碍が当った。その時彼女は肢にまつわるバーを払うために飛び上った。賢明たる読者はここで私のからだがどうなったか推察することができよう。男にしかわからないこの痛みをこらえながら最終を飛びゴールを切った。

最後のデートは福井国体であった。全部失敗して、おまけにからだをこわしてしまった。その時の日記にこんなことが書いてあった。

部員や全ての関係者の期待に、全く応えられなかったばかりでなく、馬術部生活の変歴が空虚に思われた。

そして今までの偽りの自信と誇りが、互Oの如くくずれ去り、希望の光明すら見出すことができず、心中暗としたまま福井を去る。チビにすまなかった。

それからはほとんどチビには乗っていない。失恋した男が恋人に会いたくないように、何となく彼女が僕の接近を嫌っているように感じられた。

試合に勝って喜んだ時、負けて惜しかった時、いつもチビが横で笑っていた。「こんな良い馬に乗って、あんな成績か」「勝ったのは馬が良いからでおまえが良かったからではない。」という声がいつも耳を離れなかった。

日高の牧場で道産子などに乗っている時、無精にチビに乗りたかった。そんな時二年前の夢がよみがえった。それはとうとう夢で終った。あまりにも現実と離れたものであったから。

いつだったかチビに最愛の人を乗せてポプラ並木を歩いたのも楽しい思い出の一つである。

チビが北大馬術部に果した功績を語る資格を僕にはないように

思う。いえることは、チビが僕にくれた全てを北大馬術部に還元しなければいけない。そしてチビに有がとうと云わなければいけない。

北海道大学馬術部名簿

歴大部長

氏名		住所	電話	勤務先
永井　一夫	初代部長	札幌市南2条西12丁目	21－2435	北大名誉教授
高松正正信	第二代部長	（東京OB）		
黒沢　亮助	第三代部長	札幌市北1条西22丁目	1－1057	江別市西野幌酪農学園大学教授
太奈　康光	第四打部長	函館市湯川市2の8		函館高専校長
松本　久善	第五代部長	物故		
半沢　道郎	現部長	札幌北上6条西12丁目	22－2269	

特別後援会員

氏名	住所	電話	勤務先	電話
野間口英喜	東京都杉並区水福町335	321－7617	日航ホテル社長　川崎日航ホテル社長	571－4911 川崎4－5941
染谷　五郎	札幌市豊平3条4丁目	81－8456	染谷商会社長	81－0628
滝沢　政雄	旭川市パルプ町1条4丁目国策パルプ第一クラブ内		日本造材社長	
原島　つる	札幌市北2条西27丁目	62－1451	原島洋装院々長	
庄内　貞大	〃　白石中央53の3	86－2504	歯科医	
武田　忠幸	〃　南6条西20丁目	56－3286	北都ハイヤー北都バス社長　都会議員	71－7214
小野　忠	〃　北18条西5丁目	72－1526	北大モータース社長	73－4321 71－1111 内　629
片寄　藤	〃　北18条西6丁目　静山荘			
富樫　英治	〃　北3条西16丁目	62－3840		
佐合　義弘	〃　琴似町8軒3条東3丁目651	63－5744	市民生協本部　桑園店	62－1181
稲垣　新一	〃　南5条西26丁目	56－1781	稲田屋（雑貨）	
原田　与作			札幌市長	
堀内　寿郎			北大学長	
高橋留次郎	札幌市北14条西19丁目札幌競馬場内	3－5860	札幌競馬場	
加藤　和男	東京都太田区南馬込6丁目29－1			
田中　昭志	札幌市北17条西15丁目　佐藤マンション2号	73－8487	札鉄	

氏　名	住　　所	電　話	勤　務　先	電　話
岡沢　尹大	札幌市南1条西23丁目　米屋方	61−9558	北大理学部大学院（高分子学科）	71−2111 内 2755
沢田　商店	〃　北9条西4丁目		自営	
酒井　　保	〃　北27条東3丁目		北大獣医学部教授	

卒業生

氏　名	卒業年度	住　　所		勤　務　先	電　話
中野友二郎	昭4 農農	南多摩郡多摩町桜ケ丘3丁目33−4		科学教育研修センター	
平山　常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ケ谷町1222の19		日本海事興業	
中谷　勝紀	5 工機	杉並区桃井1−15−23			
間　　克市	6 農畜	千葉県葛飾郡鎌ケ谷町発522		地方競馬全国協会参与	
岩垣　駿夫	6 農農	新宿区百人町4−420新宿住宅RA−15	368−3530	東京農工大教授	(0423)61−3311
河崎　秋三	6 農畜	八王子市高倉町1552		東京都八王子競馬場	
藤居金太郎	7 農化	ブラジル・サンパウロ在住		漁業	
永松　四郎	7 農畜	太田区千束町1−58−9	717−3484	永松商事	(717)3484
半沢　道郎	8 理化	札幌市北6条西12丁目	22−2268	北大農学部教授（現部長）	71−2111内2512
武田　朝男	8 農畜	目黒区中目黒5−18−12	714−7015	日本製酪協同組合	(433) 5754
東園　基文 （7主）	9 農農	目黒区五本木3−30−1	711−8877	宮内庁待従職参事	(400) 0451
田畑　武夫	10 医	札幌市南5条西2丁目		田畑産婦人科病院長	
久葉　　昇	10 農畜	兵庫県多紀郡城篠山町郡家875−1		神戸大学農学部教授	
植村　勘一 （8主）	10 農畜	目黒区鷹番町45	712−0390		
本田　桓康	10 工機	千代田区紀尾井町4−11	262−5524	プレス工業KK常務取締役	(044)26−2581
加藤　英夫	11 医	札幌市平岸2条3丁目166	82−0266	朝日生命札幌支社	24−9281
高杉　直幹 （9主）	11 理化	札幌市北7条西13丁目	24−3720	北星大教授	
藤田代子郎 （10主）	11 農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸6366			
大迫　明徳	11 理化	世田谷区宮坂1丁目14−9	428−4817	バイエルン・ジャパン	432−4251
吉見　一郎	11 農経	北多摩郡狛江町小足立620	489−0491	雪印乳業取締役	353−3111
渋谷　周平	11 農畜	渋谷区代々木1−22		（社）日本アイスクリーム協会	

森山　武雄	1	医	青森県南津軽郡浪岡町		国立岩木療養所所長	
滋賀　秀明（11主）	12	医	港区芝白金三光町364	441－7844	大同製鋼KK東京診療所長	901）－4169
小村　達夫	13	農生	岡山県吉備郡足守町足守861		岡山大学教授（理学部長）	
高井　久芳	13	農畜	札幌市琴似町8軒351の1道公安		道庁農務部改良課	
前川　静弥	13	理化	室蘭市新富町1の6番14号社宅番外14号	2－9211内305	日本製鋼室蘭製作所研究副所長	室蘭2－9211内305
山下　正亮（12主）	13	農畜	札幌市白石町本通818－135		酪農学園大学教授	
石井　昌長	13	農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地14－105	（0433）62－9785	アルコール海運倉庫KK	
小笠原義頭	13	工電	川崎市宿河原2223	044）82－360	日本電気KK放送機事業部長代理	
桶本　勝登	13	農経	杉並区上荻窪1－197	391）－5383	人事院関東事務局長	（581）1731
松平　悌	13	農農	渋谷区恵比寿4－19－24	473）3920	日本農産加工KK白岡工場長	
黒沢　良雄	13	農経	茅ヶ崎市浜竹4－6－30		日本長期信用銀行	
小田　昇	14	農畜	伊東市宇佐美2787		ホテル　カスガ	
池内　武夫（13主）	14	農畜	世田谷区若林4－22－5	414）0361	日本中央競馬会理事	591）～5252～8
中尾　敦司	15	工鉱	千葉県船橋市習志野台1の964－8		大日本鉱業	211）－2671
西村雅吉（14主）	15	理化			北大水産学部教授	2－0311
大谷清喜貞	15	農実	金沢市片町2丁目2番地20号木谷ビル	21－5041	瓦十建（自営）	
石井　和彦（15主）	16	農畜	鳥取市湯所町1の307		鳥取大農学部教授	
河原　清作	16	工土	小樽市忍路町塩谷村		自営	
熊沢		農実	十勝国河東郡士幌町士幌		上幌農協	
関　義人		医	秋田県湯沢市西松沢392		関内科小児科医院	3200
高木　史郎		工鉱	茨城県東茨城郡茨城町1084		県立波崎高等学校校長	3377
中曾根　賢		農実	室蘭市常盤町6番24号		胆振支庁産業課長	
林　健弥		農実	札幌千稲福井49の13		ホクレン米穀事業部	
半沢　宏		工機	札幌市北6条西12丁目	22－2286	北大工学部　授	
伊関　悦郎		工鉱	函館市宮前町213		函館水産高校	
門池　正夫		農実	名古屋市千種区丸山町3－24		旭化学工業KK社長	
秋吉　照忠		農林	札幌市真駒内曙町1－1－1	58－0415	北海道合板工業組合	24－5845

氏名		住所	電話	勤務先	電話
福光　幸彦	17	医　札幌市南7条西4丁目	23−1843	福光延寿堂院小児科	(代)25−3211
岡田　光夫		工木　〃　南7条西22丁目	23−3750	札幌市役所土木部長	(代)71−2111
(16主) 石川　恒		農畜　〃　北28条東3丁目		北大獣医学部教授	
白鳥　善三	17	農実　弘前市大字薬師堂熊本19の2		大成軽ブロックKK社長	
小林　五郎		工電　神奈川県中野大磯町東町2の64		沖電気工業特殊機器開発部次長	452−4111
山根　乙彦		農畜　鳥取市湯所町2の422	23−2573	鳥取大農学部教授	
前田　正義	18	農実　名古屋市端の穂区弥富町紅葉園78		雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸　進		農林　砂川市三砂町9		三井木材KK砂川工場長	
小池　栄一		工土　札幌市藻岩下475	58−2290	北海道電力	
平井　宏和		工電　町田市玉川学園8−18−9	(0427)32−8689	日本電気KK衛生通信開発室	(044)41−1111
安部　孝	19	工電　小金井市菊井北町3−19−5	81−4100	品川区小山1の4の35高見沢電気製作所	
坂井　弘		農化　福山市東深津町290		農林省中国農業試験場	
田口　暢茂		医　札幌市北22条東18丁目		道立千歳病院	
稲葉　恵一		農化　大阪府高槻市天神町2の16の15	5−2759	日本油脂KK	
福岡　邦泰		農農　札幌市琴似町宮の森19		道庁総合開発企画部	
大手　英夫	19	理化　新宿区西大久保2−219	(365)4523	東邦シートフレームKK	(272)2811
富塚　治郎	20	農畜　東京都青梅市新町都立種畜場内		東京都立種畜場	
岸田　吉三郎		農化　不明			
羽鳥　栄治		工土　東京都杉並区大宮前6丁目453		鉄道開発公団海峡線調査部	
小林　正英		農畜　杉並区阿佐ケ谷北3−26−10	(339)0869	東京都農業試験場	(0425)24−3491
木全　幹雄	21	農化　東京都杉並区清水1の6−8		自衛隊陸上幕僚監部	
山崎　治雄	21	工治　布施市西堤623狩勝工業		大阪市城東区放出町2179狩勝工業	
宇津見　千之助		農畜　栃木県小山市横町2206			
上野　新次	22	農農　新潟県加茂市赤谷		県立加茂高校	
和田　晴		農畜　稚内市潮見町1丁目	3−4377	宗谷支庁経済部長	2−2510
宮崎　利昭		工機　在ペルー		第一物産KK	
武田　祐幸		現地			
田之上家久	26	農水　東京都三鷹市牟礼公団住宅三鷹台団地10−104		日本放射線同位元素協会	

後藤　義英	農獣	札幌市円山西町２の９７		札幌市衛生部	
斉藤　善一	農畜	弘前市若党町７９		弘前大学農学部教授	
鈴木　敏夫	農畜	空知郡江部乙町江部乙高校公宅		江部乙高校	
渡植貞一郎	農畜	前橋市岩神町２８０群馬大学医学部内分泌研究所		群馬大学	
焉野　保		北海道標津郡中標津		北海道農業試験場根室支場	
永井　重翁	農獣	水沢市新小路２番地雪印乳業KK水沢工場		雪印乳業KK水沢工場	
梶谷　晴男	農水産	大阪府牛野区新今里町５の１７		大阪化学合板KK	４８１－４４３３
吉本　正	農畜	仙台市惹巻中才１３の７		宮城県農業試験場仙台市原町小田原桝江２９	
古谷　昌司 (26 27 主)	農畜	浦和市別所３－３８－１０	(0488) 22－5073	古谷製菓KK技術部	(0488) 31－5873
下敷坂　隆	農畜	中野区白鷺２－１７－３　和田方	(３８５)　３２６９	日本練馬登録協会	(４２９)　５６８４
佐藤　厳	農畜	川崎市岡上５１０－２８		雪印乳業KK技術部	(268) 3111内588
福島　務	２９　医	札幌市琴似町１条６丁目	６２－０８５１	北大産婦人科教室	
阿部晃一郎	工鉱	新居浜市角根山根西		住友金属鉱山新居浜市端出場	
鎌田　正人 (28 29 主)	農畜獣	浦河郡浦河町西幌別	浦河３－２８４	KK鎌田牧場	
田中　浩	工治	大阪府高槻市安岡寺町４－２７－２６		神戸製鋼KK	
正富　宏之	理勤	美唄市光珠内町３区		専修大学美唄農工短大	
斉藤　成俊	３１　農経	札幌市北１条西３０丁目円山公宅３号	６２－４７７０	北海道信用農工連	
佐伯　和夫 (旧石塚)	獣	白老郡白老町萩野第三石山		昭和工業KK	
大久保利彦 (３０主)	獣	天塩郡豊富町公営住宅２１－３		雪印乳業KK幌延工場	豊富７６
加藤昌太郎	理物	国分寺市西町４丁目けやき台３１－１０３	(0425) 22－0596	防衛庁陸上葛僚監部	
加藤　元	獣	杉並市久我山３－７－２７	(３３４)　１２８６	ダクタリ動物愛護病院	(３４４)３５３６
千田　哲生	獣	東京都調布市小島町６３４	(３３４)　１２８６	中央競馬会競走馬保険研究所	
岡本　洸	農生	草加市草加松原団地 D５８－２０４	(0489) 3－9407	十条製紙KK東京事業所	
荒川　清	３２　経	札幌市界川町４９５	２２－４６５２	札幌トヨタ自動車KK	２１－８１９１
榎本　幸人	理植	淡路島津名郡淡路町岩屋神戸大学理学部岩屋臨海実験所			
岡部　満雄	農畜	札幌市真駒内南町１丁目道公宅第４アパート		道庁酪農草地課	
斉藤　実	経	富山市高原本町９６		不二越鋼材工業KK	(０４５)７３１－１２６１
宮沢　寛 (３１主)	農林産	逗ふ市山ノ根３－１２－１０	(0468) 71－2487	日本揮発油建設部	

氏名	卒業年度	住所	電話	勤務先	電話
伊藤　亮	33　獣	岡山県新見市上見谷		新見牧場実験宿舎	
松田　瓔	医薬	静岡県三島市谷田国立遺伝学研究所			
乾　直道	理勤	藤沢市辻堂新町2丁目4の22	(0466) 36—9162	ガン研究所病理部	(418)0111 内472
栗原　康	工鉱	東京都北多摩郡久留米町上の原204		通産省貿易振興局経済協力部技術協力課	
渡辺　俊弘	工応	上尾市大字上字堤下359上屋シラコバト公団アパート17—4015		北炭化成工業KK	(0484)41—2880—3
柴田　久男	工電	札幌市手稲町西野937	66—8709	北海道電力火力部火力工事課	25—1111
今田　哲	農化	西宮市甲東園2—85　武田薬品研究所		武田薬品	
生田　勝一 (33年)	経	札幌市苗穂町43		読売新聞	
菅原　照雄	文哲	〃　北4条西6丁目北4条アパート903		毎日新聞	
土井　敦	農畜	〃　手稲町字前田		ホクレン	24—3211
山本　智	水	樺戸郡浦臼町内14区		浦臼高校	
粟津健太郎	水	札幌市南1条西17丁目	62—0701	銀座屋パン	
村山　哲	経	倉敷市浜の茶屋1—5—22		本田技研工業	23—0300
樋口　正明 (32年)	法	世田谷区上馬5—23—8		東京都人事委員会任用部試験課	(212)5111 内4081
千葉　幹夫	獣	世田谷区弦巻町5—29		中央競馬会馬事公苑	
中村　美幸	経	中野区鷺宮6—19—19	(919)2443		(0480) 2—0131
佐伯　雄二	35　農畜	群馬県館林市大字成島2544森永社宅			
本橋　幹久	農畜	在サンパウロ			
奥野　静子 (旧片山)	文英	札幌市北2条西23丁目片山方	61—8414		
小長谷善高	水	長崎市西坂町1番地NHK長崎放送局放送部		NHK．TV	
田中　紀介	農林産	清永市宮代町6		富士合板KK研究所	清水34—1271
最谷川邦夫	法	立川市砂川町692江の島東団地250		岩崎通信機KK経理課	
門奈　駿	医	茅ケ崎市旭ケ丘13—4	(0467) 82—5746	国際興業空航サービス部	
森本　悌次 (34年)	農林産	葛飾区高砂7—1—14好美荘		森下木材KK営業部	
稲垣　修一	36　理化	愛知県知多郡阿久比町白沢みのかけ10の10		大同製鋼中央研究所	
佐藤　典子 (旧佐藤)	医	札幌市北36号西3丁目栄久荘（アメリカ留学中）			
高林　靖子 (旧高橋)	医	横浜市磯子区岡村1町228	751—4431		(583) 6871
河原　紀夫	理地	府中市白金台6—2—28		アジア航測KK	(661) 2171

湯浅　正之		農畜	武蔵野市西窪４１１伊藤忠三鷹寮	(0425)５０９５	伊藤忠商事KK畜産課	(６６１)２１７１
吉田　亨		工商	八王子市打越町７１５－２０３		砂砂熱学工業KK技術部	(２５１)７１２１
千葉　祐紀	３７	農畜	北九州市小倉区篠崎字松川原２の６１２		雪印乳業小倉営業所	
(３６主) 広岡　暢夫		農畜	茨城県西城郡岩間町金販連内			
森　広幸		工衛	名古屋市北区辻町２－３６大隅鉄工所第一寮		大隅鉄工所	
四柳　智久		医薬	目黒区大岡山２－５－２３　若竹荘		東大薬学部製剤学教室	(812)2111内7271
木塚　信次		農畜	杉並区久我山３－２－２４	(３９２)３８２５	湘南食品KK研究室主任	(045)871－1921
伊藤　公一		医	札幌市南２５条西１２丁目		北大医学部	(561)1111 607
大場　善明		文史	足立区栄原町１５５５鶴巻団地１４－１０４		読売新聞広告部	(２５１)０１９１
(３５主) 鶴見　好博		理化	大田区大森北３－１１－７		三菱江戸川化学KK研究所	(３６８)０１８６
小島　杏介		水	横浜市神奈川区菅田町２８７２		淀橋保健所	
小山　毅		教	東京都中野区南台５の２７の１の１３４		専修大学文学部	
市川　瑞彦	３８	理物	札幌市北１３条西４丁目　久道方	７３－０９２１	北大教養部物理教室助手	
(３７主) 小出　秀達		医			北大病院精神科	７１－１１６１(内)３０３
宮崎　健		文畜	横浜市港北区日吉町１２８サンケイ日吉住宅		産経新聞	東京２３１－７１１(内)７２０
玉沢　一博		医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田１０１３の２	(0488)82-3436	山之内製薬KK中央研究所	
岡田　征至		法	世田谷区給田町７９３　晃荘		北海道拓殖銀行築地支店	(５４３)１０１１
志水　一允		農林産	横浜市港北区日野町５７９１藤ケ沢住宅６－４０８		農林省林業試験場	
清水　洋		農畜	横浜市南区日野１０－１０４		畜産局食肉鶏卵課	(５０１)３７６６
原　重一		農農	横浜市港北区日吉本町２０９６日吉第三コーポ４２	(0446)1-8226	交通公社調査部	(２１１)３２１１内３５７５
堀川　芳男		農畜	中野区上高田２－１６	(３８５)８６８５	アメリカーナ・コーポレーション日本支社	
実吉　峯郎		医薬	渋谷区長谷戸４６	(４６１)５５５０	国立ガンセンター研究所	
新原　輝久		理地	北多摩郡狛江町泉１２８４		アジア航測KK	
田中セツ子		農工	世田谷区玉川奥沢３－１２１	(７０２)１３６５	高千穂交易KK	(２９４)１９５１
恩田　正臣	３９	農畜	愛知県岡崎市細川町農林省種畜牧場内		農林省岡崎種畜放場	
横沢喜美子		薬	東京都杉並区清水３丁目１５の２			
(旧入江) 小林則子		農畜	北幌市北３６条東６丁目	７２－０５２５	天使女子短大	
(旧寺江)						

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
八木　正己（38生）	40　理生	札幌市琴似八軒5条東1丁目		札幌市役所造園課	
野田　行文	獣	東京都練馬区中村3－36中外製薬中村寮		中外製薬KK総合研究所	(987)－7111
大木　誠示	理数	(東京OB会)埼玉県与野市大戸439芝崎アパート		雪印乳業KK	
吉田　賢一（旧御坊田）	工冶	(　〃　)横浜市南区大久保町599－2第二北斗寮		日本揮発油KK	
守屋　正	工精	(　〃　)太田区田園調布2－40第一桜ケ丘寮		三菱重工業KK東京製作所	
藤原　雅典	経	札幌市石山五区　前川正一方		日立製作所	
滝沢南海男（39生）	理植	〃　北29条西5丁目　めぐみ荘		北大(教養生物教室)大学院	
松永武彦	工電子	東京都小平市上水本町1503誠心寮		日立製作所武蔵野工場	
水野　佑彦	40　理化	札幌市北24条西4丁目　朝日荘		北大大学院(理学部化学科生物化学)	
横田　肇	工化	瀬棚郡今金町栄町284まるびしアパート		明治乳業今金工場	今金9・339
菅野　弘	農畜	室蘭市幸町119　胆振支庁農務課畜産係		胆振支庁	(代) 2－9131
牧　竜子	薬	札幌市南1条西19丁目		札幌医大中央検査室	
滝沢　迪子	文独	〃　北11条西5丁目		北大文学部	
松尾　英彦	41　水漁	在カナリー諸島(スペイン領)		日魯漁業	
八木多賀子（旧八木）	文哲	札幌市琴似町八軒5条東1丁目			
大堀　慧子	法	〃　北10条東8丁目		北大法学部	
黒沢　道雄	工機	〃　北15条西2丁目相田方	72－3833	北大農業工学研究生(農業機械)	
高野　文彰	農農	(東京OB会)			
小栗　紀彦（40生）	42　農畜	札幌市北39条西5丁目	72－7960	北大大学院	内2544
近藤喜十郎	文史	名古屋市中区大須3丁目31の23		自営	
高橋　昭夫	獣	野付郡別海村農業共済組合家畜診療所		別海村農業共済組合	
八木沢守正	理生	目黒区大橋1の8の5目黒第5コーポラス2f I205			
山村　勝	農林	米沢市東3丁目4－60	25－3586	山形県庁	

加藤　正昭	工衛	大阪市都島区東野田町１丁目２番地１号先		平田家具　京橋店
（41主）田中　倬	医	札幌市北３８条西２丁目２２番地工藤マンション		
阿部　勝彦	43　農林	静岡県富士市大昭和製紙社員クラブ		大昭和製紙
五十嵐　章	法	札幌市北１条西２７丁目くずおか方		モービル石油
（42主）池田　統洋	工機	福島県双葉郡浪江私書箱１２		ゼネラルエレクトリックテクニカルサービスカンパニー原子力事業部
入江　圭	工衛	東京都世田谷区成城町８３		都庁
高倉　宏輔	獣	野付郡別海村中西別別海農農協中西別家畜診療所		別海村農業共済組合
降旗　正忠	工電	東京都中野区上高田1の43－17三菱電気上高田寮		三菱電機
仙波　和子	教			
山本　明	経	大阪府枚方市朝日丘町１０番４９号　枚方田宮三洋寮１号館５０３号室	41－9612	三洋電機
浜岡　秀洋	工機	大阪府寝屋川市東大利６の５　浜明男方	21－2509	三洋電機
斉藤　勝雄	44　農機	札幌市澄川１２		ホクレン
田中　力	獣医	岩手県花巻市石神町７６番地雪印乳業花雪寮		雪印乳業花巻工場
春田　恭彦	畜産	札幌市北２４条西３丁目　加藤正昭方		
（43主）村井　弘一	畜産	帯広市東７条南６丁目　快適荘		帯広市 西１２条北１丁目共同飼料帯広サービスステーション３－７３９１
山本　進	水産			
寺崎　弘恭		大阪府豊中市刀根山４の９８　近藤方		
今井　雅子	45　農化	札幌市北３条西１５丁目	(63)1621	
小野　政則	農林学	大阪市住吉区北島町２１０永大若葉寮	(685)1055	永大産業
加藤　公敏	理化	札幌市北１８条西５丁目五月荘		
橋口　庸	医	〃　北２３条西７丁目　土田方		
本田　徹	医	〃　北１９条西２丁目　佐藤方	(71)1991	

現役部員

氏名	学年	学部学科	現住所	帰省先
太田　清澄	3	農農	札幌市北２３市西８丁目ニューハウス　７２－１９２８	長野県松本市宮渕２丁目６－１５
児　秀世	2	獣医	〃　北２７条西２１丁目	同　左
中寺　清久	3	工機	〃　北１１条西２丁目前田方	福井県田川市本町８－４
松井　亮	2	医進	〃　北１９条西２丁目仲尾様方　７３－４０２０	石川県金沢市小立野４－４－７１
松永由可里	3	理生	〃　北１５条東４丁目佐藤方　７３－０８４８	札幌市手稲町山口市営住宅１の３２号
今井　敏郎	1	教理	〃　北３条西１５丁目　６３－１６２１	同　左
大見　太一	2	文文	〃　北１８条西６丁目静山荘	福岡県北九州市八幡区久喜町１丁目
樹村　哲世	2	獣医	〃　北１８条西６丁目静山荘	大阪府藤井寺市小山藤美町９－４
寺島　亨	1	教理	〃　北２０条西５丁目中島方	宮城県仙台市八木山松波町１０の１８
中村　眞一	2	水産	北農寮	神奈川県川崎市下作延３３４
榊井　明	2	工鉱	札幌市北２４条西３丁目加藤正昭方	大阪府東大阪市鴻池５３３の３
大沢　芳夫	1	教文	〃　北１８条西６丁目関アパート	名古屋市千種区西坂町４の２３
小島　京介	1	教理	〃　北１４条東５丁目金谷方　７４－２４７８	群馬県高崎市見沢町３７４の３
小林　英一	1	教文	〃　北１４条西１５丁目門間方　７３－００５５	旭川市５条８丁目右５号
嶋田　豪	1	教理	〃　北１７条西８丁目恵迪荘　７１－３４１３	大阪市都島区東野田町４－２３
武石　悟郎	1	〃	〃　麻生町４丁目１７－５　７３－０９５５	同　左
田崎　拓昭	1	〃	〃　北２０条西５丁目中島方	鹿児島県曽於郡末吉町岩崎３６１３
近森　廉坊	1	〃	〃	高知県高知市白石町３丁目７－３５
西村正二郎	1	〃	〃　北１７条西８丁目恵迪寮　７１－３４１３	山口県宇部市厚南区妻崎
前田　和子	1	教文	〃　北１８条東８丁目西井方　７１－８５６２	旭川市旭町２条３丁目
宮　覚	1	教文	〃　北２０条東４丁目北沢方	長岡市土合４丁目３番３６号
山下　秀樹	1	教文	〃　北１９条西６丁目小池荘	東京都太田区南馬込１－３２－１３
横山　豊昭	1	教理	〃　北２０条東４丁目北沢方	兵庫県尼崎市友行字南吹上げ１３０の１４
細谷　卓司	1	教理	〃　北１２条西１丁目三菱学生寮内	東京都保谷市柳沢１丁目３番地１６号

物故者

辻村憲吉	元配属将校
沢田鶴松	昭 4 工鉱
真鍋雅彦	〃 5 農畜
愛甲壓寿家	〃 6 農実
九鬼誠之助	〃 8 農化
岩崎帰一	〃10 工電
前野正久	〃12 農畜
富堅稔	〃14 農実
永田敏雄	在学中死去
下条規	昭14 農畜
石川正吉	在学中死去
菅間威	昭15 農畜
佐藤誠亀	〃15 農実
山本義則	〃15 理化
佐藤誠	〃15 農実
水倉寛	〃16 工土
蛎崎愛男	〃16 農実
小林誠平	〃17 農化 昭17主将
福本途夫	〃17 理化
山本亨	〃19 農農
安達信一	〃23 医医
松本久善	第五代部長 元農学部教授

後援会より

◎　役員の交代について

前号の会報でお知らせ致しました下記役員は、ハガキによる投票にて承認が大多数ですので、決定させて戴きます。

なお、事務局は加藤正昭氏が転勤いたしましたので、春田恭彦（４４年卒）加藤公敏（４５年卒）が担当致します。住所は　来同志ですのでよろしくお願い致します。

名誉会長	堀内寿郎○	（北海道大学学長）
会長	太秦康光○	（函館高等工業専門学校長）
副会長	東国基文	（宮内庁侍従職参事）
	高杉直幹	（北星学園大学教授）
参与	佐合義弘	（札幌市民生協理事）
	原田与作○	（札幌市長）
	武田忠孝○	（札幌市議会議員、札幌乗馬クラブ会長）
	庄内貞夫○	（歯科医）
	大木　○	（日本中央競馬会札幌競馬場長）
	小野　忠○	（自営・北大モータース）
幹事長	岡田光夫	（札幌市土木部長）

◎ 昭和４４年　会計報告及び会費納入状況

（昭和４３年度及び昭和４５年度を含む　昭和４５年度３月末現在）

収入の部		支出の部		
繰越	７５５円	４４年１０月　８日	振替手数料	1,３５５円
会費収入		１０月　８日	ルーズリーフ替紙	１７２円
現金	６６,０００円	１０月　９日	会議費	２９０円
振替	５１,５００円	１０月　９日	会報10号印刷代	3,０００円
（参考）		１０月　９日	ゴム印	８９０円
既納者　１口	５９人	１０月　９日	コピー用箋	１９０円
２口以上	２３人	１０月１３日	封筒	４００円
未納者	１５０人	１０月１４日	ファイル	３００円
未納率	６６％	１０月１４日	スタンプ台	２８０円
		１０月１４日	ゴム印	２８０円
		１１月２７日	書状印刷代	1,２００円
		１２月１３日	ハガキ	２８０円
		４５年　２月２０日	ハガキ	２００円
		３月１２日	切手（３００枚）	4,５００円
		３月２０日	会報11号印刷代	2,１００円
	１１８,２５５円			１５,４３７円
計		残高		１０２,８１８円

（注）　なお、これには東京ＯＢ会々員の分は一部を除いて含まれておりません。

この資金は部からの希望で当分の間現金でおいて欲しいとの事ですので、未だ部への援助はしておりません。援助品目が決まり次第お知らせ致します。

御協力ありがとうございました。

編集後記

二月発行の予定のつもりが、四月になってようやく発行の運びとなりました。

原稿を依頼いたしました諸先輩から、これだけ多くのものを送っていただけるとは、本当の所、思ってもいませんでした。都合上書けなかった方からは、手紙で連絡があり、印刷に間に合ったものは、一諸に掲載させていただきました。

御多忙の所、ご寄稿くださいましたOB諸兄始め、広告取り、その他に奔走して下さいました部員の方々にあらためて深く感謝いたします。

なお、編集にあたった部報小委員会の方々にも大いなる感謝の意を表します。（梶村）

部報小委員
梶村哲世
大沢芳夫
田崎拓昭
前田和子

部報第十五号
昭和四十五年四月発行
発行者　北海道大学体育会馬術部
（札幌市北十七条西六丁目
北大体育会内）
編集者　部報小委員会
印刷所　北大生協プリント部

札幌陸運局認証工場

北大モータース

小野　忠

札幌市北18条西5丁目
TEL (71) 2076

日本中央競場会

札幌競馬場

北14条西19丁目
TEL (72)0461～5

場長　大木　睿

滝沢子古慈
留連百壷欲

御宴会、各種御会合に
御利用下さい——

北海道料理
百壷

札幌市南七条西三丁目
TEL(52)—一四〇九番

太田装蹄所

札幌市菊水北十二

TEL (81) 0851

一人でしんみり
二人で仲良く
みんなでゆかいに

昭和の春　直営

三　　鈴

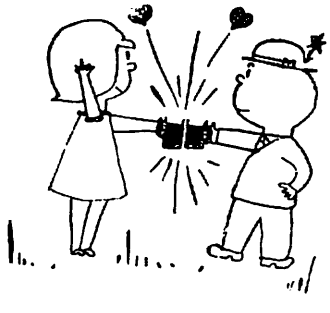
南 5 西 4

営業時間 AM 8：50～PM11：00

◎モーニング　サービス

AM 8：50～AM11：00

コーヒー……50円
トースト付コーヒー……80円
◎ カレーライス……120円
おにぎり（1個）……40円
みそ汁……30円
ホットドッグ……80円



喫茶　ゆうき

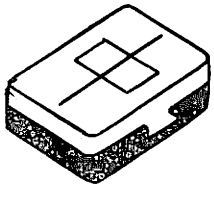
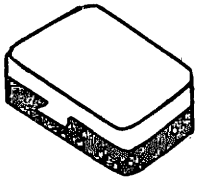
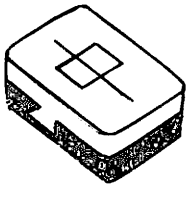
北大正門前　73－0840

最高技術と親切をモットーとする
乗馬靴の御用命をどうぞ

堤　製　靴　店

名古屋市中区丸の内３の１
ＴＥＬ　(231)　２３２３

みんなで行こう

快適に遊べる

雀荘 トリコ

札幌北８西４（トリコロール入る）

パ　ン　の　店

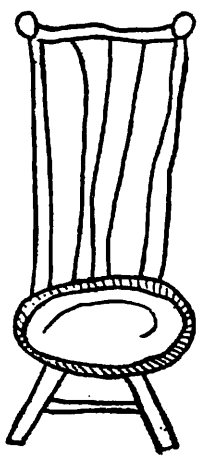
銀　座　屋　GIN ZAYA

BAKERY

Sapporo

本社　札幌市南１条西17丁目
TEL　62－0701
工場　琴似発寒宮の内町８３４
TEL　61－1092

Music & Coffee



銀座

トリコロール

麻雀荘もご利用下さい。

さっぽろ　北８西４（北大正門前）

TEL　(71)９２１９

乗馬用ズボン専門店
松田屋

田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り
TEL (81)7341

おふくろのあじ

まことや

札幌市北14条西4丁目
TEL (71)7494

亭　北　軒

モ　ツ　ラ

札幌市北１６条西４丁目

ＴＥＬ　(71)６４５０

ジンギス専門店

義　　経

宴会，コンパにご利用下さい

本　店　北７条西５丁目　Ｔ　71－6801

支　店　北18条西５丁目　Ｔ　71－2359

医薬品総合卸売業

ホシ伊藤株式会社

本社・札幌営業所	札幌市南8条西14丁目	電話代表 ⑤⑥ 6111番
帯広支店	帯広市西6条南6丁目	電話 ④ 5131番
釧路支店	釧路市栄町9丁目	電話 ㉒ 8111番
北見支店	北見市北2条東2丁目	電話 ③ 2161番
函館支店	函館市末広町23番20号	電話 ㉓ 5291番
旭川支店	旭川市2条通6丁目	電話 ㉒ 4746番
滝川営業所	滝川市大町337番地	電話 3603番
室蘭営業所	室蘭市宮の森4丁目3番13号	電話 ④ 2761番
苫小牧営業所	苫小牧市中野町87番地	電話 ④ 2191番
岩見沢営業所	岩見沢市5条東5丁目5番地	電話 ③ 2965番

Coffee Room

aKOW

アコウ

SAPPORO—N 2・W24

TEL 62—3972

Life
北大正門前
T71－3891

乗馬用長靴
スキー・スケート・登山靴
各種靴製造と販売

札専加盟店　**三浦靴店**

札幌市南一条西八丁目八番地　T代㉓0901

お酒飲みたし　おチョコなし
ビール飲みたし　グラスなし
カクテルしたし　器具はなし

アメリカ資本のコーラは絶対に置かない店

沢　田　商　店

北大正門前　TEL (代)74－0088
オオバル

馬　具　　鞄
製造販売修理

中　野　馬　具　店

札幌市北13条東１丁目　石狩通
ＴＥＬ(3)－７８７６

各種飼料取扱

渡辺商店

TEL 71－7034

外科　整形外科
肛門科　レントゲン科
入院　手術応需

河村外科

白石町中白石バス停横
TEL 83－5792

内科，小児科，循環器科，胃腸科

かとう内児科

院長　加藤元道

札幌市白石中央32
（中白石バス停前）
TEL　83－9552

藤田産婦人科医院

院長　藤田八束

札幌市白石中央145
（中白石バス停前）
TEL　83－1019

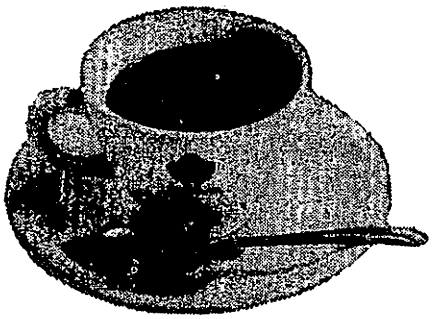
◇貸切バス・ハイヤー　◇車輌整備・中古車販売
◇石油製品販売・損害保険取扱

北都交通株式会社
北都整備株式会社
株式会社北都商会

取締役社長　武田忠幸

本　社	札幌市北30東1	電話71－7214
ハイヤー	〃	〃 71－4181（代）
バ　ス	札幌市篠路町太平	〃 77－2821（代）
整　備	札幌市北30東1	〃 72－7211（代）
商　会	〃	〃 72－8864（石油・プロパン）
		〃 71－4181（損害保険）

世界のコーヒを味わえる店



和洋菓子と珈琲の店
ご会合、ご宴会、クラス会に
サービスの行き届いた当店をご利用下さい。

洋菓子とコーヒー　陸上レストラン
パーラー 石田屋
北3西3道庁前T㊗8005㊡1872